

Z32-B88

金の星

七月号

第八卷
第七号

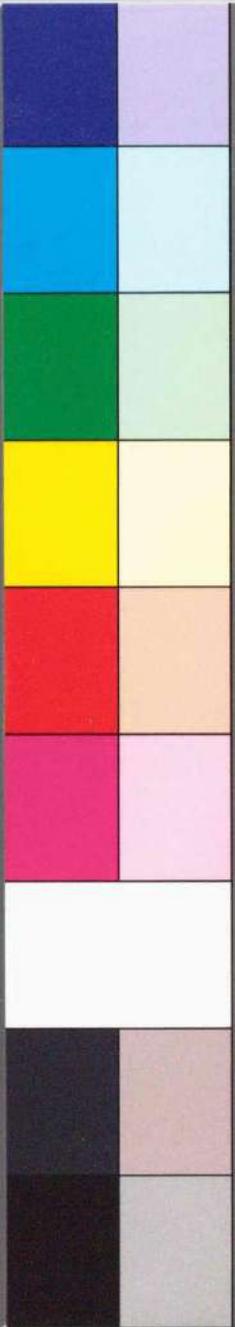


国立国会
3.26
図書館

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007. TM: Kodak

オハナシ

巖谷小波関・鹿島鳴秋著
繪本 邦助・太田 三郎
細木原静枝・岡野 榮
杉浦 非水 畫

四六倍假裝全五册
紙數各册八十餘頁
定價各 壹 圓
送料各 八 錢

童話も
童謡も
昔のことも
今のこともある
面白くて
爲めになる
オハナシ

日本一の噺

巖谷小波 著
岡野 榮・小林 健吉
杉浦 非水 畫

袖珍假裝全三十五册
紙數各册三十餘頁
定價各 貳拾五 錢
送料各 金 四 錢

繪が一頁に
お噺が一頁
繪が踊れば
お噺も踊り出す
これこそ本統の
日本一の噺

オトウキ

巖谷小波 著
太田 三郎・岡野 榮
細木原静枝 畫

四六倍判假裝全三册
紙數各册三十餘頁
定價各 八 拾 錢
送料各 六 錢

歌と繪と
次々に續いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
吾切雀は？
運動會の賞品は！

東京日本橋通
丸善株式會社
大 阪 神 戸 京 都 名 古 屋
丸 善 株 式 會 社
東 京 一 田 三 丸 井 本 丸

カルピス

滋 強 飲 料



一千九百

酒・店・食料品・電器店にあり

世界少年少女偉人傳大系(4) 久米龍一先生著・裝幀・挿畫・鉛本保徳畫伯

リンコルン

リンコルンは、ケンタッキー州の土百姓の家に生れました。リンコルンはどうかして勉強して、豪い人になりたいと思ひましたが、家が貧乏なので、紙一枚買ふ事が出来ません。又お父さんも、リンコルンが勉強するのを厭がつて「百姓の子供に本などは要らない。島へ行つて働け。」と云つて叱りつけました。リンコルンは、晝間は一生懸命になつて、お父さんの手傳をしました。そして夜、皆なが寝静まつてから、蠟燭の光りをたよりに、一心になつて本を読みました。かうしてリンコルンは、遂に大統領となる事が出来ました。又、大統領となつてからの働きも目覚ましいものです。四ヶ年に亘る南北戦争を鎮定し、南部四百萬の奴隷に自由を與へ、遂に反對黨の爲に、劇場に於て暗殺されました。併し、この本には、其等の大事業よりも、むしろ、リンコルンの日常の生活に重きを於て、リンコルンとは一體、どんな人間であつたか? と云ふ事を、難方にも分るようになり、面白く書いてあります。この偉人の言行は、必ずや皆さんの胸に、大いなる炬火を投ずる事とせう。

四六判箱入美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外八枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金星社
振替東京五九五六番

世界少年少女偉人傳大系(5) 三島霜川先生著・裝幀・挿畫・水島爾保布畫伯

太閤秀吉

日本の英雄で最も人氣のあるのは豊臣秀吉です。また日本の英雄として世界に誇れるのはこの秀吉に及ぶ者はありません。實際秀吉は偉い人です。しかし、その秀吉の偉い一生が「太閤記」などといふ嘘の多い本によつて世の中に傳へられてゐるのは残念なことです。い加減な作り話で傳へてゐるために、秀吉の本當の偉さが知られてゐません。秀吉の本當の傳記は、八一倍の涙と苦しみに充ちたもので、成程これこそ、秀吉は偉い」と感心せずにはゐられないものなのです。

三島霜川先生の「太閤秀吉」は秀吉を傳へるものとして、恐らくこれ程立派な本はありません。秀吉の一生をあらゆる歴史書を参考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて書き現したのであります。これ程完全な、そして又讀んで面白い「太閤秀吉傳」はない筈です。

本書一冊は、是非皆さんの愛讀書として備へられるべきものです。御愛讀下さい。

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外八枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金星社
振替東京五九五六番

少年少女世界名篇物語

四六判箱入美本・定價各冊十九錢・送料二十錢

編八第 ミゼラブル (噫無情) (近刊)	編七第 太閤記物語 (近刊)	編六第 三國志物語 (近刊)	編一第 赤穂義士物語 (既刊)
編四第 水滸傳物語 (既刊)	編三第 クオ・ヴァ・ヂ (既刊)	編二第 八犬傳物語 (既刊)	

行發々愈
~~~~~  
皆様のお父様やお母様は勿論の事お祖父様お祖母様の時代からお馴染の彌次さん喜多さんが、到る處に滑稽な失策を演じ乍ら東海道五十三次から木曾街道を旅行したお話です。しつかり頬被りして讀まないと思はれない人があつたら参考までに教へていたゞきたです。この本を讀んでおかしと思はない人があつたら参考までに教へていたゞきたと思ふ位です。勉強に疲れた頭を休める爲の必讀の本としてお薦め致します。

甲田正夫編 ◇ 高坂元三装幀 ○ 挿畫三色版外十數葉

# 第五編 膝栗毛物語

(頁八〇二文本)

東京東上鴨巢 市外 八二込 蘭金社 振替東京一〇七六一番 電話石川五六五番

世界少年少女名著大系(23) 大木雄三先生著・裝幀・寺内萬治郎畫伯

# 青い鳥

世界的名作として有名なメーテルリンクの傑作「青い鳥」は、劇になつたり活動寫眞になつたりして、日本の少年少女諸君にも早くから知られてゐます。チルチルとミチルといふ兄妹が、青い鳥を探しに行くことを書いたもので、一讀すれば成る程世界的名作だけであると感心せずにはゐられない作です。

クリスマスが來ても貧乏なために贈物一つ貰ふことの出來ない木樵の子供が妖婆に頼まれて青い鳥を探す旅に出ます。そのお供をして行くのが、犬、猫、火の精、水の精、パンの精、光の精などで、「思ひ出の國」へ行つたり、「夜の宮殿」へ行つたり、或は未來の國へ行つたりして面白いこと限りがありません。

原作は兒童劇として書かれたものでありますが、それを大木雄三先生がメーテルリンク夫人の書いた「青い鳥物語」を参考にしてお話體に書いたもので、「青い鳥」の紹介書としてこれに及ぶものはありません。

東京東本郷動坂町 金星社 振替東京九五九六番

四六判箱入美本  
内容一九〇頁  
挿畫十數枚  
定價九拾錢  
送料六錢



|         |             |        |            |
|---------|-------------|--------|------------|
| 通角      | 春の野良の歸り路(方) | 力(自由書) | 信          |
| 乳母の日傘   | 五百七號室       | 菊の花咲く頃 | 佐川巡査の話     |
| 妖婆の祈り   | 大觀音(ごん)の仇討  | 入學試験   | 忍術少年       |
| 生理にされた話 | 妖怪のつぼみ(幼年時) | 妖婆の祈り  | 大觀音(ごん)の仇討 |
| 久米 絃一   | 小山 勝清       | 門田 洋一  | 編 輯 部 選    |
| 野口 雨情選  | 三島 霜川       | 西川 喜平  | 横田 貴美衛     |
| 野口 雨情選  | 野口 雨情選      | 田 中 實  | 三井 信衛      |
| 達 崎 龍   | 齋藤 佐次郎選     | 山 本 鼎選 | 山 本 鼎選     |



|         |         |        |            |          |            |       |       |        |       |        |
|---------|---------|--------|------------|----------|------------|-------|-------|--------|-------|--------|
| 赤道祭     | 象に乗った少女 | 愛犬物語   | 漫畫芝居(コドモ座) | 阿蘇沼のおしどり | 三栖さんのアメリカ行 | 同作    | 歌の曲   | 涼月の頃   | 七月の頃  | 涼月の頃   |
| 赤道祭     | 象に乗った少女 | 愛犬物語   | 漫畫芝居(コドモ座) | 阿蘇沼のおしどり | 三栖さんのアメリカ行 | 同作    | 歌の曲   | 涼月の頃   | 七月の頃  | 涼月の頃   |
| 古宇田 敬太郎 | 大戸 喜一郎  | 小島 政二郎 | 河盛 久夫      | 織田 小星    | 沖野 岩三郎     | 本居 長世 | 野口 雨情 | 寺内 萬治郎 | 岡本 歸一 | 寺内 萬治郎 |

目次





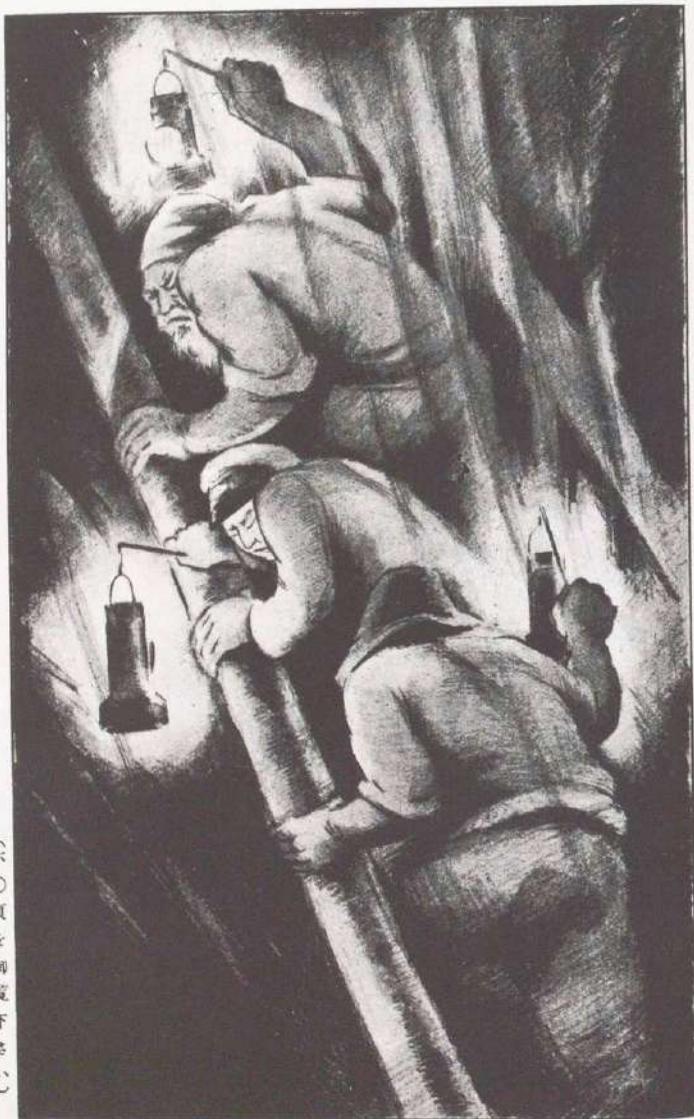
七月なつの頃ころ

(金の星書)

岡本歸一畫



水すな瀑



(六〇頁を御覧下さい)

寺内萬治郎畫

準 標 高 最 の 界 物 讀 童 兒

松 山 悦 三 編 作

嬰 版 上 製 ( 總 ク ロ ー ス )  
三 六 〇 頁 ( 插 畫 數 十 頁 )

定 價 二 圓 二 十 錢  
送 料 ( 書 留 ) 十 二 錢

# フアウスト

刊 新 最

有名なるゲーテの名篇より兒童用の讀物として譯編したものである。周到なる計劃と見事なる挿畫とにより、原作の價値を失ふことなくして而も平易によくその精神を傳へてゐる。名篇大作を何等かの方法によつて少年の鑑賞に供することはそれ自身大に意味あるは勿論やがて趣味豊かな文化人を得る所以である。小學校高等學年及び中學生女學生其他一般家庭に好適なる讀物として讀書界におくる。

青 い 鳥

後のチルチル (青い鳥の續編)

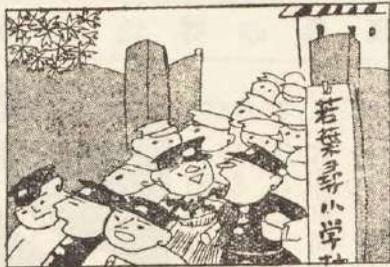
メーテルリンク 原作  
近 藤 宗 男 編  
メーテルリンク 原作  
布 施 延 雄 編

定 價 一 圓 二 〇  
送 料 一 八 〇

六 五 六 三 込 牛 話 電 院 書 ア デ イ 區 込 牛 市 京 東 兌 發  
三 二 四 五 一 京 東 營 振 四 一 町 伏 山

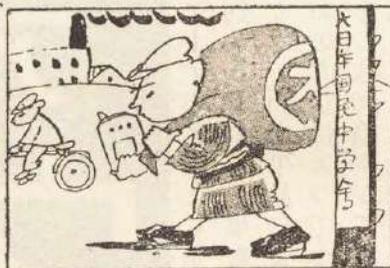
書漫 信吉ノ成功

(一) 小學校ヲツケテフシタ、タ  
クサンノコドモガチハ、イヨ  
イヨノナカハ小學校ニキルトキ  
ヨノナカハ小學校ニキルトキ  
カモツタホド、タノシクハ、ナ  
カツタ。



小學校卒業後  
いろくんな事情で上の學校へ  
行くことの出來ない諸君は今  
スガ本會へ入會して日本一の  
中學講義録で勉強なさい。

(二) シンキチハ、ウチガビンボ  
ウナタメ、テシチニダサレタ  
ガ、ヒトニマケナイキテ、ダ  
イニホソクコミンチユウガク  
クワイニニフクワイシテ、コ  
ーギロクデメンキヨウシタ。



僅か一ケ年半で中  
學卒業の學力と資  
格が得られる。

(三) ヨサクモ、ウチノテツダイ  
チシナガラ、コーギロクデメ  
ンキヨウシタガ、トンキチト  
ヨダロウハ、トウキヨウノ、チ  
ユウガクヘハイツテモ、ナマ  
ケテ、カソドウシヤシン、パカ  
リミテアルイタ。



(四) ニッポンホドタツテ、シン  
キチハ、リウマナカイシヤノ  
シヤチヨウニナリ、ヨサクハ  
ソノカイゼインニソツタガ、  
トンキチトヨダロウハ、オナ  
サケテ、シンキチノカインヤ  
ニツカツテモラツチイル



◎入會するには今が一番好いときてす  
講義録見本規則書<sup>申込</sup>無代<sup>して送呈</sup>

東京 駿河臺 大日本國民中學會  
電話 神田區壹番壹號・壹番壹號・壹番壹號 東京四二〇〇番

世界少年少女名著大系 (22) 大戸喜一郎先生著・裝幀 寺内萬治郎畫伯

# 不思議國めぐり

「不思議國めぐり」は、英國の少年少女が、バイブルの次には必ず讀むといふ程、有名な又  
奇抜なお話であります。原書は、「不思議國のアリス」と云ふ名で發行されて居ります。

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がありました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原  
へ行つて草をつんであるうちに、つひウト／＼と眠つてしまいました。その間にアリスは、  
一つの夢を見ましたがそれが、實に何んとも云へない、不思議な夢でありました。それを書  
き綴つたものが、この「不思議國めぐり」なのです。

この本を一度お讀みになつた方は、イギリスの少年少女たちと同じように、この本が大好  
きになつて、くりかへしくお讀みになる事と思ひます。挿畫は特に、原書の美しい畫を澤  
山に取り入れました。  
金の星社自慢の本の一つとして、是非皆さんに讀んで戴きたいと思ひます。

四六判箱入美本  
内容二〇〇頁  
挿畫三十枚  
定價九拾錢  
送料六錢

東京 本郷 町 坂 動 郷 本 京 東  
金の星社  
振替 東京 五九五九 六番

金の星 世界少年少女著名大系 編

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

第一編

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途に難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程夢中された本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不幸だとさへいはれてゐます。

第二編

ナポレオン物語

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セントヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語をわかり易く面白く書いてあります。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

第三編

ドン・キホーテ

イスパニヤのある村にクイザノといふ男がりました。が、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、瘦馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂におぼれな死をとげるといふ痛快な物語です。

第四編

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心檢索して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

第五編

大人國小人國めぐり  
ガリバー旅行記

ガリバーが、雜船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめいたします。

金の星 世界少年少女著名大系 編

銭六金料送・銭十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

第六編

ロビンフッド物語

『ロビンフッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャウワッドの森に住んで正義のために戦つたロビンフッドの一生は、始めから終りまで胸をなとらせます。悪い知事や僧正や、王をやつつけて、最後は厄のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

第七編

アラビヤナイト

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊れてゐる物語りです。昔アラビヤに悪い王があつて、毎日一人づつ、お姫を迎へては翌日は殺して了ふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤナイト』だといはれてゐます。

第八編

ギリシヤ神話  
オデッセー物語

ギリシヤ詩聖ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。

第九編

シエークスピア物語

有名なシエークスピアの芝居の中で、童話として面白いものばかり特を選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のま』『ベニスの商人』『がく』『女馴し』『眞夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編

グリム童話

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

編一十第 入 繪 **イソツプ物語**

イソツプ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで随分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方とも面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたいと思ひます。

編二十第 日本 神話 **古事記物語**

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありません。實際驚く程立派な面白い物語りです。日本の國がはじめて出来た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それから一つと米になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

編三十第 子供キリスト傳 **新約物語**

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本です。この偉い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したいと思ひます。

編四十第 **西遊記**

支那から印度へ、はる／＼お經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々な魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作です。この本を讀まない者も不幸です。

編五十第 **ローマ英雄物語**

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロムルスとレマスの不思議な生立物語りからはじまつて、ヘンリッセルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて来て、息もつけぬ面白い物語です。

編六十第 **聖書物語**

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものはないと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つのお話としても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム・イサクの偉えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判購。實に面白い物語です。

編七十第 **奴隷トム物語**

奴隷トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

編八十第 **ギリシヤ英雄物語**

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界の文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土臺にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇るべきの出るものなのです。

編九十第 **アンデルセン童話**

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならぬほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

編十二第 **小公子**

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育てられながら、頑迷なる祖父の家に引取られ絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

# 世界少年少女偉人傳大系

四版插畫三色・外敷葉・定價金九十錢・送料六錢

(編一第)

大木雄三先生著・挿畫 寺内萬治郎 吉畫伯

## ジヤンヌ・ダルク

可憐なる一少女ジャヌ・ダルクが、奮ひ起つて、母國を滅亡から救ふ健な物語は、如何に讀者の血を跳らせるでせうか。教訓と興味ある一大雄篇。

霜田史光先生著・挿畫 寺内萬治郎 吉畫伯

(編二第)

## ローマ英雄 シーザー

世界的英雄、ジュリアス・シーザーの一生を書いたもので、その幼年時代から、ローマの元老院で刺殺されるまでの、大活躍を現した歴史物語です。

三井信衛先生著・挿畫 寺内萬治郎 吉畫伯

(編三第)

## ネルソン

トラファルガーの海戦に、譽れを残した、ネルソンの傳記です。その國を愛する赤心、己の責任を重んずる觀念は、何人にも一大教訓となる物語。

第一輯 人 買 船

本居長世作曲・野口雨情作詞

(目曲)

人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、霧、燕、十五夜お月さん

第二輯 一つお星さん

本居長世作曲・野口雨情作詞

(目曲)

一つお星さん、七つの子、肥と雀、鶴さん、象の鼻、四丁目の犬

第三輯 青い靴

本居長世作曲・野口雨情作詞

(目曲)

青い靴、燕、雨夜の傘、でんぐし、雀の酒盛り、呼子鳥

第四輯 赤い靴

小松耕輔作曲・野口雨情作詞

(目曲)

赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮館屋、眠り龜の子

第五輯 夢

本居長世作曲・野口雨情作詞

(目曲)

夢とり、おしやれ椿、つげ子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り

第六輯 子守唄

本居長世作曲・野口雨情作詞

(目曲)

子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、葱坊主、戲の下道

第七輯 お人形さんの夢

小松耕輔作曲・達崎龍作詞

(目曲)

お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱

第八輯 べんべん

中山雪平作曲・野口雨情作詞

(目曲)

べんべん、鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蛸、さみだれ

第九輯 あこの町の町

本居長世作曲・野口雨情作詞

(目曲)

あこの町の町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、譚誠寺の哩囉

第十輯 名所めぐり

遊井澤作曲・野口雨情作詞

(目曲)

長柄の橋、柱くまり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳箱、石山寺の秋の月

夢のお國、鬼が来い、赤い機ンぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の数

日本童謡作曲界を代表する大好评の

# 金星童謡曲譜集

一輯各金六錢・三輯以下八錢拾・送料六錢

第二輯 夢

遊井澤作曲・野口雨情作詞

(目曲)

夢のお國、鬼が来い、赤い機ンぼ、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の数

東京 本郷 金星社 電話 小石川三五七八番  
東京 本郷 金星社 電話 五九五六番

東京 本郷 金星社 電話 五九五六番

金星社

電話 小石川三五七八番

行發社眉白・筆執家大諸・編輯人樹島田小

# 月刊 教材樂譜

最廉最良の唱歌教材雜誌生る

見本 切手拾七錢封入御申込になれ  
ば最近號御送りいたします。

四月一日創刊號發行  
毎月一回發行  
定價一部金拾五錢 送料金二錢  
半ケ年分金九拾五錢(送料共)  
一ケ年分金壹圓八拾錢(送料共)  
團體申込には特別割引あり

| 次目      | 號 | 第 | 卷 | 一 | 第 |
|---------|---|---|---|---|---|
| 1 春の野邊  | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 2 桃の咲く路 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 3 かたつむり | 3 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 4 雀の親子  | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 5 小藪の春  | 5 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 6 歌へ    | 6 | 1 | 1 | 1 | 1 |

△教材樂譜を世に送るに於いて  
△無意味の意味 小田島樹人  
△教材としての童話 長尾善登  
△本譜への指導概要 青柳善香  
△作曲資料講座 小田島樹人  
第一輯 旋律の動かし方  
乙種師範科卒業生の携りたる告白  
△編輯後記

従來の唱歌教材雜誌は記事が其の大部分を占めて居ますが、本誌は樂譜を本位とし毎月十頁内外の樂譜を掲載致します。  
樂譜は斯道大家の作曲にかゝる作品を幼稚園程度のもより師範中女學校程度のもに亘りて掲載し、他に泰西の名曲にして教材に適するものをも邦譯を附して掲載致します。  
毎號六頁の記事は全部六號三段組とし教育音楽に關する種々の理論、感想、研究等を斯道大家諸君の筆に由つて掲載致します。  
毎號作曲、記事の懸賞募集をも致します。尙機會を見て特別號をも發行致します。

□本誌の資料となるべき作曲、並に記事を募集致します。  
□分量は別に定めませんが成るべく短かいものを希望致します。  
□原稿紙は必ず四百字詰とし、紙上の匿名は差支ありませんが、末尾に住所氏名を明記して下さい。  
□締切期日は別に之を定めません。得るに従つて審査掲載致します。又原稿取捨の權は編輯者に御一任下さい。  
□掲載の上は相當の報酬を呈します。  
□原稿其の他編輯に關する一切の用向は必ず 東京府南品川權現堂小田島樹人宛、購讀に關する一切の用向は白眉社宛お願ひ致します。

(通卷第八拾號)



金の星

七月號

社版出眉白 八六四町黒目下外市京東 番八九五四五 所行發

歌 <sup>うた</sup> の 中 <sup>なか</sup>

作曲 本居長世

作詞 野口雨情

軽やかに早く

Musical notation for piano introduction, first system.

Vocal line with lyrics: うたのなかななるこそすちめー

Piano accompaniment for the first vocal line.

Vocal line with lyrics: たけのかれはをこそすちめー

Piano accompaniment for the second vocal line.

Vocal line with lyrics: のはおや チッ チッ チッ おや チッ チッ チッ おや

Piano accompaniment for the third vocal line.

11

Musical notation for piano introduction, second system.

Piano accompaniment with marking *piu lento*.

Vocal line with lyrics: おやど の た け や よ み な か れ

Piano accompaniment for the second vocal line.

Vocal line with lyrics: たる おやさうかい

Piano accompaniment with markings *ff*, *f*, and *mf*.

Vocal line with lyrics: な おやさうかい な

Piano accompaniment with markings *ma.* and *da.*

12

歌の中

野口雨情

岡本歸一畫

歌の中なる

子雀の

おや チッチッチ

おやごの竹藪

皆枯れた



おや さうかいな

竹の枯葉を

子雀は

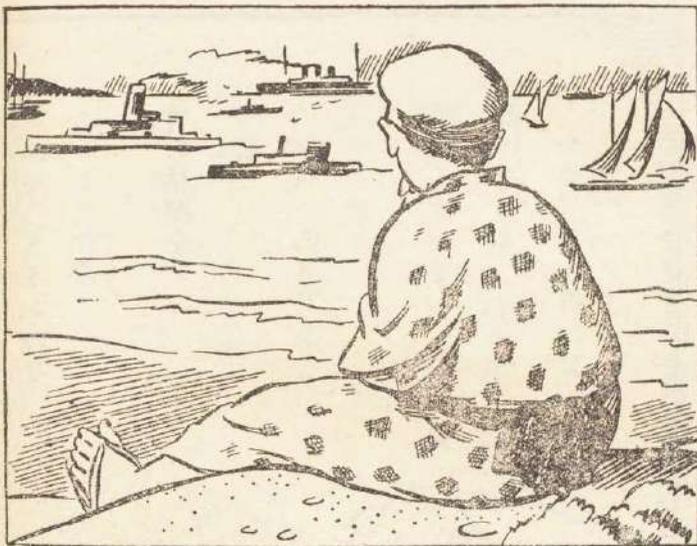
おや チッチッチ

嘴にくはへて

啼いてゐる

おや さうかいな





## 三栖さんの

## アメリカ行

沖野岩三郎

寺内萬治郎畫

イギリスへ行つた指郎さんから、面白い手紙を受  
取つた三栖さんは、毎日のやうに、裏の濱邊に行つ  
て、沖を通る汽船の煙を眺めてゐます。  
今日も朝から、白い砂の上に足を投げ出して、ち  
つと沖の方を見つめてゐます。帆船が何十も西に  
東に行き交ひます。發動機船がけた、ましく爆音を  
立てながら港の方へ走ります。汽船が寝とばけたや  
うに汽笛を鳴らしながら、出港を知らせます。鯨船

が勇ましく赤い旗を立て、歸つて來ます。遙に沖の  
方を軍艦が通ります。外國通ひの大きな汽船が、夢  
のやうに水平線の向ふに消えます。

「どうせ、専門學校へも大學へもやつてくれないん  
だから、アメリカへでも行つて、勞働しながら勉強  
したいものだ。」

三栖さんは、そんなことを思ひながら、まぶしい  
やうな白い砂を踏んで、下宿へ歸つてみますと、町  
の日曜學校で四年來英語を教はつてゐる宣教師のミ  
ス・レビットが訪ねて來てゐました。

「まあ、三栖さん。お留守だときゝましたので、歸  
らうとしたところでした。」

ミス・レビットは流暢な日本語で言ひました。

「さうですか、どうぞお上り下さい。」

三栖さんは、にこ／＼笑ひながら、ミス・レビッ  
トを自分の室へ案内いたしました。

三栖さんは今、中學の五年です。あと六ヶ月で中

學を卒業するのですが、學資の都合で専門學校へも  
高等學校へも進む望みはないのです。と云つて、指  
郎さんのやうに、イギリスまで行くだけの旅費も、  
お父さまから戴ける見込はありません。だから、せ  
めてもの慰めに、外國人であるミス・レビットに會  
つて、英語で話すことを、唯一の楽しみにしてゐるの  
です。ミス・レビットは、もう四十年前も前に日本へ  
來たり、やさしいお婆アさんです。

二人はイギリスの事や、アメリカの事を、いろい  
ろ話してゐるうちに、三栖さんは机の上にあつた外  
國の繪葉書を疊の上に並べて、

「レビットさん、私はこんなに澤山、西洋人のお友  
だちをもつてゐます。」と申しました。

「まあ、みんな外國から來た繪葉書ですネ。あなた  
は、この方々と、いつも通信してゐらつしやるん  
ですか。」

ミス・レビットは繪葉書の差出人の名前を一つ々

いねいに見ながら云ひました。

「はい、毎月三四十枚づつ、交換していただきます。」

「どうして、そんな事をなさるやうになつたのです？」

「教會の松葉さんが、繪葉書の交換をしたいといふことを、ロンドンタイムスへ投書したので。」

「まあ、ロンドンタイムスへ？ ロンドンタイムスを讀んだ人たちから、みんな繪葉書を送つて來られたなら、松葉さんの財産は無くなつてしまひますよ。」

ミス・レビットは、さう云つて笑ひました。

「本當に大變だつたのです。あんまり澤山來るので、松葉さんも返事がしきれなくなつたので、僕は其中の三四十枚を引受けたのです。」

「さうですか。文章の練習になつてようございますワ。」

ミス・レビットは繪葉書から眼を離さずに、一枚

一枚でいねいに見てみましたが、三色版の美しい繪葉書一枚を手に取り上げて、

「おや、ドクター・ジョルダンから……」と云つて、三栖さんの顔を見ました。

「あ、その人ですか。その人からは、三回ほど通信がありました。最初私から和歌浦の繪葉書を送つてあげますと、大變喜んでらしく、私も昔て日本へ行つたことがあります。その時和歌浦へ行つて半日遊んだと書いてありました。その葉書にも和歌山がなつかしいと書いてありませう。」

「三栖さん、あなたは此のドクター・ジョルダンが、どんな人だか御承知？」

ミス・レビットは繪葉書を膝の上に置いて、にっこり笑ひました。

「いゝえ、知りません、お医者さんですか。」

「このお方はネ、アメリカのスタンフォード大學の總長をしてゐる、ジョルダン博士ですよ。世界で名

高い水産學の大家です。」

ミス・レビットは不思議さうに繪葉書を裏返して見ました。

「まあ、さうですか。あのジョルダン博士ですか。

私はあの人を水産學の大家としてよりも、平和論者として尊敬してゐたのですが……しかし、この方だとは、ちつとも知りませんでした。まあ、さうですか。」

三栖さんはミス・レビットの手から繪葉書を奪ふやうにして其の達者な文字をちつと見つめました。

ミス・レビットの歸つたあとで、三栖さんは直ぐ濱邊へ行きました。そしていろいろな貝殻を一升ばかり拾つて歸りました。その翌の日も、又た次の日も學校から歸るとすぐ、濱へ出て行つて珍しい貝殻を拾つて來ました。

一週間後に三栖さんは、ドクトル・ジョルダン宛



一通の長い英文の手紙を書きました。そして、其の手紙と一緒に、小さい箱の小包郵便を送りました。すると、六週間の後にシヨルダン博士から手紙がまわりました。手紙の意味は、

お手紙と小包郵便とを同時に受取りました。日本の海岸に美しく輝いてゐた可愛い貝殻は、今私の目の前に、やさしい物語りを語つてゐます。この貝殻を眺めてゐる私の眼の中には、日本の美しい海岸が浮んで來ます。そこには日本の花、さくらがはら／＼散つてゐます。

私はあなたのやさしいお心に對して、限りなき感謝をさぐげます。そして、あなたが近き未來に於て、私の學校に來て學びたいといふ御希望を、私は心から喜びます。

といふのであります。

三栖さんは本當にうれしかつたのです。で、早速、お父さまにあて、長い／＼手紙を書きました。

けれども其の手紙の返事の來ない前に、三栖さんは中學を卒業してしまひました。村の小學校からは、一日も早く歸つて來て、先生になつてほしいといふ手紙が來ました。

三栖さんは致方なしに村へ歸りました。歸る時ミス・レビットは、送別會を開いてくれました。そして、忍耐してしつかり勉強するやうに勵まして下さいました。

三栖さんは村へ歸るとすぐ、小學校の校長さんを訪ねました。校長さんは大へん喜んで歡迎會をしてくれました。

村長さんや、學務委員さんも來て、一緒に御飯を食べてゐるところへ、郵便が届きました。其中にはシヨルダン博士から三栖さんにあてた手紙が交つておりました。

「どこから來たのです?」

そして、旅費だけ送つて下されば、アメリカへ行つて、どんな苦勞をしても勉強するからといふことを申送つたのでした。けれども、お父さまからの返事は簡單でした。

この上、五十圓のお金も出ない。

中學だけ卒業させてもらつたら、あとは自分の力でやつて行けるだらう。

税務署の役人になれば、大野さんに頼んでみてもよい。

村の小學校に先生が一人足りないから、來てくれなにかと、校長さんから話があつた。私はそれが一番いいと思ふ。

三栖さんは、お父さまが自分のアメリカ行には、少しの考慮も拂つてくれないのを、なさげなく思ひました。けれども、家政の状態を詳しく知つてゐるので、思ひ切つてシヨルダン博士に手紙を出して、アメリカへ渡る旅費を貸してほしいと頼みました。

校長さんは横文字の手紙を珍らしさうに眺めながら問ひました。

「これはアメリカのスタンフォード大學の總長シヨルダン博士から來たのです。」

三栖さんは得意さうに言ひました。校長さんも村長さんも、學務委員さんも、みんな驚いてしまひました。それは此村中で、まだ外國の大學總長と手紙の往復をするやうな人は、一人だつてなかつたからでした。

「どんな事を言つて來たのですか?」

校長さんは眼を圓くしてきゝました。三栖さんは其時、丁度手紙を讀んでしまつた所だつたので、

「私が高等學校卒業の學力をもつやうにさへなれば、いつでもアメリカへ渡つて來い。出來るだけの世話をしつてあげると云つてくれるんですが、……」と云つて、悲しさうに顔をうつむけました。

「中學卒業だけでは、いけないんですか?」

校長さんは懺めるやうな聲で言ひました。  
「田舎の中學を出ただけでは、行つたところが駄目  
なんです。けれども私は高等學校へ入るだけの資力  
がありませんから……」  
三栖さんは訴へるやうに言ひました。村長さんも  
學務委員さんも、頻りに首をひねつて考へました



が、村中に誰ひとり、三栖さんの爲に學費を出して  
あげようと云ひさうな人を見出すことは出来ません  
でした。  
其時校長さんは、今の今配達されたばかりの新聞  
を擴げてみました。それは『萬朝報』といふ新聞で  
した。

読んでゐるうちに、校長さんは顔の色を變へて、  
「三栖さん、こゝにこんな廣告がありますよ。」と云  
つて、新聞を三栖さんの膝の上に乗せました。  
村長さんも學務委員さんも、額をあつめて其の廣  
告を読みました。

廣告文は、平和協會からハワイの太平洋大學へ、  
三名の日本人學生を送る事になつたから、入學を希  
望する者は、豫備試験として本月七日までに、平和  
問題に關する英文の論文を書いて送れといふのであ  
りました。

「旅費も學費も、みんな平和協會から出してくれる



校長さんは膝を乗り出して言ひました。村長さん  
も學務委員さんも校長さんの説に賛成しました。  
三栖さんの眼の前には、希望の火影がちらつきま  
した。

ハワイからアメリカへ……太平洋大學からスタン  
フォード大學へ……

自分とジョルダン博士との距離が近づいて來たや  
うに思はれます。指郎さんのやうな好運が、自分  
にも巡つて來さうに思はれます。

「では、ひとつ此の豫備試験に應じてみませう。し  
かし、今日は二日ですから、今晚中に書きあげて郵  
便局へもつて行かなければ、七日までに東京へ届き  
ませんでせう。」

三栖さんはうれしいやうな不安なやうな顔つきを  
してゐました。

「では今からすぐ、お家へ歸つてお書きなさい。そ  
して明朝の發送に間に合ふやうに郵便局まで持つて

んだ。どうだい、三栖さん。至急に論文を送つてみ  
ないですか。」

行らつしやい。」

校長さんが、さう云つたので、三栖さんは村長さんたちに別れて、お家へ歸りました。そして必死になつて辭書を引き、十枚ばかりの論文を書きました。その題は『世界平和の根本問題』といふのでした。

朝の六時頃に、やつと書きあげて、自分と郵便局へ持つて行つた時、どうぞ此の手紙が期日内に試験官の手許まで届くやうに……と心の中で祈りました。

其の三日目から、三栖さんは學校の先生になつて、唱歌を教へたり體操を教へたりしてゐました。

論文試験はどうなつたことかと、毎日々々其のことばかり案じてゐましたが、廿日程たつた時、三栖さんあてに、大きな状態の手紙が届きました。胸をどきどきさせながら抜いてみますと、論文試験に及第したから、來月の十二日に、東京高等商業學校

講堂で執行する本試験を受けに來いといふ通知でありました。

三栖さんは云ふまでもなく、校長さんも大喜びでした。使を受けて村長さんも駆けつけて來ました。

そこで三栖さんは、とにかく學校を休んで本試験の準備にかゝりました。

試験の十日前に、三栖さんは校長さんや村長さんに暇乞をして上京しました。船の中でも汽車の中でも、一所懸命に書物を読み會話の研究をしました。

東京の築地には指郎さんのお兄様がゐます。立教大學を卒業した青年紳士で、名前をヨハネといふ人です。

三栖さんは取あえず、ヨハネさんを頼つて行つて、試験を受けに來た事やら、ジオルダン博士のことやら、詳しく話しますと、ヨハネさんは、受験について、いろ／＼の注意をあたへてくれました。

いよいよ試験の日は來ました。一ツ橋の高等商業學校へ行つてみますと、多勢の受験者が、もう講堂の外に一杯立つてゐました。誰をみても、みんな自分より賢さうな顔をしてゐます。

試験は始まりました。けれども、出された問題に答への出來ないのは、一つもありませんでした。歸つてヨハネさんに其の話をすると、ヨハネさんも大丈夫だらうと云つてくれました。

二日目には名高い神田乃武さんの會話の試験がありました。田舎の中學校で、會話といふものを殆ど習つてゐない三栖さんではあるが、ミス・レビットに英語を習つてゐたお蔭で、神田さんの云ふ言葉の意味は大抵わかりました。しかし、こちらの云ふ言葉は、何度も何度も問ひ返されました。

ヨハネさんの所へ歸つて、今日の試験の事を詳しく話しますと、ヨハネさんは、

『それは君、大へんな間違ひだよ。神田先生の質問

は、君は船にのつても酔はないかと云ふのだよ。君はそれを間違へて、私は善い水夫ではありませんと答へたんだネ。さあ、其の會話では落第點を買つたかも知れないよ。』と申しました。

それをきいた三栖さんは、すつかり落膽してしまひました。けれども、或は及第したかも知れないといふ、一縷の望みを抱いて、翌日試験場へ行つてみますと、門を出て來る受験者は、みんな失望の色を顔に浮べてゐました。

三栖さんも、恐る／＼掲示板の前に立つて見上げますと、真先に墨黒々と書いた『三栖……』といふ文字が、自分の瞳を矢のやうに射しました。

『しめた！』と口の中で言つて、よく／＼見ますと、自分の名前は最初から第四番目に書かれてあつて、その上には「補缺」といふ二字が意地わるく坐つてゐました。

『あ！ もう少しの所で！』  
三栖さんは思はず叫びました。(つゞく)



たが、その頃、上總の阿蘇村、村上に平の入道それがしと言ふ人が住で居りました。榮華に暮す身に一つの不自由もなく、大勢の家來を養ひ、朝には野山の狩りに日を送り、夕べには月を眺めて更けゆく夜も知らぬ有様は、誰しも羨まぬ者はないほどでありました。

ある日のこと、入道は、いつもの様に伴をつれ狩装束の姿も涼々しく、ほど遠からぬ阿蘇沼に獲物やあると出かけたが、その日はどうしたものか、日ねもす山のかげやら、沼のふちを尋ね歩いても何一ツ思はしい獵がありません。入道の不満はもとよりでありましたが、夕ぐれ近くなるまゝに致し方なく、沼添ひ鋪途につきますと、ふと水の面、沖のまこも草の蔭に水鳥が、二羽うす紫に暮れてゆく空の色を浴びながら、静に遊いで居ましたので、せめてそれでも射止めんものと、弓絃に矢筈をつがえ、キリ／＼ときしる松脂の音も細かく、満月と引きしほ



(傳説巡禮)

## 阿蘇沼の

### おしどり

織田小星  
岡本歸一畫

ラフカオ・ヘーン氏の著書「怪談」の中に「おしどり」と書し短し政話があります。それは昔、陸奥國、田村の郷に住でゐた獵夫にかゝる政話であります。それと同じ類のもの、千葉縣印旛郡の阿蘇沼にも傳はつてゐます。

ヘーン氏の話の中では、女の歌ふ歌詞が日くるればさそひしものを赤沼の

まこもがくれのひとり寝ぞうき

となつて居るのが、阿蘇沼では

夕さればさそひしものを阿蘇沼の

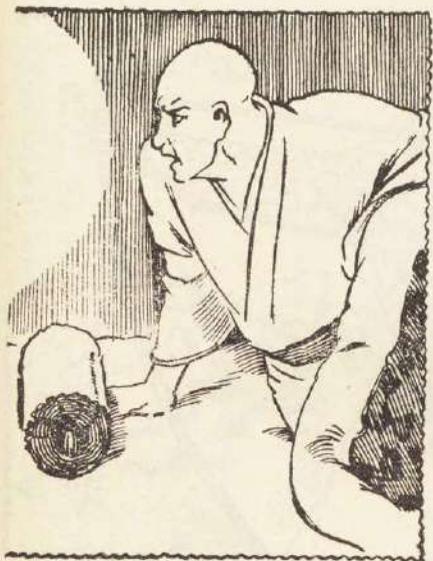
まこもがくれのひとり寝ぞうき

と涙ながらに歌ひます。何れにせよ鳥の傳説は数少いうち、此のおしどりの話の様に詩趣多く美しいのは珍しいと思ひます。

おしどりは見るからにきれいな鳥ですが、又誠に夫婦仲のよい鳥で、若しその片方が死ぬ時は、他の一羽はきつと近いうちに之も死でしまふと、昔から言ひ傳へられて居りますが、その水鳥の温い情緒にからまる哀れな話が、冷い阿蘇沼のまこものかげに残つて居ります。

時は保元の頃、世は麻の如く亂れて父子兄弟が、白河殿の兵火の中に矢叫びの聲あけて互に争つたと云ふ、聞くだにいまはしい、惜けない代でありまし

ツて發つた矢はサツと眞一文字に飛んで行つて、確に其一羽を射止めたと思ひましたが、鳥はそのまゝ水草の茂みの中にかくれ姿は見えなくなりました。重ね／＼の不首尾の狩に入道は氣も浮き立たず邸に戻つて來ましたが、そう言つた氣持の時には何をしても興味がなく、床引きのべさせそのまゝ寝につ



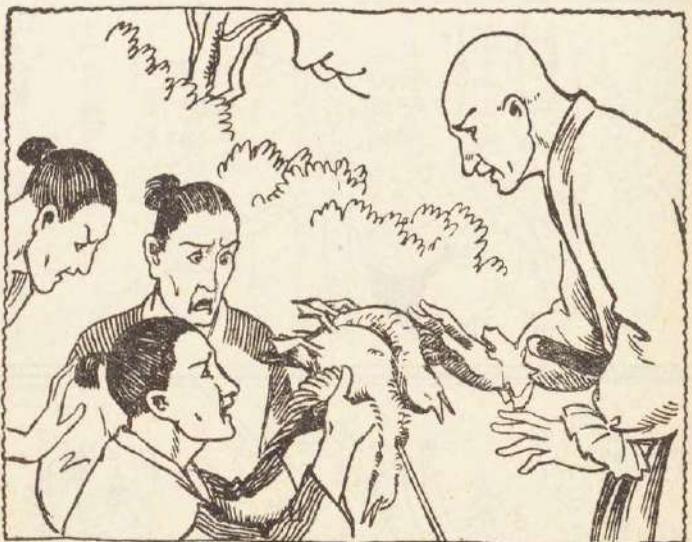
きました。

眞夜中頃でありませう、ふと入道が眼を覺すと、思ひもかけず枕もとにそれは／＼美しい女の人が立てゐます。夢かしらと自分を疑ひながら又眺めますと、ヤツぱり女の人が佇んで居ります。驚いて、  
 『そもじは誰れぢや。』と尋ねると、その婦人は急にはら／＼涙をこぼし、  
 『妾は阿蘇沼に住む者で御坐いますが、貴方様をお恨み申しに參りました。……今日と言ふ日は、どうしてこんな不幸な日なので御坐います。……』  
 と言葉を切つて又よ／＼と泣きます。入道はどうした事やら譯が解らないので、  
 『そう泣てばかり居ては話が解らぬ、ついぞ見知らぬ婦人ぢやが、何の恨みが私にある……さあ、そう泣かずに話してごらん。』  
 『いえ／＼、御存じない事は御坐いません。貴方様



は何罪のない妾の夫をお殺しになりました。……ちようど私共が二人して、楽しい夕餉をいたそうと家に戻ります途すがら……お、思ひ出しても恐ろしい……あの矢羽の音が響くよと見れば、夫の胸にぐざ

りと立つた非道の征矢……そのまゝ息は絶えはて、まこもの草の露よりもろく此の世を去りました。』  
 と女は氣も狂はんばかりに泣き沈みましたが、又おもむろに顔をあげ、  
 『貴方様は、たゞ一時のお慰みから、なせこんな酷い事をなされました。心から許した夫があればこそ、あの凍つく沼の面にも楽しいその日がめぐります。暖い日かげも照します。……それなのに……お何と言ふお方で御坐います。……頼りにする夫を殺し、その上妾も……エ、妾は死だも同じ、もう生きる望は御坐いません。……今となつては何もかも涙のたね、くれゆく水の輝きも何で喜びになりませう。春のまこもの若草は二人のその日が偲ばれて、反つてうれひの種となります。……』  
 『ふむ、聞けば、わしがお前の夫を殺したと言ふのか、……何をたわけた事を申す、身にその覚えは無い、何かの間違ひぢや、そうぢや間違ひぢやぞ。』



女はそれを聞いてホツと太い溜め息をつき、  
 『まだ御自身のなされた酷い仕業をお悟りなされないので御坐いますか。かよいわい女の身の何う致そうと申すのでは御坐いせんが、只一言「不憫ぢや」と言ふて賜はらばこの心が安まるので御坐います。けれど今更ら左様なよまひごとを申しますまい。よろしふ御坐います、明日、阿蘇沼にお出でなさいませ……お忘れなく、きつと阿蘇沼にお出でなさいませ、けふの事は全てお解りになるで御坐いませう。……お、戀しい夫は今頃は、淋しい彼の世の旅を一人ですてゐらッしやるのだらう……望みもなく生き永らへて此の悲しさを繰返すよりは、早く此の世におさらば告げて又二人で楽しく冥途の旅をいたしませう……』  
 お、貴方様、せめてこの悲しみの心だけでも聞いて下さいませ。』  
 と、一首高らかに涙にむせびながら、

二〇  
 夕ざればさそひしものを阿蘇沼の  
 まこもがくれのひとり寝ぞうき  
 と、歌ひ終つたと見たら夢から覺めました。

覺めて不思議の事に思ひましたが、狩りの疲れからこんなつまらぬ夢を見たので有ると、そのまゝ又寝入ってしまったのであります。

けれど入道は、翌朝床を出た時、ふと昨夜の夢の歌が頭に浮ぶと「お忘れなく、きつと阿蘇沼にお出でなさいませ……」と言つた女の言葉が氣になつて又狩装束に身を固め、伴を引きつれ沼のほとりに來て見ますと、昨日水鳥を射たそのあたりに一羽の雌のおしどり、人の氣配に驚きもせず、行きつ戻りつ遊びでゐますので、射損じたと思つた昨日の腹いせと、弓に矢をつがえて發ちましたが、ねらひ違はず其胸を貫いて、鳥はそのまゝ水面に首うなだれて浮びました。

入道早速伴の者に命じ、もよりの小舟に棹させ沖の獲物を拾はせますと、間もなく家來は不思議な顔して戻つて來ましたが、見ると一羽と思つた鳥は、昨日胸を矢に貫かれた雄の死骸をしつかと羽がいに抱いて死で居りました。  
 それを見て入道は、始めて昨夜の夢の事どもを思ひ出し、「きつと阿蘇沼にお出でなさいませ。けふの事は全てお解りになるで御坐いませう。」と言つた言葉や、悲しげに歌つた歌など、あり／＼と目に浮び、あの女の姿こそ此の雌のおしどりで有つたかと今更らながら哀れを催し思はず涙を流しましたが、げざんに思ふ伴の者に事の始終を物語り、狩はそのまゝ取りやめて、この情けの厚い水鳥の靈を慰めんものと一寺を建て鴛鴦寺と名をばつけ、心から菩提を弔つてやつたと言ふことで有りませう。

(をばり)

# ゴロ八

1 雷のお母さん。今日は  
お腹の食べ過ぎて、  
お腹かシク  
痛みます。



子供のゴロ八が  
代理で鳴りに出  
かけました。  
舌が廻らないの  
「ゴロ〜」

2 お母さんの事が  
心配で〜なりま  
せんで、つい振  
り返り〜行きま  
すと、



生憎雲の脚れ目があつたので、  
下界をめぐってガラ〜ビシャンと  
墜落です。

3 腹を振り〜  
漸く立上つて、ふと見ま  
すと一丁先にお娘が太鼓  
を持って逃げて行く〜  
です。



4 大切な太鼓、一つ失くしても、お  
母さんに申譯ない次第です。  
ゴロ八は、猿といふものは何でも人  
間似が上手ときいておもしろいから、



先づ太鼓をドン〜と  
叩いて見せました。



5 猿は大急ぎで  
その真似をしました。  
太鼓がドン〜と鳴り出すでは  
ありませんか、大喜びです。  
ゴロ八、今度は持った太鼓を  
いきなり、投げ出して見せました。



9 猿は又、早速、  
その真似です。  
ヤツと太鼓を  
投げ出しますと、



ゴロ八  
すかさず  
それをさらつて見る間に  
空へかけ上りました。  
げに疾風迅雷の  
勢でした。  
太鼓が無事に  
戻つて  
目出度し

# 愛犬物語

小島政二郎

寺内萬治郎畫



## 十四

その年の秋のことでした。  
 ソーントン達三人は、四十哩川を舟で降らなければならぬ用事が出来ました。ところが、四十哩川は名代の急流で、一人がボートに乗つて舵を取り、二人は岸にゐて、ボートの艫にマニラ繩を縛り付けて、その端をシツカリ持ちながら、立ち木へ巻き付けては舟を止め、解いてはまた舟をやり、また次の木へ巻き付けては舟を止めししい、降つて行くのでした。ハンスとビートとが、その繩持ちの役に廻つて、ソーントンが一番危険な舵取りの役に就くことになりました。

「もつと手繰つて！」  
 ソーントンは、舳に突つ立つたまま權を斜にかまへて、絶えず水の面を睨めながら、岸の二人に向つて大きな聲で指圖をしてゐました。

それに随つて、繩が手繰られたり出されたりして、上手に、ボートは浪の荒いところや岩などを避けて行きました。急流をさつと降つて、今にも岩に突き當るかと思ふとたんに、ソーントンの繰り出す權の尖が巧みに岩に觸れて、ボートは無事にすつと方向を變へて、フハ〜と流れ降つて行くのでした。

犬達は、ハンスやビートのあとに附いて、ノコノコと岸を歩いて行きました。中で、バックばかりは、一人ハラ〜と心配らしく、しじゆうボートと並んで走りながら、舟の上の主人から少しも目を離しませんでした。

やがて、ボートが難所へかかりました。川の真中に大きな岩が突き出てゐて、そのまはりを水が渦を巻いて流れてゐました。

こちら側は底が一面の岩の根で、ソーントンはいやでも向う側を廻らなければなりません。その上、ボートは早瀬に乗つて、素晴らしい勢ひで走

り降りました。で、ハンスとビートとは、岸の上を馳けて行きながら、ソーントンがボートを操り、やうに、十分繩を繰り出してやりました。

ボートは岩の蔭に隠れましたが、はつと思ふ間に、無事にまた姿を見せて、急流のまゝに、矢よりも早く走り降つて行きました。ハンスとビートとは、慌ててぐいと繩を引き締めましたが、その引き止め方が餘り急過ぎました。ボートは繩に杓られて、あつと云ふ間に、コロリと引ッ繰り返つて、しがみ附く暇もなく、ソーントンは激しい急流の中へ放り出されました。そこは、いかなる泳ぎ手でも到底助かる見込みのない恐ろしい場所でした。

と見るが早い、バツクは身を躍らして水へ飛び込みました。ブルンと耳で水をはじきながら、渦巻き返る流れの中を、主人のあとを追つて泳ぎ出しました。しかし、ソーントンは、流れのままに右へ行き左へ持つて行かれして、バツクが追ひ着くまでに

ツルした岩の頂へ危くしがみつきました。  
「返れバツク！ 返れ。」彼は轟々云ふ波の唸りの中から、聲高に叫びました。

バツクは、そのまま下流に押し流されました。しかし、どうかして主人のところへ泳ぎ返らうとしてもがいておりました。が、とても流れが速くつて一尺も泳ぎのぼることは出来ませんでした。

「返れバツク！ 返れ。」  
幾度も主人の同じ命令が繰り返されるのを聞いた彼は、諦めたらしく、少し水中に身を起して、これが最後の見納めと云ふ風に一度高く首を持ちあげたかと思ふと、素直に岸へ向つて泳ぎ返つて行きました。彼は力の限り泳ぎ抜いて、もうこの上泳ぐことは出来ないと思ふ危いところで、岸のハンスとビートに助け上げられました。

は、三百間も下流へ押し流されておりました。それでも、そこでやつと、彼はバツクの尻尾につかまるところが出来ました。

バツクは、愛する主人が、自分の尻尾につかまつたのを知るが否や、懸命の力をふるつて岸の方へ泳ぎ返らうとしました。しかし、流れの勢ひの凄じさは、一間泳ぎ返つてゐる暇に、二人は二間押し流されておりました。困つたことに、そこから少し行つた川下に、一層激しい瀬があつて、大きな櫛の歯のやうに突き出た岩のために、飛沫が八方に亂れ飛んで、噛みつくやうな唸りを發しておりました。流れは、將にそこへかからうとして、凄い渦を巻いておりました。見る間に、ソーントンは第一の岩の上をメチャメチャに引きずられ、第二の岩におつければ、第三の岩にも突き當りさうになりました。彼はもう到底岸に着く望みはないと思ひ諦めました。

しかし、一方、激しい急流の中で、ツルツルと岩の上にソーントンがしがみついておられる時間には限りがありました。救ふなら、その僅か數分間のうちに、救はなければなりません。

ハンスとビートとは、クタ／＼に疲れたバツクを勵まして、大急ぎで遙かの川上まで駆けのぼりました。そこで、さつさまでボートを引き止めるために使つてゐたマニラ繩をほどいて、バツクの肩へ結びつけ、

「いゝか、しつかりやつてくれ。」と頭を撫でて、再び急流の中へ入れました。  
バツクは、流され／＼、川の真中まで泳ぎ出て、一気にソーントンの上へ泳ぎ着くつもりでした。しかし、あせつたために、川の真中まで出方が足りませんでした。バツクが、その過を知つた時はもう遅く、ソーントンと並んだ頃にはまだ二三間距離がありました。彼はソーントンの岩まで泳ぎ着かうと



あせりましたが、その暇に、彼の體はどんく下流へ持つて行かれてしまひました。

失敗を知つたハンスとビートとは、急いで繩を絡めて、ボートのやうにバックを引止めました。彼は、繩が早瀬の中で締まつて來たので、自然水面から沈んでしまひ、沈んだままで岸に引き寄せられて、やつこのことで引き上げられました。

バックはもう半分死んでゐました。ハンスとビートとは飛び寄つて、彼を抱き上げ、水を吐かせて呼吸を吹き返させました。バックは起き上つて見ましたが、ヨロ／＼とまた倒れてしまひました。

その

時、ソーントンの聲が微かに聞えて來ました。何を云つてゐるのか言葉の意味は分りませんでした。が、兎に角ソーントンの身の上に最後が迫つてゐることだけは間違ありませんでした。主人の聲が、バックの上にもるで電氣のやうに働き掛けました。彼は忽ち飛び起きたかと思ふと、ハンスやビートの先きに立つて、以前の出發點まで駈けのぼりました。

繩が再び附けられました。バックは、勢ひよく流れを横切つて、真直に川の真中をさして泳ぎ出しました。一度は勘違ひをしましたが、二度と同じ罪を犯す程彼は馬鹿ではありませんでした。ハンスは油断なく繩を繰り出し、ビートは繩の束を裁いて行きました。バックは十分川の真中まで泳ぎ出たところで、急に向きを變へて、ソーントンを目がけて、急行列車よりも速い速力で一直線に流れ降つて行きました。ソーントンはバックの姿を見て、最後の勇氣を奮ひ起しました。稍ともすると、手が少しづつ通り落

ちるのを、持ち變へ持ち變へしてゐる間に、兩腕とも肩の附け根から抜け落ちさうに痛み疲れて來ました。さうでなくとも急流が、絶えず激しい力で突き當つて來て、ソーントンの體を岩から放して持つて行かう持つて行かうとしてゐるのでした。いくら齒を食ひしばつて我慢をしようとしても、今はもうその根も盡き果てました。手を放して、波にさらはれるより外に仕方がありませんでした。その時でした。彼は、自分を目がけて突き進んで來るバックの姿を認めました。

ドーンと、バックの體がぶつかつて來ました。その瞬間、ソーントンは素足く愛犬の體に飛び移つて、兩手でシツカリ首ツ玉へ噛り附きました。

岸で見つてゐた二人は、ホツと息を吐きました。ハンスは、十分氣を配りながら繩を引き締めました。その暇に、ビートは繩の端を、傍の樹へ絡み附けることを忘れませんでした。

「いゝか。」

二人は注意しながら大急ぎで繩を手繰り始めました。バックもソーントンも、水の中へ潜つてしまひました。さうして或は繩に締められ、或は水に抵せつつ、ギザ／＼の川底を引きずられたり、岩角で打ちつけられたりしながら、やうやくのことで、岸邊まで手繰り寄せられました。

ソーントンは、ハンスとビートとに俯伏せにされて、丸太の上で激しくゆすぶられたので、水を吐いて、やつと正氣に返りました。

「バックはどうしたね。」

彼はかう云つて、すぐその方を見ずにはゐられませんでした。

バックはグシヨ濡れのまま、まるで死んだやうにグツタリ四肢を投げ出してゐました。スキートが、彼の濡れた顔と閉ぢた目とを舐めてゐる傍では、ニツグが口を空に向けて吠えてゐまし

た。

ソーントンは、自分の傷の手當もしずに、靜かにバックの傍に坐ると、體中を仔細に調べ出しました。可哀想に、バックの肋骨は三本挫けてゐました。

「やれ／＼。」

彼は手早く、その手當てをしてやりました。

「さあ、まあこれでいゝ。このままここで舍營しよう。」

かう云ひ出したソーントンに對して、  
「まあ、支度は俺達がするから、お前はちつと靜かにゐなよ。」

ハンスとビートとはさう云つて、急いでキャンズを張りました。

かうして彼等は、バックの肋骨の癒合するのを待つことにしました。

(つゞく)



# きつかた久八物語

川崎 春二

柳田 謙吉 書

キツカタ久八は、庄屋さまの總領息子でした。庄屋さまと言へば、むかしは村中に威勢を振るまいたもの、その總領息子の久八といふのが、途方もなく威張るのが好きと来てゐるので、村の人達は何時も困らされてゐました。

彼の庄屋が老死してしまつた時、久八は自然庄屋の棟纏きとなつたのでしたが、息子の時でさへ威張りのいた男が、今度は本もの、庄屋になつたのですから堪りません。

威張るの威張らないのお話になりません。村の人々は太そう迷惑には思ひましたが、庄屋さまのことなので何うにも仕様がありませんでした。

「おうい、かうしろ！——お前はあゝしろ！」

「はい、只今いたします——」

村人達は、恰度お奉行さまかなにかに對するやうに、何時もはい、してゐなければなりません。

しかし、金持で用は足るといふところから、庄屋といふ役柄を換つてゐるとは言へ、

もと、百姓同志の間柄のことですから、心の底から崇め奉つてゐるではありません。

「親の庄屋はい、人だつたが、久八どのはい、かんの。」

久八は添へばすつかり嫌はれ者でした。

それに、人と相對した時だけ威張るのことが言へば、さうではありません。一人で野原の真中へ行く時でも、田圃中の畦道を通る時でも、出来るだけ豪勢に肩で風を切つて歩きました。

その肩も十分にキツカタ！ キツカタ！

と振り、通るのを見付けると村人らは、急いで家の中に逃げ込んで、戸をびしやんと締めてしまひ、

「キツカタ久八が通る！ 文句を言はれちや面倒だ。外へ出るな！」と囁き合ふのでした。

## 二

久八庄屋の村に、四郎兵衛といふ年寄夫婦が住んでをりました。

四郎兵衛爺さんは、不仕合にも件とその隙とを亡くしてしまひ、今は十二になる次郎作といふ孫の成長を楽しみにかほそい暮しを立て、ゐるのです。

この四郎兵衛爺さんの裏山には、古いお稲荷さまの社がありました。二月の初午や、その他の縁日には赤い轡を立てたり、赤飯を炊いてお供物をしたりして爺さんの家ばかりでなしに村中でお祭りをしました。

久八庄屋は、それが何うも癪にさはつてなりました。

「何だ！ あんな水呑百姓の屋敷に祀つてあるお稲荷さまなぞ拜むなんて馬鹿々々しい

何うかして村の者共にも拜ませぬやうにしたいものだ」と、思案しました。

そのお社の近くには、よく人に馴れた一匹の女狐が棲んでゐました。すつと古くから棲まつてゐるので、人々はお稲荷山の「お仙狐」と、人間のやうな名をつけてをりました。

余くこの女狐は普通の野狐と異つて、鶏を盗んだり、豆腐屋の土圃からあぶらげをさらつて來たりするやうなことはしませんでした。

殊に四郎兵衛爺さんの一家に對しては、大そう忠實な女中のやうな働きをして手傳ひました。

お婆さんがお米をとぐのが億劫さうだつたり、あまり冷めたさうだつたりすると、お仙狐が何處からか飛び出して來て「サラ／＼サカ／＼……」と、そのお米を忍ぶ結露にとき上げて呉れました。

とりわけ、小豆や赤豆をとぐのが上手で、明日赤飯が出来るなぞといふ時には、お婆さんの家のばかりでなく、方々の家の小豆、赤豆をといひ廻りました。

それは、お稲荷さまにあげるもので、自然自分が自動走になるのだからといふお禮のつもりなのでせう。しかも、お仙狐が小豆や赤豆をとぐ時分には、恰度金の小粒でもかき廻すやうに「チカラ／＼……」とい、音を立てるのでした。

また、次郎作に對しても大そう親切で、よくお便ひなどに行つて下駄の鼻緒などを切らして泣いてゐたりすると、直に別なしつかりした鼻緒の下駄を持つて來てくれるのでした。

次郎作や、次郎作のお婆さん、お婆さんは誰も「お仙狐」と呼んで、次郎作の姉さんか妹かなどのやうに可愛がつてゐました。

## 三

庄屋の「キツカタ久八」は、まづそのお仙狐に目をつけました。

従つてキツカタ久八でも、如何に村人等が崇めるのを見るのが癪にさはつても、まさかお稲荷さまの祠を叩き毀す程の度胸もなかつたのでした。

そこで久八は、

「あの女狐が小じやらくさい眞似をするから



ぼろ窓の屋敷のお稲荷さまが拜まれるのだ。  
 第一番に、あの女狐めから打ち殺してくれよ  
 う。そして、皮は俺の襦袢にしてしまはう。」

た。  
 やがて、それに弾丸を込めて身支度をと、  
 のへると、下男の六平を呼び、

命に懸きはじめまし  
 へを決め  
 かり考  
 と、  
 あり日久八  
 は、土蔵の中  
 から鐵砲を持出  
 して、一生懸  
 命に懸きはじめまし

三四  
 「今から俺は、あのお仙狐を打つて来なけ  
 りやならないんだ。しかし、四郎兵衛の屋敷  
 中で殺すと、あの爺め文句を言ふかも知れな  
 いし、すりや村の奴らが騒ぎ出さうもわから  
 ないから、後原の沼岸の方へ追出して打ち  
 止めなけりやならない。六平、お前は真に行  
 つて稲荷さまのところの穴から、あの女狐め  
 を追出して来い！」と言付ました。

と、六平は驚いた顔つきをして、  
 「そんな無法な真似はお断しなさいまし。」  
 「何？ この腰抜野郎！ きさまはあんな畜  
 生を飼ふまでも思つて、罰でも當てら  
 れるのを恐れてゐるのか！」  
 「罰は當つても當らなくとも、旦那さま、あ  
 のお仙狐は何も悪いこと一つするでなし、  
 それに四郎兵衛爺さんのところで可愛がつて  
 ゐるんです。何もあんな女狐が一匹生きてゐ  
 たとて、旦那さまの御威光にか、はりません  
 でせう。」  
 六平にかう言はれると、久八庄屋は非常に  
 腹を立て、  
 「つべこべ言ふな！ 主人の言付けた聞か  
 ない下男があるか！ 直に言ひつけた場所へ行

つて追出して来い！」

それでも六平が、行きかねると久八庄  
 屋はいよゝ怒つて、

「早く行かないと、かうしてくれろ！」と嘸  
 鳴りつけながら、鐵砲の臺尻で六平の腰のあ  
 たりを、一つなぐりつけました。

六平は、仕方がないので泣きながら出かけ  
 ました。

四

六平はしばらく出かけることは出かけたも  
 の、何の恨みがあるかは知れないが、あんな  
 によく人に馴れた女狐を打ち殺してしまふ  
 のは可哀想だ！ こりや一つ、俺が追出しに  
 行かうとしたら途中で騙されて、遂々お稲荷  
 山まで行けないでしまひました。といふこと  
 にしよう。さうだ〜……と、六平は途中  
 から、逸つた道をすん〜陶村の方へ行つ  
 てしまひました。

その時、久八庄屋は沼の岸の原つげにしや  
 かん、お仙狐の追出されて来るのを、今  
 か〜と待つてゐました。  
 が、何時まで経つても女狐は走つては来ま

せん  
 六平の  
 姿さへも  
 見えないので、  
 キツカク久八、益  
 益腹を立て、氣の  
 毒なほどいら〜してゐ  
 ました。  
 その沼縁には、大きな街道  
 が通じてゐましたが、恰度その  
 時、その街道を立派な大名行列が通



「か、りました。金紋先筒、鳥毛の槍、長柄の傘をゆつさゆつと、右に左にふり立てながら、美しい長行列がやってきました。先頭に立つた武士が、

「したんり〜下にあろ〜下にあろ〜」

と、嚴かめしく囀鳴ります。

流石のキツカタ久八も、その制止の聲を聞くと、そこにつたり土下座をしてしまひ、

頭を大地にすりつけ〜お辭儀をしてまします。

間もなく一人の武士が行列から出て、つかつかと久八の前に進み寄りましたが、

「その方は何者ぢや」と聲をかけました。

「はい〜、私はこの村の庄屋の久八めじりです。」

「左様か、然らば何故早く人足を出さぬぢや! 不届なるに於ては容赦なすわぞ。」

「はい、早速人足を差出します。」

「何の先觸れもありませんので、この御領内ではお觸れない時には人足は差上げずともよろしいと申すことで……」

「何をぐ〜、申し居る! 早くいたさん

の口惜しさつたらありませんでした。しかし、あくまでも強情な人間でしたから、「この敵は必ず討つて見せる!」と、固く決心しました。

もう鐵砲は、沼へ放り込んでしまつてないので、櫛の木で捲けた六尺の棒を持つて、毎日のやうに四郎兵衛爺さんの家の裏山をうろつき廻りました。

お仙狐は利口ですから、夙くに何處かへ隠れてしまつて姿を見せません。

「庄屋どんは、懲り性のない人だ……」

「あきれた通情者だ……」

「キツカタ久八——バカサレ庄屋。」

と、村中の人々が腹ではなかしがつてなりました。

ある朝、久八庄屋は何時ものやうに、お仙



「か!」

「はい、どうぞはや不行届きの段は平に御容赦下さりますやう……はい〜」

と、鐵砲を沼の中に放り込んで村の方へ駆け出しました。

この時、その原つばの真中には村人の老若男女大勢「ワアツ〜」と騒いだり、笑ひ轉げたりしてなりました。

そこへ駆け込んだキツカタ久八は、

「た、たいへんだ! 早く人足を出さなけりや、不行届ぢや。大變ぢや。藤助、芳藏、萬作、八右衛門、文介、勘太、灌助、三五郎……、それから……爲吉と助の十人だ。今、呼ばれた者は人足ぢや! 直ぐに來い!」と、大あわてにあわてくさつて、せいせい息を切らしてゐます。

「何を騒いでゐるぢや、久八さん?」

「どうしたんぢやな、庄屋どん?」

「庄屋さまが氣が狂つた……」

「久八さんが氣がふれた……」

人々は、なかしより今度は海氣味が悪くなりなりました。

「何をお前達は言つてゐるんぢや。あのお大

名行列が見えないのか!」

久八庄屋は後を振り返つて見ると、そこには大名行列どころか、入つ子一人姿も見え

ません。

「何がお大名行列だね? 庄屋どん!」

「うむ……さては……」

久八庄屋は、そこへどかつと尻餅をついて腕を組んで考へ込みました。

村人等はやつと様子が変わりました。

はじめ、次郎作が隣村へ使ひに行つて歸り道、酒邊にさしかかると、久八庄屋が何もない街道の端に頭を土にすりつけ〜お辭儀をしてゐるので、びつくりして村に飛んで來て人々に話して、大勢でそこまで様子を見にやつて來たとこゝろなりました。

五

庄屋だといふことを鼻にかけて、村人達をば途かに見下げてゐた敵張りの久八が、それらの村中の人々の目の前で、しかも情んでゐる女狐に騙されて土下座して、べ〜、額を地べたにすりつけてゐるとこゝろを、すつかり見られてしまつたのですから、キツカタ久八

退治に出かけようとしてゐる處へ、見知らぬ男が這入つて参りました。

「私は、隣村の者ですが、正午ごろ、この村をお殿様の行列がお通りになりましたから、人足を何時も通つて置いで下さい、はいさやうなら……」

久八庄屋は、見かけたことのない男だとは思ひましたが、失敬つては大變ですから、真退治なぞは打放つて、早速村の男連十人を呼び集めて、村境のところまで出張つて待ち受けました。

けれども、お殿さまの行列はなにかな

かやつて來ません。その中に、夕方に

なつてしまひましたから、村人等は變に

思つて、隣村の庄屋の家へ使ひを出して問合せる。

「そんなことは、かち知らない!」と

いふことでした。

「また騙されたのぢや……!」

「庄屋どの、ために、俺らまで騙された。」  
 「何とまあ、おほう面だらう……」  
 村人等に、かう言はれると久八庄屋は體  
 中から冷汗を流す程でした。

六

しかし強情我慢な久八庄屋はそれでも、威張  
 り散すのと、お仙狐退治に出歩くことは止  
 めませんでした。  
 下男の六平は一生懸命、狐退治は、思止  
 るやうにさいましましたが、下男なその言葉で  
 考へ直すやうなキツカタ久八ではありませ  
 ん。  
 今は、その六尺棒を拖へて野山を駆け通  
 る久八庄屋の姿を見ると、村人らは腹の皮が  
 ちぎれる程なかしがりました。  
 ある日、何時ものやうな身帯へして、せつ  
 せつと女狐探しを続け、あまりくたびれたの  
 で、例の沼藪で一息入れてなりました。  
 ところへ、また、  
 『したん！く……下にあるろ！ 下にあるろ！  
 と、お大名行列が美々しく繰り込んで来

ました。  
 その行列の有様は、前の日に騙された時の  
 光景とすこしも變りありませんでした。  
 「畜生！ また出づかつたな！ うむ、よし  
 よし、今度こそ失敗らないぞ！ 畜生、今度  
 こそ通ひしてなるものか！」  
 久八庄屋は武者振ひをしながら、そつと六  
 尺棒を握りしめて、行列の近づくのを待ち  
 構へました。  
 村人等はまた、原中の方へどや／＼駆け集  
 つて来ます。  
 「村の奴等も今度には、俺の本當の値打がわか  
 るだらう。思知らしてくれよう！」  
 時分はよしと、久八庄屋は、同近く進んで  
 来たその行列に向つて、六尺棒を振りあげ  
 て急に飛び出し、  
 『この畜生！ 今度こそ騙されねぞ！』と  
 取鳴りながら、打つてかかりました。  
 「無禮者！ 下れ！」  
 『それ、狼藉者を締め捕れ！』とばかり、久  
 八庄屋は忽ちにお供の武士達に、ふん縛られ  
 てしまひました。  
 この行列は、ほんたうの大名行列だった

のですからたまりません。  
 だん／＼役人が調べてみると、その村の庄  
 屋で狐退治中の失敗とわかつたので、お狐  
 籠の中で見てなつたお殿さま、大そうなかい  
 がり。  
 『生命だけは助けて遣はせ！』との仰せなの  
 で、危い生命がやつと無事で歸されることにな  
 りました。  
 しかし、そんな人間を庄屋にしては置けぬ  
 とあつて、その時限り、久八庄屋は免職にな  
 つてしまひました。  
 庄屋を止めさせられた後の久八は大變い、  
 人になりました。  
 でも、小さい時分から肩をきく／＼そびや  
 かしながら歩いた癖だけは、何うしても直ら  
 ず、キツカタ／＼しながら歩くので、相變ら  
 ず『キツカタ久八』といふ仇名は除れません  
 でした。  
 (をはり)



象に乗つた少女

大戸喜一郎

岡本 歸 一 畫

町ぢうは、朝のうちから大騒ぎでした。何しろ、  
 田舎ではめつたに見ることのできない曲馬團が来  
 て、けふ顔見世をするといふのです。假小舎は鎮守  
 様の前の畑地へ、二日もかかつてやつとできあがり  
 ました。象だの、驢馬だの、犬だの猿だのといつし  
 よに、可愛らしい少女達が、いろ／＼の藝をしてゐ  
 る繪ビラは、いく日も前から辻々にはり出されてゐ  
 ました。  
 『生きてる象が、二匹もあるんだつて。』

「お猿も、たんとゐたよ。」

「それに小ちやい女の子が、藝がうまいんだつて。」  
人々は繪ビラを前にして、いろ／＼と噂をしあひ  
ました。

まつたく町の人々は、曲馬團て何をするのか、見  
たこともありませんでした。ですから人々は一つと  
きも早く、見たくてたまらなかつたのです。それに  
洋行歸りタチバナ曲馬團といふ文字も、人々の人氣  
をどのくらゐあほつたかしれませんでした。

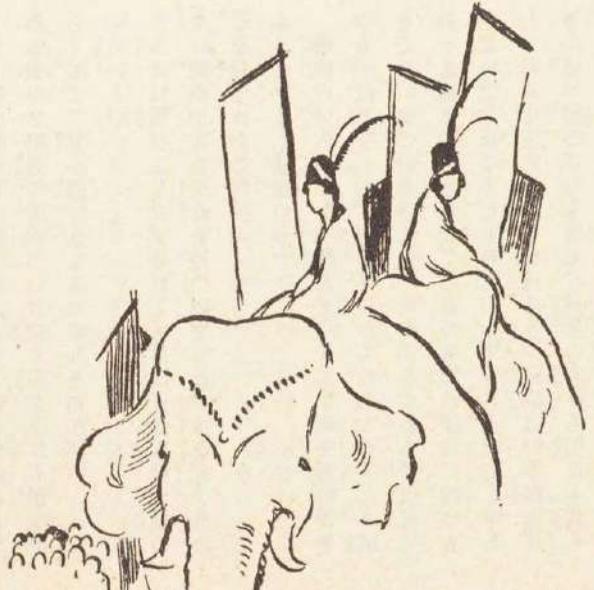
顔見世は午前九時といふ、ふれこみでした。それ  
なのに人々はもう八時頃から押しかけて行つて、鎮  
守様の前は、お祭のやうな騒ぎでした。假小舎の正  
面には廣い露臺のやうなものがつくつてありましたが、そこにはいろいろの旗が引きまはされてゐるだ  
けで、人ひとり出てはをりませんでした。たゞ時を  
り、妙な顔をした男が、幕の間からひよいと顔だけ  
出して、おどけた顔をしては、みんなを笑はしてゐ

ました。

やがて小舎の中から、とつせん樂隊の音が響いて  
來ました。みんなは言ひ合したやうに、狭い入口に  
目をやりました。

まつ第一に、だんだらの妙な形の服をきた道化者  
が、首に紐をつつて、手に大きな拍子木を持つて出  
て來ました。次に、四五人の樂隊の人が出て來まし  
た。大きな太鼓や、小さな太鼓、五尺もあるやうな  
大きなビカ／＼光つてゐるラツバ、クラリオネット  
それが何となく氣を浮きたせるやうな曲を奏でな  
がら、出て來ました。それにつづいて二匹の大きな  
象が出て來ました。上には肉細絆の上につまづ赤なマ  
ントを羽織つた少女が、一人づつ乗つてをりました。  
その後から二匹の驢馬に、これも少女が一人づ  
つ乗つて、出て來ました。それから犬の上に乗つた  
お猿さん。いく人かの旗持ち。この妙な行列は、人  
人の中を通りぬけて、やがて町の通りへと進みまし

た。大せいの子供たちは、ぞろ／＼とその後について  
歩いて行きました。時々先頭に立つた道化者はカ



チ／＼と拍子木を打ちました。すると、樂隊はとま  
り、行列は動かなくなつて、さて道化者は、面白  
かしく口上を述べ立てるのでした。町の人々は、大  
人も子供も、家から出て來てこの行列を迎へ、道化  
者の口上に耳を傾けました。  
ちやうどこの行列が、町の曲角へ來たときでし  
た。

「お君姉さん。」

さう叫び聲がしたかと思ふと、子供をおんぶしてゐる十一二の男の子が、いきなり人ごみから飛び出して来て、象の前に立ちふさがりました。

「危い！」

人々は叫びました。けれども男の子はちつと象の上に乗つてゐる少女を見つめました。少女も、男の子を見つめました。

「こらッ！ 餓鬼め！」

樂隊の一人が、かう叫んで、どん！ と男の子をつき飛ばしました。男の子のからだはごろ／＼と道をころがつて行きました。おんぶしてゐる子供は、わつと泣き出しました。それでも男の子は、泣きもしないで、ほりだらけになつて立ち上がりました。けれどもそのときにはもう、行列はいく間もさきの方へ行つてしまふし、見物の人々も何にも起らなかったやうに、ぞろ／＼と行列の後について行つてゐました。

## 二

男の子は三次でした。去年の暮に、秋田からこの町の染物屋へ賣られて来たのでした。けれども小さくて糸を染めることができませんでしたから、子守をさせられてゐるのです。

三次は、ちつとつ立つたまゝ行列を見送つてをりました。象にのつて赤いマントを羽織つた少女の姿が、人ごみの上にぬけ出して、いつまでも見えてをりました。

「たしかに姉さんだ。」

三次はさう言つて、自分が小さい時どこへ行つたのか行き方知れずになつた姉さんを思ひうかべました。そして今日みた象の上の少女とくらべて見ました。姿こそ變れ、大きさをちがへ、まつたくよく似てをりました。

「お君姉さんだ。」

三次は、今日呼びかけたとき、象の上の少女が驚いたやうな顔をしたことを思ひうかべて、ます／＼と姉さんに逢ひないと思ひきめました。

それなら三次は、どうしたらいゝのでせう。行列が見えなくなつて、そろ／＼と家の方へかへりかけた三次は、ちつと考へこみました。そして一番いゝことは、その少女にあつてきいてみることにだと思ひつきました。

お晝をたべると、三次は大いそぎで鎮守様へ行きました。もう曲馬は始まつてゐました。小舎の前の露臺の上には、肉縞袴を着た少女たちが大せいかたまつてゐて、舞臺の方へ、行つたり来たりしてをりました。けれども三次のさがしてゐるあの少女は、どこにも見あたりませんでした。舞臺と露臺との間をくぎつてゐる幕が動いたに、こんどは、こんどはと思ひながら、三次は、日のくれるまで外に立つてをりました。やがて曲藝は終つて、見物人はどや

どやと出て来ました。それなのに、あの少女は、たうたう姿を見せなかつたのです。

その晩三次はうすい布圍にくるまつてからも、なか／＼寝つかれませんでした。今日見た少女のことや、小さい時のお君姉さんの顔や、姉さんがあなくなつたとき涙をこぼして氣ちがひのやうに捜し歩いたお父さんのことが、つき／＼に浮んで来るのでした。

「あの人がほんとに姉さんで、國へ歸つてくれたらお父さんはどんなに喜ぶだらう。」

三次はさう思ひました。そして國を出るとき、お父さんが涙をこぼして淋しがつて、

「前にはお君を取られるし、こんどはお前を手放さなきやならねえ。な三次。お父さんはどんなに淋しいか知れねえぞ。それでもお前はまた歸つてくるんだ。兵隊検査が来りや、立派になつて歸つてくる。その時にや絹の着物を着て歸つて来てくれ。な、そ

れを楽しみに、俺も働いてらあ。」  
さう言つた言葉が、たつた今いはれたやうにはつきりと思ひかへされるのでした。三次は急にポロポロと涙を流しました。そしていつまでも、終ひに睡りこむまで泣きつづけました。

三

あくる朝三次は、誰より早く目をさしました。そして起き上がるとさつそく押入から小さな石鹸の入つてゐたボール箱を出しました。それは三次のお金入れでした。兵隊検査に家へかへるときに着る絹の着物をこしらへるお金でした。三次はそつと中をあけて、ザラ／＼と銅貨を掌にうつしました。みんなで十三錢！これは三次がいく月かかかつてためたお金でした。三次はそのお金を大事に内懐にしまひこみました。そしていつものやうに子供をおんぶすると、さつそく鎮守様へ出かけて行きました。



次は大せいの少女達の藝當でした。一人の肩から肩へ重り合つたり、またバラ／＼にはなれたりしました。けれども三次はその少女たちの中にも昨日象

まだ曲馬は始つてをりませんでした。それでもうかなり大せいの子供たちが集つてをりました。小舎の前の露臺には、驢馬やお猿さんがゐるだけで、少女は一人もをりませんでした。三次は長いこと待つてから、札を賣り始めると、第一番に小舎に飛び込みました。まづ第一は犬の藝當でした。次に驢馬に乗つて少女が出て來ました。少女は狭い舞臺に驢馬を走らせながら、背中に片足で立つたり、腹の下をくぐつたり、バラ／＼させるやうな藝當をくりかへしました。その次は二丈もあらうと思はれる高い天井に取りつけたブランコに乗つて、一人の少女がいろ／＼の藝當をしました。

「ハッ！ ハッ！」と掛聲をかけながら、片足の甲をブランコにかけて吊りさがつた少女を見たとき、三次はハッとして血がわき立つやうに思ひました。次から次へ、その少女は見物人をすつかり惹きつけ、命がけの藝當をつづけに行きました。

に乗つて來た少女がゐないのを知ると、早くお終ひになればよいと思ひました。そして最後にいよ／＼象の曲藝がはじめられると、三次は急に胸をドキドキさせて見入りました。ところが肝心の少女はいつになつても出て來ませんでした。小さい臺の上に、一匹の象が大きな足を四つとも乗せたり、後肢で立ち上がったたり、道化者の鞭一本で思ふ通りの藝當をしました。見てゐる人たちは、その度ごとに拍手したり、賞めたりしました。

けれども曲藝の第一回は、それでお終ひになつたのでした。三次はせつかく入つたのにたうとう少女を見ることも出來ずに、出なければなりません。

三次は外へ出てから、また小舎を振り返つて露臺の上を見ました。そこには前と同じやうにいく人も少女達が、面白さうに何か喋り合つてをりました。それなのに、初めての日に象に乗つて來た少女

は、どうしたといふのでせう。やつぱりそこにも見  
えませんでした。

三次はぼんやりして家へかへつて来ました。昨日  
見た少女が——自分の姉さんが、どこにもゐないとい  
ふ事が、不思議でたまりませんでした。

「見おとしたのかもしれない。」

三次はさう思つて、また行つてみました。もう三  
錢しか持つてをりませんから、中へ入ることはでき  
ません。三次は、それからまい日／＼小舎の前へ行  
つては、露臺の上を見つめてをりました。けれども  
あれつきり、象に乗つて来た少女を見ることはでき  
ませんでした。

ある日のことでした。三次はお晝ご飯をたべ  
ると、またさつそく鎮守様へ出かけようとなりました。  
すると、ご主人が急に呼びとめて、

「三次、お前近頃どうかしてやしねえか。」とたづね  
ました。

しいご主人！ その日のうちにご主人は三次のお父  
さんにあてて至急電報を打つてくれたのです。

「明日の夕方方は来るだらう。」

ご主人はさう三次に言ひました。

#### 四

ご主人の言つたとほり、三次のお父さんは来まし  
た。久しぶりに會つた三次は、どんなに嬉しかった  
でせう。けれども不仕合せなことに、曲馬團の一行  
は昨日この町を立つてしまつたあとでした。

「何あに、この次の町にかゝつてる事を、警察から  
聞いてゐるから。」

ご主人はさう言つて、今晚はゆつくりとまつて、  
明日の朝三人して早く行かうと言つてくれました。  
言はれるまゝに三次のお父さんはその晩は三次と同  
じ部屋に休みました。

あくる朝早く三人は家を出ました。そしてやつぱ

三次はこの不意の言葉にびつくりして何とも答へ  
ませんでした。

「お前、あの曲馬の男に突き飛ばされたさうだな。  
え、何か姉さんでもゐるとかいふちやねえか。」

「あゝ、姉さんがゐるんですよ。」

三次は始めてかう答へました。そして小さい時姉  
さんが急にゐなくなつたことから、毎日見に行く事  
まで残らず物語りしました。

「うむ、呼んだらお前の方を見たんだな。」

主人はさう言つて考へこんでをりましたが、

「確かに姉さんに違ひないな。」と言ひました。

「えゝ、確かに姉さんです。」

「それちやお前のお父さんを呼ぶがいか。」

「あゝ！」と三次は飛び上がつて叫びました。「さ  
うしてもらへたら、お父さんが、どんなに喜ぶか知  
れませんか！」

三次はもう涙をばろ／＼こぼして喜びました。優

り利根川に沿つた次の町へ舟を下つて行きました。  
舟を下りて、次の町へ入つたとき、三次は自分の  
町で見たと同じい繪ビラが注々にかかつてゐるのを  
見ました。あの同じい形の小舎が出来上がつてゐる  
のを見ました。同じい露臺があり、同じやうに少女  
達がかたまつて話し合つてゐるのを見ました。そし  
て中へ入つてまた同じい犬の藝當を、驢馬の藝當を、  
そして少女の藝當を見ました。けれども、たつた一  
つ違つてゐるのは、象の曲藝でした。自分の町では  
決して見る事ができなかったあの少女が、象の背中  
に乗つてゐたのです！

やがて三人は黙つて、曲馬小舎を出ました。そし  
て警察の小さな部屋に坐つてをりました。間もなく  
あの少女と曲馬團の頭とはやつて来ました。三次の  
ご主人とお父さんと、曲馬團の頭とは、お巡さんを  
側において長いこと話し合ひました。けれども三次  
にはその事はよく分りませんでした。三次は少女を



けれども聞もなく、お巡りさんは口を開きました。

「お前は、この娘を誘拐したのぢやない。それからお前は。」と三次のお父さんに向つて言ひました。

「この娘を連れて行く氣かね。」

「ハイ、本人さへ承知でしたら。」と三次のお父さんはいひました。するとお巡りさんは少女に向つて言ひました。

「お前さんは國へかへり

ますか。」  
「國へ？ いゝえ、私歸りませんわ。國へ歸つて何

見、少女は三次の顔をまじく見つめてゐるだけでした。

をするんでせう。私やつぱり親方といつしよに方々を廻つて歩く方がいゝのです。」

三次はこれをきいて、ポロ／＼と涙をこぼしました。そして心の中に「姉さんぢやないのかしら」と思ひました。

やがて曲馬團の頭は、たくさんのおさつを三次のお父さんに渡して、言ひました。

「それでは皆さん、おさきにご免を蒙ります。さあ、みどりさん、行きませう。」

少女は皆にちよいと會釋をすると、部屋を出て行きました。三次はたまらなくなつて、同じやうに部屋を出ました。そして階段のところで、

「あんたお君姉さんぢやない？」と、少女にたづねました。

少女は何とも答へずに、ちつと三次を見てをりましたが、

「來年の春になつたら、またあんたの町へ行きます

わ。」

さういつて、トン／＼と、階段を下りて行きました。

三次はまた前と同じやうに子供をおんぶしてをりました。お父さんがいつしよに田舎へ歸らうと言つたのもことわつてしまつたのでした。三次は、あの少女のいつた「來年の春になつたら、またあんたの町へ行きます。」といふ言葉を、深く思つてをりました。そして残つてゐた三錢にお父さんがくれて行つた五十錢銀貨を大事にボール箱にしまひこみました。

「こんど曲馬がかつたら、毎日見に行くんだ！」  
三次はさう思つて、お金のふえて行くのを楽しんでをりました。

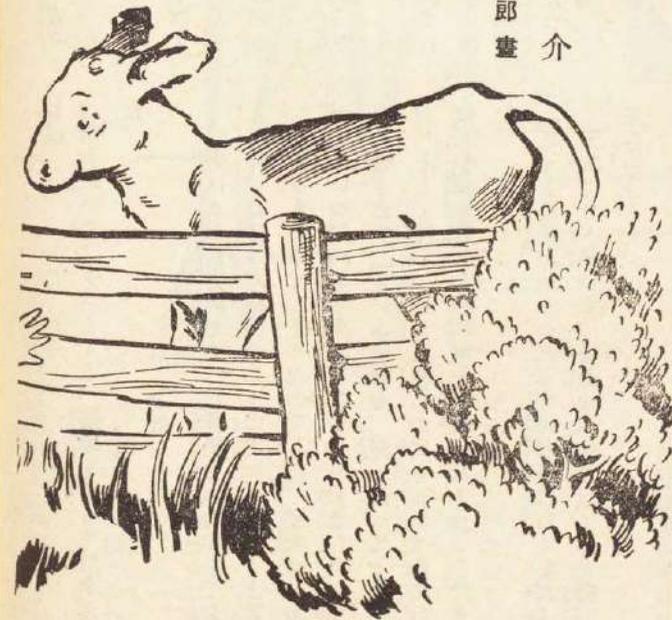
——おはり——

# 乳屋の仔牛

杜 仙之介  
寺内萬治郎畫

乳屋で仔牛が  
生れたぞ

皆んなで 手つないて  
見て來ませう



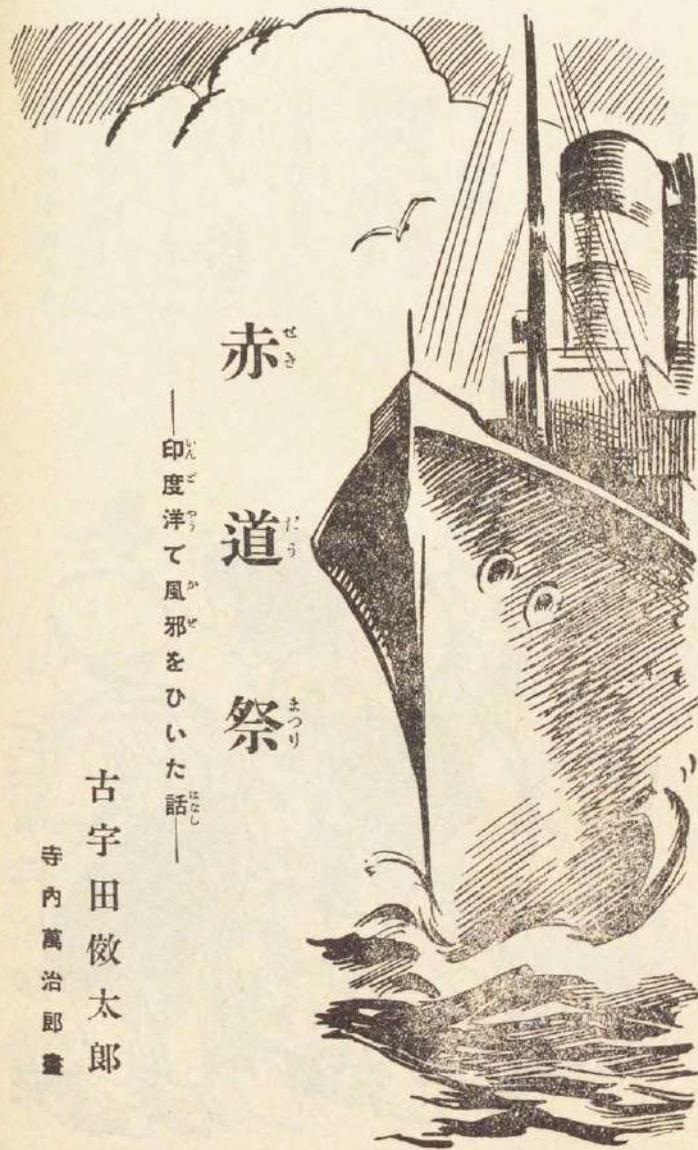
仔牛のお頭にや  
角がない

仔牛は 牧場で  
はねてたぞ

牧場の日和は  
いゝ日和

皆んなで 手つないて  
見て來ませう





# 赤道祭

—印度洋で風邪をひいた話—

古宇田傲太郎

寺内萬治郎畫

船が、日一日と赤道に近づいて来ますと、初めて  
の船客は一寸聞いて見たくなります。

「赤道にあたるところは、一體何うなつて居るので  
せう？」

ある船員は笑ひながら、

「其處の水面は、赤く筋を引いたやうに見えます。」

と言ひます。また、ある船員は、

「其處は潮流の加減で、水面が一段と浮き上がつて  
居ります。」

と答へます。

が、どちらも戯談で、實際赤道といふてもそれは  
只地圖の上の線で一般の海面と少しも違ひません。

そんなら、

「赤道は太陽に最も近い處ゆえ、太陽の光線で焼き  
附くやうに暑いのか？」

とお聞きになる方もありませう。成る程暑いことは  
暑いですが、けれど洋上には絶えず冷しい風が吹き

通して居りますから、甲板に出て居れば、汗すら出  
ない程の涼しさです。しかし航海が長く続きます  
と、朝から晩まで甲板の安樂椅子に嘔り附いて、只  
空と水とばかり眺めて居ては退屈であり、また食欲  
が付きませんから甲板上で色々な遊戯を催します。

私はある年、紐育から南米ブラジル國の、リオ・  
デ・ジャネーロ港まで船で大西洋を北から南へ、赤  
道を横切りました。その時の船は米國船で、多勢の  
船客中、日本人は私一人切りでありました。船中  
では、さまざま退屈凌ぎに、面白い運動會が催され  
ます。

或る日掲示場に「南國海王より」として、無線電  
信が貼り出されてありました。文面は、

「最近我王廳への通信に據れば、貴船は目下南半  
球へ向け航海中、兩三日中に赤道を横切らんと  
しつゝある由、就いては、王廳規約に基き、今  
回初めて南半球へ渡らるゝ一等船客に限り、來



この妙な儀式は、赤道祭と稱へて、南米行の米國船が、赤道を通過するとき必ず開催する餘興であります。そしてそれを済ませた人には、運動會閉會式の際、立派に印刷した免状のような紙片を授與し其紙片を持つて居れば、次航海には更めて此洗禮を受けないでよい譯なのです。こんなことは、戲談好きな米國人同志の間には、面白くもありませんが、日本人として、而かも唯一人の私には頗る迷惑な惡



何月何日正午、緯度零度、西經卅三度卅分の地點に於て、我海王の面前にて嚴肅なる洗禮を受くべきものなり。若し此命に従はぬものあらば、着船後上陸を許さざらんし。』  
 といふのです。  
 此電報を見ますと、船客は大騒ぎを初め、ぼつばつ海水へ這入つて洗禮を受ける積古をして居ます。海水へといつても、航行中の船の中から、太西洋の真中へ飛び込むものではありません。甲板の上に臨時にこしらへた三間四方、深さ一間位の水漕の中で、つまり海水浴をするのです。  
 さて當日豫定の時刻になりますと、王廳から海王と王妃とが、侍臣、侍醫、従者十數名を従へ、樂隊付きで堂々と船中に乘込んで參ります。そして、水漕の傍に查問所を設け、船客を一々呼び出して旅行の目的、信仰する宗教などを訊ね、最後に醫師が健康診断をし、薬と稱して鹽水などを服ませます。そ

洒落としか感じられませんでした。

しかし其の様に、船中でありながら、戸外運動のやうなことをして、體を動かし、心を轉換して居らなければ、健康を害し、容易く病氣に罹る機會をつくるといふことにもなりません。

さて、歐洲から日本へ歸る時には、印度洋を通つてくる事にしました。暑い／＼印度洋を、西より東へ、スエズからコロンボへ向け十數日、航海を續けたのです。この航路は、赤道は横切りませんが、赤道近く、北緯十何度の處を走りまして、其暑さは、印度大陸の影響で、先年太平洋の赤道を横切つた折に較べて、遙かに劇しく覺えました。

此度の船は日本船で、乗客も大部分日本人ですから、萬事気軽に我儘も出来やうといふもの。また赤道祭などいふ、ばからしい催しもありません。その代り、船客連の演藝會が、一日企てられました。大小天狗連の鼻の突き合せがございました。私はそ

んな隠し藝會に引張り出されるのが忌やさに、二三日前から成るべく甲板へ出ずに、圖書室で手紙を書いたり、夜は眠くないものですから、遅くまで自分の室で讀書したりして居ました。

處が、其罰が當つたか、間もなく風邪を引いて、體温卅九度、頭と腰とが痛んで、演藝會當日は本當に寝込んで了ひました。熱帯を通る時に風邪を引くなどは氣の利いた話ではありませんが、實際往々あることなのです。

一體風邪を引くのは、先づ、其人の心掛けが悪いからです。

凡そ人間は、他の動物と同様、外部からの侵襲に對して、自ら備へ之に抵抗するだけの能力を有つて居るものです。犬や猫が咬み合ひをしてこしらへた傷を舐めながら、自分で癒して了ふと同様、人間とても、ある程度までは、自分の力で病氣を癒し、又病氣に罹らず済ませることが出来ます。

それにつけても人は、永く丈夫で働かうとするには、不自然であつてはならぬと思ひます。我々の呼吸する空氣、物を見る光、熱、毎日無くてはならぬ水など、此等は皆天然造化の儘です。この中に成長し、生活して居る我々は、花に舞ふ胡蝶、野邊に囀る小禽と本来同一生物ですから、此等生物と同様に、朝は太陽と共に起き、夜々として勉め勵み、愉快に遊び歌ひ、夜は太陽が没してからには、何時までも無駄な時間を過ごさず、早く寝るやうに心掛けたならば、風邪などいふ、解體の分らぬ病魔に冒されることなく、自然天賦の壽命を享樂して、安穩に一生を送れる事疑ひありません。赤道祭のお話ごとんだ岐路へ這入りましたが、皆さんも南國海王の前へ引出されて、御談義を聴かされたと思つて、あきらめて下さい。

さて普通、風邪と稱へる病氣は、氣候又は室内の外の温度に急激な變化があつた際、皮膚又は粘膜炎の抵抗力の弱い部分から犯されることが多くあります。鼻風邪といふのは、鼻の粘膜炎を犯されて、水鼻汁が多く出ます。時に口腔内の粘膜炎、殊に扁桃腺が先づ犯されることもあります。西洋人は日常起きて居る間は靴を穿きづめにして居りますから、稀に靴下を脱いで床の上を歩いたりすると、そこから風邪を引くと言ひます。寢像の悪いお子さんは、夏、下腹を冷やして、よくお腹を下したり、風邪を引いたりします。

そこで私が、印度洋で風邪を引いた譯を考へて見ますと、大方室内の蒸し暑さで、夜明け方氣温の變り目に、知らず識らず被けて居た毛布を剥ぎ去り、其の上、室の上方の窓を少し開けて置いた爲め、其處から海上の夜の冷氣が遠慮なく這入つて來て、不用意な私の皮膚と粘膜炎を犯したものだと思はれます。

(をばり)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

鴉鳥 (賞)

檀上春之助 (和歌山)

鴉鳥や

群がつてとんで来た

とんで来た

豆柿や

日に日に

減つてつた

鴉鳥や

だんだん

来なくなつた

七夕祭り (賞)

名方 和郎 (大要)

七夕祭りは

夜祭りよ

色紙 笹竹

揺れてます

アレサ小風に

揺れてます

線香花火の

お祭りを

七夕さんは

見てみます

アレサ夜祭り

見てみます

竹藪 (賞)

千葉 仔明 (東京)

竹藪アー 雀の

ねるところ

雀のお家が

あるところ

役場の 横ちよの

竹藪は

いつでも 雀が

さわいでる

お母さん 歸るまで

さわいでる

おごりこ草

山岡 静子 (岡山)

お池にうつつた

おどりこ草よ

金魚がいつばい

見に来てる

お池のふちの

おどりこ草は

とろとろ 真晝の

夢みてる

とんとん とろりこの

おどりこ草は

金魚とあそんでる

夢みてる

牧場のずばな

古村 徹三 (大阪)

このごろ お日さん

ぼかぼか ぼかだ

牧場へ みんな

花の井戸

本多 鐵磨 (東京)

さくらちるちる

竹やぶ

さくらちるちる

花の水

さくらちるちる

花の井戸

のぞきや

お顔は

花の中

繪日傘

日高 紅椿 (臺灣)

紅傘 日傘

紅い傘

あつちの嬢ちゃん

さして通つた

紅い椿の

模様傘

くるくるまわして

さして通つた

ゆかないか

すばなを抜きに

ゆかないか

すばなが出たよ

抜きに來い

羊にとふたら

そう云ふた

牧場は このごろ

ぼかぼか ぼかだ

鶯

森 ほたる (愛知)

ホーホーホケキヨの

鶯は

天神さまの

お社の

梅が散つたと啼いてます

ホーホーホケキヨの

鶯は

遠いお山の

山寺の

梅も散つたと啼いてます

愛宕さんの山

兼松 宮市 (岐阜)

愛宕さんの山は

椎の木の山だ

風吹く日には

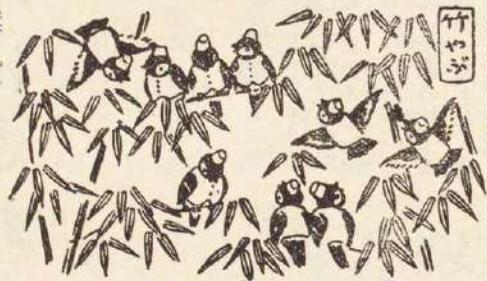
椎の實が落ちる

さすすが啼いた

けんけん啼いた

椎の實さがすか

けんけん啼いた



# 生理にされた話

久米 舷 一

寺内萬治郎畫



## 一、誘ひの手紙

今日(けふ)は一つ、私が子供(こども)の時に、北海道(ほくかいどう)の炭坑(たんこう)で起つた恐ろしい出来事(出来事)をお話し(お話し)いたしませう。

紙(かみ)には、「炭坑(たんこう)の有様(ありさま)も、一度(ひとたび)は見(み)て置いてい(い)くものである。夏休み(なつやすみ)を利用して、遊び(あそび)がてら見學(けんがく)に來(き)てはどうか。」と云(い)ふ意味(いみ)が書(か)かれてありました。

それは丁度(ていど)、私の十四(じゅうし)の時(とき)でした。夏休み(なつやすみ)が始(はじ)まつて間(ま)もない時(とき)の事(こと)、私は、北海道(ほくかいどう)の鶴巢(つるす)炭坑(たんこう)で坑夫(こうふ)生活(せいかつ)をしてゐる叔父(おじ)から、一つの手紙(てがみ)を受取(うけと)りました。その手

## 二、地の底へ

ばならぬ事(こと)を、その時(とき)は少しも氣(き)附(つ)かなかつたのです。

私が鶴巢(つるす)の炭坑(たんこう)に着(き)いたのは、ちようど夕方(ゆふがた)でした。坑道(こうどう)の入口(いりぐち)に行(い)つて見(み)ると、仕事(しごと)を終(お)つた坑夫(こうふ)達(たち)が、手(て)に手(て)に鶴巢(つるす)やカンテラを提(た)げて、穴(あな)の中(なか)から出(で)て來(き)る所(ところ)でした。

はお前(まへ)が今日(けふ)くるか明日(あした)くるかと、毎日(まいにち)首(くび)を長(なが)くして待(まち)つてゐたんだよ。」男(おとこ)はかう云(い)つて、私の身(み)體(たい)をギョツと抱(かか)りしめました。それが私の懐(なつか)しい叔父(おじ)の善助(ぜんすけ)だつたのです。私の新調(しんてう)の夏服(なつぷく)は、石炭(せきたん)くづで眞黒(まっくろ)になつてしまひました。けれど私は嬉(うれ)しかつたのです。叔父(おじ)さんは坑夫(こうふ)こそしてゐますが、それは一(ひと)氣(き)だてのやさしい、親切(せんせつ)な人(ひと)でした。その晩(ばん)は叔父(おじ)さんの家(いへ)へ泊(と)めて貰(もら)つて、翌(あした)の日(ひ)はいよいよ坑内(坑内)見物(けんぶつ)をする事(こと)になりました。私は叔父(おじ)さんと同(おな)じやうに、ゲートルを穿(は)き、手(て)にカンテラを提(た)ちました。「中(なか)へ這(は)入(い)つたら、なんでも私(わたし)の

も、或(あ)ひは縦(たて)に、或(あ)ひは横(よこ)に、ちようど、もぐらもちのやうに穴(あな)を掘(ほ)つて、石炭(せきたん)を探(たづ)ね出す炭坑(たんこう)、その中(なか)で、一日中(いちにちじゅう)の目(め)も見(み)ずに蟻(あ)りのやうに眞黒(まっくろ)になつて働(はたら)いてゐる多くの坑夫(こうふ)達(たち)話(はなし)にだけ聞(き)いて、未(ま)だ一度(ひとたび)も見(み)た事(こと)のない其等(それら)の有様(ありさま)を、叔父(おじ)さんが自分(おれ)で案内(あんない)して下さると聞(き)いて、私はどれほど喜(よろこ)んだ事(こと)でせう！

「萬歳(ばんざい)！ 萬歳(ばんざい)！」と思(おも)はず大聲(おほい)で叫(こゑ)んで、階下(かいげ)で丁度(ていど)赤坊(あかぼう)を寝(ね)せつけてゐるお母(おはは)様(さま)から、大目玉(おほめだま)を頂(いただき)戴(をか)しました。

あとで考(かんが)へて見(み)れば、あの時(とき)なんだつて、あんなに喜(よろこ)んだのか。炭坑(たんこう)に行(い)つたつて、何(なに)が面白(おもしろ)い所(ところ)か、飛(と)んでもない災難(さいなん)に出(で)遇(あ)はね



云ふ通りするんだよ。でないよ、飛んでもない過ちが出来たりするからね。」

坑道の入口に立つて、叔父は何遍もく、繰りかへして私を警しめました。

暗いトンネルを、三十間ほど進むと、今度は梯子段で下へ下りるやうになつてゐました。

「この段は、全部で二百二十段ある。下り切つた所が、第一作業場だ。足下によく氣を附けて、手欄にしつかり捉まつて下りるんだよ。一步踏み外すと命が無いよ。」私は云はれた通り、一步一步踏みしめて、こわく下りて行きました。あたりは、鼻をつままれて分らぬ程眞暗です。下の方を見

渡すと、私達より先に下りて行く坑夫等のカンテラが、ちらちらと鬼火のやうに揺れて居ります。

やつとの事で、第一作業場へ着きました。叔父の働いてゐる第二

作業場は、其處から更に、百五十尺も下へ降りた所でした。

其處に一人、此處に一人と、坑夫達が、各々自分の足場をさめて、石炭を掘つて居ります。遠ましい横顔が、汗ばんで、カンテラの光りに照されてゐるのを見ると、なんだか、物凄いやうな氣がします。其時私は、道の右側に、ちよろちよろ、ちよろくと、音をたて、黒い水のやうなものが流れてゐるのに氣がつかしました。「叔父さん。あれは何ですか？」

私は訊ねて見ました。

「水だよ。水の流れたよ。まア、三途の河と云つた所だね。」

「え？ 水？ 何處から流れてくるんです？」

「今朝、お前が渡つて来た、石狩河からさ。石狩河の水が、地層を通して、滴たり落ちてくるんだ。」

お前はまだ知らないかもしれないが、今、俺達の居る所は、ちよろち、石狩河の眞下に當つてゐるんだよ。」

私は驚いてしまひました。

「えッ、河の下ですつて。ちやア、もし、河の底が突抜けたらどうするんです！」

「はは、く、く。大丈夫だよ。何百尺とある所が、突抜けて溜るもの

か。叔父はかう云つて、面白さうに笑ひました。併し私は、なんだか、今にも突抜けて來さうな氣がしてなりませんでした。

やがて叔父さんの仕事場に着きました。其處にはもう一人、白い鬚の生えたお爺いさんが、石炭を集めて居りました。

「やア先生。早いですね。」と、叔父が其人に向つて云ひました。すると其人は、振り向きもしないで、「ちつとも早くはない。お前の方が遅いのちや。」と、しわがれた聲で答へました。私は、えらさうな事を云ふお爺いさんだと思ひながら、小聲で叔父さんに、

「あの人は若い時に澤山の本を讀んだだけあつて、色んな事を知つてゐる。殊に礦物學に就いては明るいもので、この礦山の技師達でも、何か分らない事があると、あのお爺いさんの所へ行つて、教へて貰ふほどののだ。ところが、お爺いさんには一つの悪い癖があつて、兎角自分の學問のあると云ふ事を鼻にかけるのだ。坑夫等の前でも、なんだか六ヶしい術語を使つたりして自慢をするものだから、坑夫等はみんなうろさがつてゐるんだよ。そして、半分は嘲けりの意味で、このお爺いさんのことを、「せんせい」と呼んでゐるのだ、と云ふ事を小聲で話して呉れました。

私はそつと、せんせいの方を盗み視ました。せんせいは、赫ら顔の老人で、胸までも届きさうな、ふさ／＼とした白い鬚を持つてゐました。せんせいは、その光つた、豹のやうな眼で、ちつと私の顔を見詰めましたが、一言も云ひませんでした。おほかた、話し相手にもならない奴だと思はれたのでせう。

### 三、鼠の大群

さて、私が叔父さんと別れて、第一作業場の方へ引歸さうとした時でした。

突然坑道の入口の方に當つて、ドーンと云ふ凄まじい爆音が聞えました。それから十秒と経たない

内に、又續いて第二の音が聞えて來ました。

私には何の音だか、ちつとも分りませんでした。それから暫くたつと、今度は、ゴアツと云ふ雨でも降るやうな音をたて、何かしら黒い幕みたいなのが、非常な速力で私の足下を走り過ぎて、下の方へ降りて行きました。その黒いものと云ふのは鼠でした。何千何萬とも知れぬ鼠の大群でした。私は呆氣に取られて、黙つてその行衛を見詰めてゐました。

その時、なんだか私は、足の所が冷たくなつた様な氣がしました。それと同時に、ちようど板の間に小豆でも轉がすやうな、サラ

サラと云ふ奇妙な音を耳にしました。私は直ぐにランプを取つて、前屈みになつて、地面をすかして見ました。と、どうせせう。水が押寄せて來たのです。どす黒い、紺屋の溝のやうな色をした水が、ヒタ／＼と足もとを洗つてゐるではありませんか。サラ／＼と云ふ響きは、その水が非常な勢ひで階段をした／＼り落ちる音なのでした。

私は血相を易えて、叔父の所へ飛んで來ました。「叔父さん、大變です！水です、水です！」叔父は其時、せんせいと二人で、一寸した小高い所にあつて、石炭を掘つてゐました。

「ナニ、水だ？水がどうしたと云ふのちや。」

せんせいは怪訝さうな顔をして、かう聞き返しました。「水が流れて來たんです。河の底が突抜けたんです！早く來て下さい、早く……」私は氣狂のやうになつて叫びたてました。さうだ。きつと石狩河の底が突抜けたに相違ない！この坑内は瞬たく間に水で一ぱいになつてしまふのだ。我は一人残らず溺れ死んでしまふのだ！

せんせいはランプを片手に持つて、ゆつくりと丘から降りて來ました。そしてランプを地面の上に差出して、ちつと前方の方を見透して居りましたが、やにはに身を起

すと、

「こりやいけない。確かに水だ！  
おい、善助。逃げろ！ぐづぐづして居ると、命がないぞ！」と叫びました。

もうその時、水は私の膝の所まで押寄せて来てゐました。轟々と凄まじい音をたて、木片や芥を浮べた黒い水は、矢のやうに早く我々の足を洗つて流れて行きます。

「みんなランブをしツかり持つてゐろ。そして、私のあとから跟いてくるんだ。」

せんせいはいかう云つて、左手に高くランブを掲げ、右手に私の手を握つて、真先に階段の方へ進んで行きました。私はもう、言も云



ふ事が出来ません。水の爲に幾度か足を取られさうになるのを踏みしめ、やつと階段の所まで着きました。

「さア、みんなランブを消されないやうに、氣をつける、足を踏み外したら、それツきりだぞ。」

一番先に善助叔父。その次が私。最後にせんせいといふ順序で、我々は階段を昇り始めました。この段は全部で二百三十段。上り切つた所が第一作業場です。地上へ出るには、其處から更にもう一つの階段を上らねばなりません。

ところが、まだ半分も上らない頃です。突然頭の上から、ざアツと漣のやうな大水が一時に落ちて来て、あツ、と云ふ間に我々の

ランブは一つ残らず吹消されてしまひました。いえ、ランブどころではありません。私はすんでの事に、水の爲に洗ひ落される所でした。

「源坊。しツかりしろ。もう直ぐだ！」

闇の中でせんせいの聲が響きました。私は其時ほど、せんせいを頼もしく思つた事はありません。今かうやつてお話ししてゐても、その時のせんせいの聲が、ありくと耳の底に残つて居ります。

#### 四、さア、せんせい

水は、これでもか、／＼と云ふやうに、ざアツ、ざアツ、と頭の上から落ちて来ます。私はラ



ンブなんか、うつちやつてしまつて、両手でしツかりと手欄につかまりながら、せんせいの後に跟いて階段を匍ひ上つて行きました。やつとの事で、第一作業場まで上ることができました。まア、なんと云ふ物凄い有様でせう！水は恰度、私のお乳首の所まで来て居ります。崖の崩れる音、支柱の裂ける響き。太い／＼材木が、まるで木の葉のやうに軽々と流されて来ます。善助叔父は、その材木の一つにぶつかつて、左の膝にひどい怪我をしてしまひました。

ちようど其時、チラ／＼とランブの光りが見えて、二三人の屈強な坑夫達が我々の方へ流されて来



# 忍術少年年

小山勝清

水島爾保布畫

遠い遠い戦國時代の昔のことです。  
九州の豊前の國の山深い處に、猿啼山といふ山があつて、其處には猿啼城といふ古いお城が築かれてありました。城の主は香月左衛門といふ戦の強い殿様で、近國の小大名達は此人を魔神の様に恐れて居ました。  
庄七少年は、其香月左衛門の一家老河原兵右衛門の子供として生まれました。父の兵右衛門も、主人に劣らぬ戦の名人でしたが、この庄七少年は未だ僅かに十二の歳を迎えたばかりなのに、もう劍術、槍術、馬術を修め、兵法の極意迄會得したといふ世にも珍らしい神童で、殿様を始め家中の武士は皆舌をまいてゐました。其上、毎日猿啼城の後ろの山に這入つて、鳥を射たり兎を逐つたりする中に、馬鹿に身體のこなしが敏捷になつて、自然に忍びの術を覚え込

ました。  
「駄目だ、駄目だ！とても階段を昇る事は出来ぬ！」と、その坑夫達は口々に叫びました。  
「我々は死ぬんだ！皆んな此處で死んでしまふのだ！」  
その時、一人の男は、せんせいの方を見つけて叫びました。  
「お、せんせい！ 貴方は此處にいらしたんですか。……どうか助けて下さい！」  
「せんせい、どうぞお願い致します。もう階段は落ちてしまつて、どうする事も出来ません。何とかして下さい！ 何とか……」  
せんせいは其時、静かに答へました。

「階段が落ちてしまつたのなら仕方がない。我々は『袋』へ行くより他に途はない。」  
「せんせい、貴方は『袋』へ行く道を知つていらつしやるんですか？」  
「私は二三遍前に行つた事があるから、よく知つてゐる。」  
「ぢやア、せんせい。案内して下さい。早く案内して下さい。」坑夫達は氣狂ひのやうに叫びたてました。  
「では案内して上げるから、そのランプを貸しなさい。」  
せんせいのかう云ふのを聞いた四人の坑夫は、一齊に、  
「さア、せんせい。」と云つて、めい／＼自分のランプを差出しました。

その「せんせい」と云ふ言葉には、少しの嘲笑的の意味も含まれて居りませんでした。ふだんせんせいが、何か一言物知り顔に云つたりすると、フツン、と鼻で笑つて、相手にもしなかつた坑夫達が、この時ばかりは、まるで猫のやうに従順に、せんせいの言葉に従つたのでした。  
「袋」と云ふのは、石炭層が盛り上つて、小山のやうな形をした所です。高さは三十尺の餘もありますから、此處までは水も上つて来ないだらうと思はれたのでした。八人の者はその「袋」へ着くと、昇りにくい斜面を、幾度か轉げ落ちながら、蟻のやうに匍ひ上つて行きました。(つゞく)

み、どんな高い崖でも平気で攀ち上つたり飛び下りたり、どんな静かな林の中でも足音一つ立てずに獲物に近づいて生捕つたり、又とても登れさうにない小さな木の枝を傳つて、危い木渡りをしたりするところが非常に巧くなりました。



七〇  
餘り賢過ぎるので、父の兵右衛門は心密かにこの子供の將來を心配してゐました。若し一つ間違つて自分の才分に慢心する様なことがあつたら大變な人間になつて了ふに違ないと思つたからです。  
或日のこと、庄七少年は城の門を出て山の麓の村へ遠乗りに出かけました。初夏晩春の空は涯しなく晴れ渡つて、青い風が爽やかに野面を渡る中を、少年は或ひは早く或は緩に、自由自在に馬を乗りまはし乍ら、とある森蔭迄來ますと、向ふから一人の老人が幼い娘の子の手を曳き乍ら、とほくと力なく歩いて來るのに出會ひました。丁度それ違はうとする時、何に驚いたか馬がいきなり前足を上げて高く嘶きましたので、びつくりした娘の子は、わつと泣き出して老人の手にしがみつきました。  
「子供を驚かせて濟まなかつたね。」  
馬を鎮めた庄七少年は氣の毒さうに言ひました。  
「いいえ何でもありません。さあお前、泣くんでは



ない。そんなに泣くとお祖父さん迄悲しくなるではないか。」  
老人はさう言つて子供を抱きしめてゐます。其様子が餘りいぢらしいので、少年は馬を下りて優しく慰めてやりました。そして、

七二  
「お前達は一體何うして今頃こんな所をさまよつて居るのだ。」  
と尋ねると、老人は涙を落し乍ら、  
「私達は、今日悪いお土に家も島も取り上げられて、あてどもない旅に出てゆく所です。」  
と、答へました。  
「それは又氣の毒なことだ。もう少し委しく譯を話して御覽。次第によつては力になつて上げやう。」  
少年は愈々哀れに思つてきゝました。  
「譯と申しますのは、つい此間、この娘の兩親幼病で後先に亡くなりましたので、大變困つて、佐藤三平様といふお土から五兩の御金を借りたのでございませう。そして昨日、やつとのことで五兩御返ししますと、今日佐藤様が突然御見えになつて、あと十兩返せと仰つしやいます。借りた金は五兩でございませうと申開きましても、何うしても御開入れにならな

いで貸したのは十五兩だ、あと十兩拂へなければ家

屋敷を取るから出てゆけ、若しそれを拒むなら切り捨てると言はれますので、泣く泣く孫の手をひいて出て来たのでございます。」

かう老人は語り終へて、又潜々と泣きました。

『よし、弱い百姓をいぢめて金儲けをするとは不都合な奴だ。私が金は取り返してやるから心配しないでいい。今夜月の出る頃、お城の裏門に待つて居



なさい。」

少年は、きつとなつて言ひました。そして馬にひらりと跨つて其儘一目散に城に歸つてゆきました。

二

さて其の日の夕方のことです。

佐藤三平といふ意地の汚い悪土は、城中の人氣ない室にこつそり這入つて、懐から澤山の山吹色の大判小判を取り出し、畳の上に並べて一人はくほく喜んでおました。この男は百姓や町人をいぢめて金を取つては、かうして誰にも見せないで、自分ひとり無暗に嬉しがるといふ妙なくせがあるのです。

『もうこんなに澤山たまつた。』

醜い顔を歪めて、ニヤ／＼と笑ひ乍ら三平が斯う呟いた時、彼の直ぐ後で怪しい物音がしました。――鼠か知らん――さう思ひ乍ら何気なく振り返つて見た時、彼の顔は眞蒼になつて、身體はふる／＼震

て、も一度引返して正體を憶めるなどといふ勇氣のあらう筈はなく、

『誰か来て呉れ、大變だ――大變だ――』といふなり、其處にへたばつて了ひしました。

たゞならぬ叫び聲に、外の士達が駈けつけて来た時には、腰をぬかしてわなわなと慄へてゐる三平の外には誰も居ないばかりか、怪しいものの影も形もありません。

『どうしたのだ佐藤、しつかりしろ。』

皆から言はれてやつと三平は顔を上げ、

『鐘のお化だ。あの鐘が――』と、口もろく／＼きけません。併し其時は、鐘はちやんと前の通りに床の間に置かれて、怪しい氣配は少しもありませんでした。

『馬鹿だなあ、君は。生命もない鐘が化けるものか。』皆はどつと笑ひました。笑はれて泣きさうな顔をしながら更に室の中を見廻すと、生命よりも大切なお金

えて来ました。

それも其筈、誰一人居ない此室の床の間に飾つてある黒糸絨の鏡が、ひとりでに起ち上つて、ふらふらと彼の方に歩いて来るのです。薄暗い夕闇の室に兜の龍頭が燦爛たる光りを放つて物凄いと一通りではありません。

『キヤッ!』と叫ぶと、三平は室の外に飛び出しましたが、もとより金を溜めて喜ぶ様な男のことと



が一つも残らずなくなつてゐます。三平はいよ／＼泣面に蜂です。

その夜、月の出る頃城の裏門では晝間の老人が誰に貰つたか、大きな金袋を下げて、いそいそと歸つてゆく姿が見えました。ところがその鎧の化物が庄七少年で、憐れな百姓を救つたといふ事が何時か城中城外に知れ渡つて、人々は少年の情深さと其機智とを賞め讃えました。

唯一人苦い顔をしたのは父の兵右衛門です。

或日、兵右衛門は庄七少年を膝近く呼び寄せて、

「お前は先日、佐藤三平の金を奪つて百姓にやつたことがありはしなかつたか。」

と、聞きました。何時になく恐い眼をしてゐる父を見上げて少年は、

「はい、あります。」

と、悪びれず答へました。

「お前はそれをいいことと思ふか。」

さしも名高い戦上手の香月左衛門も、餘り突然のことでは何うともすることが出来ません。城に立て籠つて一生懸命防ぎ戦ひましたが、今は兵糧もつき矢玉もなくなり、城兵の多くは戦死してしまいました。

もうこれ迄と左衛門は家老の兵右衛門を呼んで、  
「残念乍ら猿啼城の運命もこれまでぢや。背切腹して深く死なうではないか。」

と、申しました。兵右衛門もほろ／＼と涙を落し、  
「かうなつては致方もございませぬ。仰せの通り、せめて男々しい最期を遂げて、武士の鑑となりませう。」

と答へて、いよ／＼自害の用意に取りかかつた時「暫く御待ち下されませ。」

と、障子の蔭から聲を掛けた者があります。見ると何處を何うして來たのか、庄七少年がびつたりと平伏してゐます。

「庄七ではないか。何をしに來た。」

「悪い士をこらしめて、哀れな百姓を助ける爲にしたことです。悪い事とは思ひませぬ。」

「黙れ！」父は少年の答を聞くと俄かに聲を荒らげて云ひました。「例へ人を助ける爲とは云へ、武士の子たるものが人の物を盗んでいいといふ事があるか。お前には自分の武藝に慢心して、どんな事でも勝手にやらうとする恐ろしい心がある。殊に盗むといふことは人間の一番悪い行ひだ。お前の様な者を家に置くことはならぬ。只今限り出て行け。」

餘りの父の烈しい怒りに少年は驚きました。そして種々に詫びましたけれども、どうしても聞き入れて呉れません。仕方がないので少年は悄悄と城を逐はれて、唯一人何處かへ旅立つてゆきました。

三

其後、隣國の高鳥若狹守といふ大名が、不意に攻め込んで猿啼城を取り圍んで了ひました。

兵右衛門が叱る様に言ひますと、少年は、

「先づこれを御覽下されませ」といひつゝ、一管の笛を取り出しました。

「これは何ぢや。」  
殿様は怪しんで問ひました。

「これは敵將高鳥若狹守が肌身離さず持つて居る笛でございます。昨夜忍び込んで取つて參りました。」

「うむ、出かした。」殿様は膝を打ちました。そして三人は何かこそ／＼と相談を始めましたが、間もなく猿啼城から白い旗を立てた使者が敵陣に向ひました。

敵方では多分降参の申込であらうと思つてゐますと、意外にも使者は、

「實は、この笛が猿啼城に舞ひ込んで來ましたので、御届けに參りました。」

と、云つて笛を渡すと、さつさと歸つて了ひました。これこそ昨夜何者かに盗まれて大騒ぎをした高

鳥若狹守の大切な持物です。不思議なことだと、高鳥方では薄気味悪く思つてゐると、又しても其夜枕許に置いてあつた若狹守の刀がなくなりました。翌朝になつて気がつくとき、さあ大變です。「誰が盗み取つたのだ。」と上を下への騒ぎをしてゐると、再び猿啼城から使者が来て、



七六  
『この刀が舞ひ込みましたから御返し致します。』と云つて、なくなつた刀を届けました。高鳥方はすつかり狐につままれた様な變な恐れに襲はれて來ました。わけても大將の若狹守は氣味が悪くて仕方がありません。其夜は自分の寢室を厳しく土達に護らせて寢ました。翌朝眼が覺めると、不思議不思議、今度は自分がして寢た枕が何時の間にか見知らぬ白い枕とすり變へてあります。そしてその枕には「首を御用心」と書いてあるのです。成程枕を取る程の賊ならば寢首を取る位のことには朝飯前のことです。皆はぼんやりとなつて顔見合せました。

其時三度目の使者が猿啼城からやつて来て、『此枕は高鳥侯の枕と思ひますが、昨夜私の方にまされ込んでゐましたから御返し致します。』と云つて、昨夜の枕を置いて歸つてゆきました。もう堪りません。若狹守は眞青になつて慄へ上りました。

は、言はずもがな、庄七少年でありました。

いよ／＼和睦が整つて、猿啼城では祝ひの酒宴が開かれました。

殿様は、

『今度のことは全く庄七一人の手柄だ。何でも望むものをやらう。』

と言ひますと、少年は、

『私は父上様から決して盗みをしてはいけないと厳しく言ひつけられたのに、又今度も盗みを致しました。父上様がこの罪を御赦して下さる様に何卒殿様から御取なし下さいませ。』

と、申しました。

其時前に進み出た兵右衛門は、しつかと少年の手を握つて、

『お、それでこそ本當の私の子ぢや。』といつて、思はずハラ／＼と涙をこぼしました。

した。てつきり猿啼城には恐ろしい魔法使が何か居るに違ないと思つたのです。そして今夜はきつと首を取られるに違ないと慄へ上つて、俄かに和睦を申込みました。

さしも危かつた猿啼城の運命も、これでやつと平和に返つたのです。この魔神の様な働きをしたの





幼年詩

編輯部選

なつ(賞)

山形縣橋  
澤核尋二 吉田たけの

なつがくるとよい  
ちやんちやんこを着てあそぶ  
みんなが  
手をつないであそぶ

先生(賞)

千葉縣馬  
橋核尋五 遠藤 清治

先生が墨をすつてゐる

あたまのけが

うごいてる  
うめの花も  
うごいてる

小鳥

朝鮮京城日  
田核尋三 河野 浩

小鳥が  
水あびしてゐる  
かごから水が  
光つてちる

梅(賞)

東京市東  
盛核尋五 醒醐 正明

花さしに  
梅の木を  
さしました

入學試験(推薦)

門田洋一

寺内萬治郎畫



春が来ました。重い暗い空に閉ざされてゐた寒い冬も過ぎてしまつたの  
です。空も碧く、木も緑です。今までは朝起きると必ず白い霜を見ま  
したが、今では見ません。春、暖い春が廻つて来たのです。  
しかし、新吉にとつて、たゞ一つ心配があつたのです。それは目前に  
迫つた入學試験なのです。入學試験、入學試験、それは實に苦しい恐  
い關所なのです。

外は春です。何にも知らない幼い子供等はキイ、ノ、と遊び戯れて  
ゐます。でも、新吉は勉強しなければなりません。試験です。こわい試  
験が目の前に横はつてゐるのです。

時折、雀がチユ、ノ、と可愛らしい聲を出して飛んで來ます。チ  
ユ、チユ、チユ、雀は盛に啼きながら、ビヨイ、ノ、ノ、と可愛  
い關所なのです。

脚で其處い等を飛び歩きます。  
あ、春だ、新吉は吐きました。そして空を見上げました。  
碧い空には綿のような雲が浮いて居ました。そして、それが少しづつ、  
少しづつ、東の方に飛んで行きました。突然、つふでの様な早さで雀が  
ビユツと中空を横ぎつて行きました。

「あ、雀だ。元氣がいゝなア——」

新吉は雀の行衛を見送りながら、小さな聲で叫びました。  
太陽が笑つてゐます。春の太陽が笑ひながら、雀の行衛を見下してゐ  
ます。下界のすべての物は皆太陽の光を受けて、暖かさうにしてゐます。  
家の瓦が太陽の光を反射して、キラキラして綺麗です。赤い瓦も光つて  
ゐます。工場の煙突から、ゆら／＼と煙りが上つてゐます。林が青く見  
えます。縁に光つてゐます。

新吉は我を忘れて、窓の外の春の光景を見廻しました。暖い光景で  
す。然し——、新吉は勉強しなくてはなりません。

今、地理をやつて居ます。地理のオーストラリヤをやつてゐるのです。  
やがて新吉は聲を上げて讀み出しました。  
「……エート、羊毛の産額に於て世界第一に位し、又石炭、金を産出す  
る事少からず。——やつぱし、そうかなア。——西南部の沙漠地方は近來

家の中が  
さつぱりします

みかん(賞)

熊本縣高  
森校尋一 山村 一郎

まるくて赤くて  
おいしくて  
僕のすきな  
みかんを  
一つほしい

雨

秋田縣外  
旭川尋六 佐藤 善一

雨が降つたら  
せきの水が  
走つてる

妹

千葉縣平  
岡校高二 森 くらむ

せと畑に居る妹と祖母  
よび合ふ妹の聲が  
だんく  
甘へ聲になつて行く

がちよう

長野縣豊  
科校尋四 西田 二郎

ざんく雨が降つて来た  
があくがちようが鳴き出した  
雨はざんくと降つてます  
おうちへがちようは急ぎます

細い道(賞)

千葉縣平  
岡校高二 鶴岡 きく

下駄の跡が

金の産出最も多し、——ふん、うまくやつてらあ。それから何んだつて……エー、東南部は此の大陸中最もよく開けて人口多く、海陸の交通も便利にして、シドニー・メルボルン等の大港市發達す。——ウ、こりや覚えなくちや不可ない。——是等の諸港は海外の諸港と航路相通じ羊毛・石炭・小麦・金等を輸出する事多し。——ウア、こりやたまらな。エー、主な輸出は何と何にだつて……エー、羊毛・石炭……ハテ、その次は何んだらう。あ、そうそう、小麦と金だ。……」  
右手の方に濠州——太平洋の地圖が大きく置かれてあります。  
やがて、新吉はバラ／＼と後ろの頁をあけて見て、  
「ああ、もう少しだ。」と、云ひました。  
と、其の時、前の途をタ、ツと走り去つた子供がありました。そして後ろを向くと、  
「ヤーイ、馬鹿の泣き虫、ヤーイ。」  
と、囁し立てました。それと同時に、「ウワア、／＼。」と云ふ泣聲が聞えて來ました。その子はドン／＼追ひかけて行きました。前の子は悪口をあびせながら、ドン／＼逃げて行つてしまひました。——直ぐ、二人の聲は四ツ角で消えてしまひました。  
新吉はまたうつむいて勉強を始めました。

午後三時過ぎになりました。新吉の兄の良夫が歸つて來ました。

「おい、願書はどうしたい。もう先生に出しちまつたかい？」

兄の良夫は這入つて來るなり問ひました。

「うん、今日先生に出したよ。それでね、明日呉れるツて云つてたよ。」

「そうかい。そりやよかつたね。願書なんか早く出した方がサツパリして氣持がいゝからね。」

さう云つて良夫は靴をドサツと机



の上に置きました。

残つてる  
細い煙が消えず残つてる  
草にからまつて残つてる

櫻

東京市伊  
勢町  
沖津 清琉

櫻の花  
だいすきだ  
さくらんぼも  
だいすきだ

つるべみご

千葉縣平  
岡校高一  
伊藤 源司

わたしの家の前の  
つるべみご  
風がくると  
さーこかたん

もものつぼみ (推薦)

熊本縣荒尾  
北校 尋四  
海達 公子

もものつぼみ  
つまんだら  
ふわつとした

さくら (推薦)

熊本縣荒尾  
北校 尋四  
海達 公子

雨がやんで  
風が吹いてゐる  
屋根に  
さくらの花びらが  
ひつついてゐる

「今、地理やつてるのかい？」  
「ウン。」

「まあ、いつか、おやりよ。」良夫は笑つて新吉の顔を見ました。  
しばらくして良夫は、

「もう春だね。外はトラモ暖いから。ホラ、今日なんか急いで来たも  
んだから、こんなに汗をかいたりやつたよ。でも、お前なんか可哀そうな  
もんだね。不景氣な顔をして勉強してなくつちやいけないんだから。ハ  
ハ、ハ。」と兄の良夫は快活に笑ひました。

「うん。」と、新吉は不景氣な顔で答へました。

小一時間もした頃新吉は鉛筆を手から放しました。そうして頸に手を  
やるとチツと空を見つめました。空の雲は全くそのかげをひそめてしま  
ひました。

新吉は入學出来た後の事を考へて見ました。そして、それが如何に喜  
こばしいかを想像して見ました。天地がひつくり返る程嬉いだらうと思  
ひました。金ボタンの制服を着た時を想像して見ました。新しい制服を  
着て途を歩いてゐる事も想像して見ました。然し、その嬉しい時を持つ爲  
には、入學試験と云ふ難所をパスせねばならないのです。それが爲には、  
あゝ、やつぱり勉強しなくちゃならないのです。

さーこかたん

新吉は再び冷たい鉛筆をにぎりました。そして勉強を始めました。  
それも冊分ばかりすると兄の聲で破られてしまひました。  
「新吉、お前の組で、H中學に試験を受ける者何人位ゐる？」  
「三十人位ゐるよ。」  
「そうかい、  
随分多いね。」  
話はそれで  
と切れてしま  
ひました。

新吉は再び  
教科書に目を  
やりました。

その内に試  
験は刻々と近  
着いて、遂に明日と云ふ日になりました。  
此の日新吉は何にもせず、一日ブラリ〜と春の日を浴びてゐました。  
多分頭休めの爲でもありませう。



シヨウギ

モモヅノダイ 二小ガク一年 ナガフセイニ

シヨウギハオモシロイ

オホサマケイマト

キンギンデ

中中シヨウブガ

ツキマセン

やなぎ

福岡縣矢 下永シヅ子

やなぎの木

あをいよ

ゆれながら

あをいよ

お月様

福岡縣相 黒屋ミツイ

お月さん

天へ上ると小さくなるよ  
上らないで居ておくれ

坊や

福岡縣三 鶴崎 公雄

ヨツチロ

ヨツチロチヨ

小さな坊やが

歩いてる

午後

豊橋市八 大島 健吉

くすの木の葉の  
光る午後  
上からみのむしが  
ぶらさがつてゐる

愈々當日となりました。新吉は少しは、やめに兄と一緒に家を出ました。

「今日どんな氣持がする？」

「あのね、何んだか恐い様で、うれしい様で、ちよつと見當がつかないよ。」

「そうだらう。僕もそうだったよ。」

良夫は今更の様に、二年前に受けたH中學の入学試験を思ひ出しまし

た。「構はないから、いつかおやりよ。答案は何回もく讀み返さなくつ

ちやいけないよ。いゝかい。」

「あゝ。」新吉は小さな聲で云つて、うなづきました。

中學校に到着しました。定刻になると皆ゾロゾロ校庭に集りました。

やかて静かに試験場の中に吸ひ込まれて行きました。

後には幾多の思ひを胸に秘めてゐる附添人が残されました。良夫もそ

の中の一人でした。矢張り様々の事を考へてゐました。

試験は、算術、讀方、理科、歴史の四課目でした。

その試験も午後二時に終りに告げると、はれやかな顔をした新吉とそ

の兄の姿を校庭に見つける事が出来ました。

新吉は、算術と理科は全部出来、讀方はカナふりを一つ間違へただけ、

歴史は年號をたつた一ツ落したと云ふ、良成績でした。

その日から二日目にいよゝ合格者発表がありました。新吉はそれに

は勿論合格しました。其の日直ぐと體格検査、及び口答試験がありまし

た。

その日から又二日目に二度目の発表が揭示されました。うれしや、新

吉はそれに合格したのです。

それを一目見た時の新吉のよろこびと云つたらありませんでした。餘

りのうれしさに夢かと思ひました。然し夢ではありませんでした。新吉

は飛ぶ様に家へ歸つて来ました。

春だ、春だ、新吉の心はおどりました。

春の空の中に思ひ切り飛び廻りました。入学、入学、長年の報が達せ

られたのです。

おどれ！ おどれ！

新吉の心は、何者にも打ち勝つ勢で、おどり狂ひました。

(をばり)

(作者住所 東京府下中目黒九九〇)

(爲朝物語)

# 妖婆の祈り

三島霜川  
寺内萬治郎畫



## 鶴の仙人

紀平治は、鳥へ上がると直ぐに、舜天丸を背からおろして介抱しました。舜天丸は、息こそ、かすかに通ッてゐましたが、我に疲れて、只、眼をパチ／＼やツツてゐるだけでした。

『もう、大丈夫でござります。しっかりなされませ。』  
紀平治は、一生懸命に、さう云ッて元氣をつけようとしました。しかし、駄目でした。舜天丸は、手足をタラリとさせて、だん／＼、可けなくなるばかりでした。  
『もし、若君が此のまゝ、可けなくなつたら、おれは腕を切ッて死な、ければならぬ。』  
紀平治は、泣出しさうになつて、心配なしました。  
この島の土人たちは、大抵、微でした。そして、皆、怖ろしさうな顔つきをして

ゐましたが、皆、やさしく、親切でした。それで、紀平治の様子を氣の毒がツツて、皆で、いろ／＼、舜天丸に手當をして見ましたが、どうも駄目でした。  
すると、一人の老人が、ヤツて来て、  
『それは、鶴の仙人様のところへ連れて行ッて、起死回生の果をお授りなさい。あれは、不思議な靈藥がある。』  
と、珠球の言葉で教へてくれました。

『さうだ。それが可い。』  
と、皆が、口を揃へて云ひました。  
紀平治には、さうと、その言葉の意味が解りました。で、大そう悦んで、すぐに出かけようとしますと、島の土人が七八人も先きに立ッて、案内してくれました。  
島には、どこへ行ッても、大きな藤織とアダンベと、それから芭蕉とが、籃で染上げたやうになつて、茂ッてゐました。その深緑の下をくゞり、岩と岩との間をぬけて、紀平治は、案内の者とい

續に、ひた走りに走りました。まツたく夢中で走りました。それで、岩だらけの坂路が、だん／＼、險くなつて行くことに、氣がつかない位でした。

『さあ、登りました。凡そ半里ほどの登りました。すると、そこに、榕樹の大木が、まるで傘のやうになつて、枝をひろげてゐるのが見えました。そして、その下に、天然に唐獅子のやうな、恰好なした殿にもたれて、すてきに長い袖の黄な帷子のやうなものを被たお爺さんが、眞ッ白な長い羊髯をしきながら、こつちを見えてゐました。頭には、紅い、頭巾のやうなものをかぶつてゐました。  
島の土人たちは、ゴツと、こつちの方で、跪いて、ハツと平伏しました。そこらには「風が薫る」とてもいふやうな、爽やかな音が、ア／＼してゐました。  
『へ、ハア、と／＼、ヤツて来たな。多分、来るだらうと思つてゐた。』  
お爺さんは、やはり、珠球、言葉で、

にこゝしなから、さう云ひました。その御が、まるで、童のやうでした。紀平治も、うや／＼しく跪いて、舜天丸の息が、もう絶えてゐることを話しました。それが、少しは知つてゐる琉球の言葉もまぜましたが、何しろ慌てきつてゐましたから、殆ど、日本の言葉で、しかも、餘程、とんちんかんに、しやべりました。

お爺さんは、眼を細くして、うなづいてゐました。知つてゐる。わしは、鎮西の八郎や、お前たちが難船したことは、日夜から知つてゐるのだ。ム……心配することはない。舜天丸の命は、まだ盡きてゐない。だが、あの、白縫は、可哀さうなことをしたな。」

「奥方様、何うなされたのでござります。」  
紀平治は、びつくりして、眼をきよときよとさせながら、たづねました。「あれは、死んだよ。お前たちの命を助

けようとして、海へ飛び込むで、八大龍王に命をさへけて了つたよ。さうだ、お前たちを乗せて来た、あの鰐鯨な、あれは、ひよつとすると、白縫の亡魂が乗りうつてゐたのだらうよ。」

お爺さんは、唇に、何も彼ん、知りぬいてゐるやうに、さう云ひました。  
紀平治も「なるほど、さうかも知れない」と、思ひました。そして、「すると、殿だけは御無事でございませうか。」

「八郎かな。されば……」と、お爺さんは、ちよつと考へてゐましたが、「それは云ふまい。死んだものか、それとも、生きてゐるか、追つつけ、お前が、自分に解ることがあるだらう。それよりは、舜天丸をこつちへ……」

さう云つて、お爺さんは、紀平治の手から、舜天丸を抱取りました。「ム、冷たくなつてゐるな。よし／＼」と、云ひながら、殿の凹から、小さな竈を取り出しました。そして、その竈の丹

い煉薬のやうなものを指先につけて、舜天丸の口に叩ませると、唇に、胸から腹を撫でてゐました。

しばらくすると、舜天丸は「ム、ム」と軽く呻いて、ボカリと、眼をあけました。そして、ちよつと、呆れでもしたやうに、きよ／＼、そこらを見廻しました。

「若君」と、紀平治は、躍上がつて、舜天丸に飛びつきました。そして、直ぐに自分の手に抱取つて、幾度となく、お爺さんを拜むて悦びました。

「お前たちは、當分、わしの許におゐるが可い。そして、舜天丸は、武術を勤め、學問をするのだ。すると、この子には、きつと、すばらしい運が回つて来る。」

お爺さんは、やはり、にこ／＼しながら、さう云ひました。さうして二人は、當分、そこにゐて、武術や兵法學問、いろいろ／＼なことを、このお爺さんに教

へて貰つて、まるで仙人のやうな生活をして居りました。  
どういふ譯ですか、島の土人たちは、このお爺さんのことを「鶴の仙人」と、云つて居りました。

きうく山古墳

十五年前、爲朝が、「金札の鶴」を琉球に探しに行つた時に、國王が、曠雲國師といふ悪い道士を尊敬して、琉球の國が、大そう亂れてゐたことは、前にお話しました。それから、爲朝が、その曠雲を退治しようと、舊虬山に出かけて行つて、失敗したことも——これは、皆様のうちにも、多分「きうく山」といふ名と一緒に、覚えておいでの方がお有りです。その曠雲は、それから以後、十五

年の間、どこへ行つて了つたものか、琉球の國うち、その姿を見せませんでした。それで、琉球の人たちは、何んでも盗むで行かれる災」を忘れてゐました。

さて、その「きうく山」には古い大きな墳が一ツありました。「虬塚」と云つて、遠い昔、琉球

王の御先祖が、國を叛ける時に、國に害をする「虬」を退治して、その骨を、そこに、うづめたのでした。それで、その頃の琉球ではその墳が、大そう神聖なものとしてありました。

ついでに云つて置きますが、爲朝が、この「きうく山」で、蟒の頭を斬つて獲た珠——寧王女が、その珠を失くしたと云つて、

王城から追出された珠も、元はといふと、琉球王の御先祖が「虬」を退治した時に、その臈から獲た二ツの珠のうちの一ツでした。

寧王女は、爲朝と「金札の鶴」と珠とを取りかへこをする、す

ぐに王城に歸りました。そして、王の位には即かないで、今も昔のまゝで暮して居りました。尤もそれは、中婦君といふ王のお后が、何に彼と苦情を云つては、寧王女を王の位に即けることを反對したからでもありました。廉夫人は、

三四年前に死んで了ひました。迷信の深い國王は、曠雲の行方が解らなくなると、今度は、「阿公」といふ怪しいお婆アさんを信

はじめました。「阿公」は、虬塚に祈つては、天から「福」を下して地から「禍」を禳うといふ、云つて見ると、巫女のやうな氣味の悪いお婆アさんでした。

すると、その頃、琉球では、三年ほど、悪い病が流行つたり、田や畑の作物といふ作物が稔らなかつたりして、とかくに凶年が打ちつゞきました。

「これは、一體、何んの祟であらう。」

と、王は、大そう心配をして居りますと、ある時、「阿公」が、こつそり、王のところへ、やつて来て、さう云ひました。

「私が此の頃、虬塚の神のお告を聞ききましたところ、お國に、かう

まで災の打續くのは、天が、大王様に憤ることがあつて、國ちゆうを砂原に荒して、食物を無くして了ひ、さうして、この國の人たちを、残らず滅して了はうとするのださうでござります。」

「それは、大變だ。わしに、どういふ罪があるのだ。」

王は、驚いて、眞ッ青になりました。

「いえ、大王様には、格別、罪はお有りではございませぬが……多分、あの寧王女様にお位をお譲りにならうといふお考が、可けないのではないかと存じます。」

「さうか。王女に、位を譲るのが可けないのか。ム……」と、王はちよつと考へてゐて、「さういふ事

であるなら、王女を位に即させることを止めましょう。」

王は、うっかり、「阿公」の言葉に乗つて了ひました。

「多くの人の命にかゝはることでござります。それが、宜しうござります。なれども、只今となりましては、只、それだけでは、この災は止みませぬ。虬塚の神のお告では、災を禳ひまするには、辰の年、辰の月、辰の日に生まれた娘を犠にして、海に沈め、水の神様をお祭りにならないと可けないさうでござります。」

「阿公」の方では、いよく圖に乗つて、さう云ひました。

「さうか。その、辰の年月の揃つた娘を犠にして、水の神を祭る

と、この災が無くなるのか。それは、何んでもないことだ。すぐに、その娘を探させると可い。」

王は、まったく、何んでもない事のやうに思つて、さう云ひました。そして、すぐに、利勇といふ家來を呼んで、辰の年月の揃つた娘を探出すやうに命じました。

利勇は、智慧もあり、武勇もなか／＼優れてゐて、丁ど大將といふやうな役をして居りました。そして、王から重く用ゐられてゐた家來の一人でした。しかし、どうも、部下などには、あんまり好く云はれてゐませんでした。

### 忠臣、毛國鼎

それから三日経つて、利勇は、

辰の年月の揃つた娘が見つかつたと云つて、王の前に出て來ました。王の傍には、「阿公」も、高い鼻を突出すやうにして、頑張つてゐました。

「それは手柄であつた。疾くその娘を連れて來い。」

と、王は、大悦で、さう云ひました。

間もなく一挺の轎——乗物が、階の下に扛きこまれました。利勇は、階を下りて、轎の簾をかきあげました。その中には、寧王女が、もう白の芭蕉布の衣を着て、髪もさばいて、ちやんと、轎になる支度で坐つて居りました。

「轎になる女といふのは王女か。」

王は、あつと驚いて、後の言葉

が出ませんでした。

「王女様は、たしかに、辰の年月が揃つておいで、ござります。」

利勇は、理で押さうとするやうに、キツパリと云ひました。

「しかし……王女は可かん。王女は、わしの子であるぞ。」

「ではござりまするが、王女様は、國の爲、萬民のためならばと有仰つて、もう、お覺悟をなされてお出でござります。」

と、利勇は、どこまでも、理屈で押しました。

「國の災を禳ふためならば、王女様のお覺悟は、當前のことでございましょう。」

と、「阿公」も、王の心弱いのを笑ふやうに云ひました。

そこへ、お后の中婦君が、空涙を流しながら、出て来ました。そして、「王女は、わたしに取っては、義理のある子でございます。わたしがゐて、穢なぞにしては、わたしが繼母だからと云はれなければなりません。」

と、さう云つて、寧王女を穢にしないやうに、王に頼みました。けれども、利勇と阿公とは、「それは、私ごとである。王女様の穢になられるのは、天のお指圖である。」と、口を揃へて、それを押へつけました。寧王女も、もう「穢になる覺悟」をして居りました。



た。さうして、やがて、「穢を上げる」壇のところにへ、つれて行かれました。

「穢を上げる」壇は、王城から半里ほど離れたところにあります。波上宮と云つて、高さ、十丈あまりもある城の石垣のやうになつた断崖でした。壇は、その断崖の最ッ端に築いてありました。寧王女は、その壇の上に押上げられました。

「阿公」は、十五六人の弟子の巫女を引きつけてその傍で、一心不乱に呪文を唱へておりました。それは、海の神が、寧王女を穢に



受けてくれるか何うか、その伺を立たる爲の呪文でした。「もし、海の神が穢をお受けになつたと致しますと、その験が、波の上に現はれるのでござります。

しますと、私は、王女様を突落し「阿公」は、ハッキリと、王に、さう断つて置きました。さうして、中婦君や大勢の家来も、それ

を聞いてゐました。

やがて、王も、大勢の家來を従へて、その「壇」のところへ臨まれました。王を始め、大勢の者は今にも、波の上に、海の神の験が現はれるかと、息を引きつめて、海を見つめてゐました。

寧王女の命は、まづたく、風前の燈火よりも危ない有様でした。その眼下には、大洋から押寄せて来る浪が、どつと碎けて、まるで瀧壺のやうに泡立ッてゐました。それを見ては、寧王女の心も慄へました。

「まだ験が見えぬか。」

王は、燥ッて、たづねました。

波の上には、まだ、何も現はれませんでしたが、「阿公」は、王の方を向つて、

「王女様、この妖怪婆の云ふことをお信じになつてはなりません。此奴には、企みがあつて、あなたの命を取らうとするのでございます。験があつたなどとは、大嘘でございます。私は、たじかに見て居りました。」

毛國鼎は、ぐい／＼「阿公」を押へつけながら、さう云つて叫びました。

そこへ、利勇が飛出して来て、「おい、毛國鼎、出過ぎるのも好い加減にしないか。阿公は、虬塚の神のお示で、王女様を穢になさ

へは振向きもしないで、やはり、一心不乱に、呪文を唱へつゞけてゐました。

と、そこへ、琉球馬に、ビシリと、鞭をくらはせて、恰も飛ぶが如に乗りつけて来た一人の武人がありました。馬の腹は波を打ッて、口から、ボタリ／＼と、白い泡がたれてゐました。

武人は、毛國鼎と云つて、いつも「阿公」や利勇に反對してゐる人でした。そして、中婦君にも嫌はれてゐました。

毛國鼎は、ヒラリと、馬を飛下りると、王に向つて、ハツと一禮して、其のまゝツカ／＼と、壇の方へ進みました。

王を始め、大勢の家來は、何事

ののだぞ。萬民の爲だぞ。」と、罵ッて、毛國鼎を押しつけるやうとしました。

毛國鼎は、ビクともしませんでした。お前までが妖怪になるぞ。他の事はともあれ、この妖怪婆は、今、海の神の験が見えたと云つたが、誰か、その験を見た者があるか。」

利勇は、ぐつと、つまつて了ひました。「阿公」の顔は、見る／＼眞ッ青になりました。

「おい、阿公。験を見たのは、お前ばかりだぞ。そんなら、海の神が、穢を受けられるか、どうか、まづ、自分で海へ入ッて、海の神を迎へるが可い。」

毛國鼎は、さう云つて、「阿公」

かと驚いて、目を丸くしました。

「阿公」は、毛國鼎のやつて来たのに気がつくと、三角眼をギョロリと光らせて、毛國鼎を睨みつけました。その口が、耳元まで裂けて、まるで妖怪のやうでした。と、思ふと、だしぬけに「験が見えましたぞ。」と、叫んで、恐ろしい勢で、寧王女の肩さきを手をかけ、無茶苦茶に、崖から突落さうと、燥めました。

「この妖怪婆め。」

毛國鼎は、噛みつくやうに呷鳴ッて、バツと、壇の上に飛上ると、いきなり「阿公」の首筋を引ッ掴むで、後ろへ引きすり倒しました。それで、寧王女も一緒に引きすられて、タデ／＼と後へさが

を壇から海へ突落さうとしました。「待て。阿公は、王が信じてお在になる巫女だぞ。お前の勝手にはならん。」利勇は、慌て、毛國鼎を止めました。

阿公は、ブル／＼慄へながら、手を合はせて、「どうか、命だけはお助け下さい。有體に申します。海の神の思召によつてと申したの、嘘でございます。私は、只、虬塚の神のお示で、一年ちゆうの吉凶禍福の占を立てるだけでございませぬ。」と、すつかり、本音を吹いて了ひました。

「阿公」は、化の皮が剥けて、その場から放逐されて了ひました。さうして、寧王女は、危ない命が助かりました。(つゞく)



# 大観音こどもの仇討

西川喜平

寺内セ郎画

帝國大學の方から、駒込橋行き電車に乗つて、駒込着、町で降りると、右に園子坂へ行く廣い通りがあります。それを一丁餘りも行く、左の角に光澤寺と云ふ浄土宗の寺があります。その寺の境内に、白壁の二階建の土蔵が立つてゐて、その二階の窓から金色のお顔が見えます。これが江戸名所で名高い駒込の大観音です。同じ観音でも、淺草寺においでになるのは、十八間四

面の大きなお堂に、わずか一寸八分のおなりでおさまつてゐるのに、これは又、三丈といふ素晴らしい大きなおからだでありながら、わずか三間四面の土蔵の中に（今ではお堂も廣くなつてゐますが）窮屈さうに立つておいでになるのは、お氣の毒のやうですが、淺草寺の内陣は、香の煙りに煙つて薄暗い陰氣なのに引かへ、こは又ガラリと趣がかはつて、二階の窓が丁度お顔にあつたつてゐるので、境

内の大樹の葉越しに、門前の往來が眺められる、至極陽氣に、氣晴らしになる、お住居と思はれます。

この四邊は、今はアスファルトや煉瓦を敷きつめた、立派な道路になつてゐますが、昔は江戸の場末の田舎で、道中も狭く、藪や生垣の間々に、植木屋や百姓の家があつて、それに交つて小商人の店がチラホラある淋しい所でした。それでも春秋の彼岸や、時候の好い頃は、遊び牛分の参詣人で、中々賑ふこともありました。

「喧嘩だ〜。」

「果し合ひだ〜。」

と、往來の人がバラ／＼駆け出すと、その聲を聞いて四邊の家からも人が飛び出す、観音詣りの人や、谷中、駒込の寺詣りの人達も交つて、常は淋しい大観音の門前も、時ならず混雑して、黒山のやうに人が寄りましました。

見ると、大観音の門前の小溝にかゝつた、石の小橋を境にして、白刃と白刃の切尖を合はせて、睨み合つてゐる二人の男がありました。

一人は、年の頃六十餘りとも見える白髪交りの惣髪で、洗ひざらして色も褪めた、茶木綿の紋付の單衣に、汚れて縮目もわからぬほどな、木綿の袴を着けてゐました。

對手は、三十位で、手織綿の單衣に角帯をしめた商人風の男でした。

二人共顔の色は眞蒼になつて、呼吸の忙しくなつてゐるのは、双方の肩の波を打つものにも知られま

す。遠巻きに見物をしてゐる人達は、口々に種々なことを云つてゐます。

「モシ／＼喧嘩ですか、なんです。」

「エ、喧嘩ですよ。若い方はその煎餅屋さんです

が、年寄りの方は知りません。」

「あの年寄りは、新幡隨院の門前へ此頃引越して来た占ひ者です。」

「煎餅屋と占ひ者と何んで喧嘩になつたんですね？」



「嘘とはなんだい。堅いやうでも焼きがいのので、カリ〜と食べられるのが厚焼煎餅の自慢なのだ。」  
 「いくら自慢でも谷中の薄焼にはかなはないよ。第一味がよくつて、値段も安い。」  
 「餘計な口出しをするな、堅いか、柔かいか、嘘なら食べて見ろ。」  
 「モンノ〜こゝで又喧嘩を始めては困りますよ。わしの聞いたのでは、占ひ者があの厚焼を、堅くつてまづいと悪る口を云ひふらしたんださうだ。そこで煎餅屋



「あれはね、なんでも占ひ者が、煎餅を買った代が溜つて拂はないのを、往來で催促されたので腹を立て、それで喧嘩になつたんださうです。」  
 「煎餅の代ならいくらでもないでせう。」  
 「所があの先生、煎餅が好きなので、毎日ボリ〜やつたのが、溜りたまつて、三兩二分になつたので。」  
 「へー大さう食べたもんですね。」  
 「それあ嘘だらう、あの年寄りになんで、名代の厚焼が食べられるものか。」

さんが怒つて、なんだ歯抜け爺のくせに、厚焼の味がわかるかつてんで、それが喧嘩の元ださうだ。」と、勝手次第なことを云ひ合つてゐました。

ところが、これらの噂は大間違ひで、ほんたうの事はこういふ話です。

占ひ者と云はれた年寄りには、元は中國のある大名の家來でしたが、いさゝかの事の間違ひから、同家中の朋輩を暗み討ちにしてそのまゝ出奔しました。所が討たれた者にも何か落度があつて、とう／＼双方の家がつぶされました。

それが三十年も前の事ですから、今の年寄りも血氣の若い盛りでした。

その討たれた者に、一人の男の子がおりましたが、まだ五つと云ふ幼年でして、母はその前に亡くなつてゐたので、小供は叔父の家へ引取られました。それで成長したら敵討に出やうと、少年時代から

道も遠くない駒込の大観音へ日参を始めました。

そうこうする中、七年も立ちまして、二十五の歳を迎へました。

その七年の間、一日も休まず大観音へ参詣をしてゐましたが、その中フトした事から、大観音の近所の煎餅屋と親しくなり、それが縁となつて、この煎餅屋の娘の婿になりました。

その中に男の子が生まれましたが、その子の八つの年病氣で母親は亡くなりました。

後には、年寄りの父親と、子供と自分の三人暮らしなので、大小を仕舞つて煎餅屋の主人となり、その日／＼を送りました。

今日は朝から、雨上りの空に雲もなく、初夏の日ざしは青菜を照らして、見る目も清々しく、爽かなよい心持ちの日でありました。

毎日の観音詣りに、今日も祈願をこらしてから堂を出て、境内の茶店へ寄り、馴染のお婆さんと話し

武藝を闘んでゐましたが、十八の歳に元服して、もう腕前も相應に出来たと云ふので、いよ／＼敵討の旅に出やうと、國を後に出立しました。

ところが、困つた事には父の討たれた時はまだ五つで、敵の顔もよく覺ないので、敵を尋ねやうもなく、種々考へました末、昔下郎として使つた者が、江戸の染井にゐると聞いて、それを便つて江戸の地へ入りました。

元使つてゐた者は、今は植木屋の親方になつてゐましたので、その家へ落ちつきました。

さて落ちついたものゝ、敵の顔を知つてゐる今の植木屋の親方は、もう年も七十近くなつてゐるので、この老年では敵討の供に伴れて歩くわけにもゆかず、と云つて自分一人で當もなく尋ねることも出来ず、そのまゝその家に厄介になつてゐました。

毎日ブラ／＼してゐる中にも、どうか敵に廻り逢はれるやう、年頃信仰する観音へお願ひをしやうと

をしてゐる所へ、來合はしたのは、谷中の新幡隨院の門前に住んでゐるといふ占者でした。

「婆さん、いゝ天氣になつたのう。」と聲を掛けながら、入つて來た占者の單衣の紋が思はず目に留つて、ハツと驚きました。

丸に三つ龜甲の紋、驚いたのも道理です。これは尋ねる敵の定紋でありました。

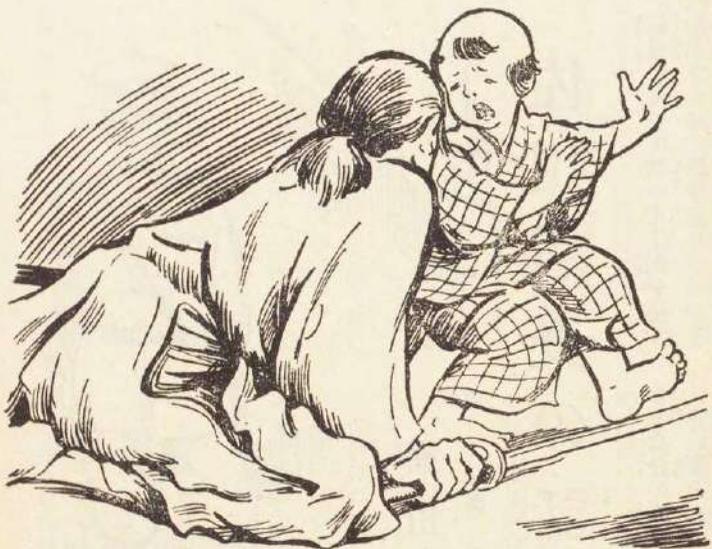
世間に類の少ない紋、年の頃も相當する。モシヤと思ふと、もう胸は早鐘を打つやうになりましたが、こゝが大事と心を静めて、それとなく浮世話しながら、だん／＼聞いて見ると、國も同じで、また國を出た年も合つてゐるので、サテはいよ／＼敵か、自分を町人と心をゆるし、うか／＼と喋つたのは、観音さまのお手引きに違ひないと、心の中で拜みしました。こうなつてはもう一時の容赦も出来ぬ、しかし念の爲、染井の親方を目さ／＼にと立ち上ると、敵も容子にそれと氣取つたか、ソワ／＼として逃げ出

しさうに見えたので、急いで家へ駆け戻り、仕舞つてあつた刀を取り出すなり、取つて返じた門前の小橋でバツタリ出逢つたので、名乗りかけ、抜き打ちに斬りつけると、敵も覺悟を決めてゐたか、バツト飛び退つて、刀を引き抜きさまたち、と合はせました。

サテこれからが、敵を討つか、討たるゝか、大事の勝負のお話です。

二人の抜き合はした切先が、チャリ、チャリ、とセリ合つてゐましたが、双方共に大事を取つて、無暗にはかかりません。近所の者は、何か仔細は知らないが、馴染がひに煎餅屋の肩を持ち、ワイ／＼云つてゐますが、なししろ白刃の中へは仲裁に飛び込む者もなく、唯噪いでゐるばかりでした。

所へ煎餅屋の親父も、子供を負つて腰に脇差をぶつ込み騙けつけて來ましたが、これも手の出しや



うもなく、ハア／＼氣を揉むばかりでした。背なかの子供はこの有様を見て「お父ちゃん／＼と泣き叫びました。

その中にチャリ／＼と、音がキザンで來ると、煎餅屋の方が、デリ、／＼と退るやうに見えたと思ふと、誰とは知らず大勢の中から小石がひとつ飛んで來ました。飛んで來た小石は、狙ひは外れて占者の足元に落ちました。

續いて後からバラ／＼と、飛んで來た小石のひとつが、うまく占者の横面に當つたので見物はドツと聲を上げました。カットなつた占者は、合はせた切先を横に拂つて、斬り込みましたのを、一と足下つた煎餅屋は受け損じて、肩口へスツツと切先が入りました。

それを見た親父は、ヒヤツと聲を上げて夢中になり、持つて來た脇差を抜くなり、目くらめつぼうに占者の背から双手づきに突きました。アツト叫んだ占者は、前へ踏み込んでもう一太刀と伸ばした

刀を、片手なぐりに後へ横に拂つたので、受けることを知らない親父は、太腿へ切り込まれてワツと倒れました。その隙につけ入つた煎餅屋は、こゝぞと眞ツ向から浴せたのが、思ふ存分に入つたトタン、占者の刀も煎餅屋の胸を突いて、相打ちに二人はドツと倒れました。今まで石ばかり投げてゐた見物は、棒や竹切れなどを持つて寄つて來ると、占者は半身を起して、刀を振つたので、大勢はワツと逃げました。親父に負はれてゐた男の子は、共に倒れて轉びましたが、泣きながら怖さも忘れて「お父ちゃん／＼と騙け寄るのを、占者は匍ひ寄つて、手を伸ばしてグツと抱きました。

アツと思はず聲を上げた大勢は、口々に「小供を助けろ／＼」と云ひながら騒ぐのを、見返つてグツと睨んだ占者は、刀の柄頭を小供の手に握らせて我とわが咽喉を刺してうつ伏しになりました。

(をばり)



横田 貴美衛

岡本 歸一 畫

## 佐川 巡查の話

巡查になつて初めて洋剣を吊つた佐川さんは、硝子窓にうつつて

ゐる自分の姿を見て、恥かしさうに赤い顔をして微笑みました。佐

川巡查は、悪いことをして牢へいれられてゐる罪人の監視をする役を拜命しました。

櫻も散つて、世は明るい若葉時でした。空は青くひろびろ晴れたり、白い雲がいくつものびのび遊んでゐました。氣持のよい微風が監獄の高い煉瓦塀を自由に飛びこえて、女囚人の洗ひ乾した柿色の獄衣をひらひらさせてゐました。しかし罪人達は暗い陰氣な牢の中にいれられて、檻の中のけだもの、やうに格子につかまつて、明るい外の方を遠くからなつかしさうに見てゐるばかりでした。

「旦那、どうも結構なお天気で、へイ。」

佐川巡查が見廻つて歩くと、中

からそんな挨拶をする囚人などがありました。佐川さんは、それ等の人々を見ると、彼等の過去に、よしどんな罪惡があらうとも、いちがいに深く憎めないやうな氣がしました。

「そんな所にゐてつまらないだらう。早く出るやうにしてやるから、おとなしくしてゐろよ。そして世の中へ出てもう二度と悪いことをするんぢやないぞ。」

佐川さんはお父さんが子供の惡戯を叱るやうに、優しく言つてきかせてやるのでした。ですから囚人等も心から佐川巡查になつて「今度の看守さんはいゝ人だ。」「佛さまのやうに優しい人だ。」と有難がつてゐました。

だん／＼夏らしく、暑苦しい日がつゞくやうになりました。囚人等は狭い、異様な臭氣のする部屋の中で、苦しささへながら、遠くで、みいんみいん啼いてゐる蟬の聲に涼しい公園の木蔭などを想像してゐました。口に出してこそ言ひませんが、彼らのさも外へ出たさうな顔つきを見ると、佐川さんは自分だけが窓に近い風通しのいゝ處へゆつくり座つてゐるのがあまり圖々しくて氣がひけるやうにさへ思へたのであります。

——その日は朝からそよとの風もなく、馬鹿に蒸し暑い油照りで、囚人はみな釜の中で蒸されて

るやうに身體中から汗の玉をにじませて、フーフーいつてゐました。しかし彼らは片肌をぬぐことも許されてゐませんでした。お晝休みの時、佐川さんは、すつ裸になつて頭からざんぶりざんぶり井戸水を浴びましたので、さつぱりと涼しい、氣持になりました。なみなみ塘へられた大盥の水面には梧桐の青い蔭が静にゆらいでゐました。

「囚人らにもこの水をつかはせてやつたらなあ……」

心からしみじみかう思つた佐川さんは、

「お前等も暑いだらうから、井戸端へいつて水を浴びるがよからう、三十分間の自由時間を與へる

から、靜かに汗を流してこい。時間か来たら又樞房へ戻るのだ。いか。」

と注意して、囚人等を外へ出してやりました。囚人らは皆どんなに喜んだことせう。ある老囚人は佐川さんの足許に這びつくばつて、掌を合しながら、

「旦那様はなんて慈悲ぶかいお人様だ。ほんとうに有難うございませう。」

と涙を流して喜びました。囚人らは、みなすつ裸になつて子供のやうに噪ぎながら、しかし靜に、井戸端へ集りました。そして樂しそうに水を浴びはじめました。互ひに頭から水をかけつこする者、脊中を流し合ふ者、彼らは餘念も

ありません。それは鳥籠を出された小鳥が、ふるさとの青葉の森に歸つて、なつかしい親兄弟や、友達と、泉の水をあそびをしてゐる様な、美しい、平和な光景でした。それをちつと眺めてゐた佐川さんの頭には、古郷の村の河原で幼少志が夏の日永を水遊びに暮らした少年の日が、ありあり思ひ出されて、うつとりと、いゝ心持ちになつてゐました。――暫くしてフトわれにかへつた佐川巡査が腕時計を見ると、恰度約束の三十分がすぎかけてゐました。

「集れ！」

佐川巡査が號令をかけると、井戸端に水を浴びてゐた囚人等は從順に駆走で集つて來ました。そし

て佐川さんの前にびよこ〜お辭儀をしながら口々に、

「有難うございます。」

「有難うございます。」

とお禮を言ひました。佐川さんは先生が生徒に體操を教へるやうに、皆を整列させて番號をかけさせました。ところがさあ大變！一人だけどうしても足りません。佐川さんの顔はみるみるまつ蒼になりしました。

「誰だ！ 居ないのは――」

佐川さんの聲は怪しく震へを帯びてゐました。

「七十三號が見えませんが。」

誰かが怒鳴るやうに答へました。すると、皆は急にながやく騒ぎたちました。

「彼奴め！ 逃げやあがつたな！」

「何て思知らずな奴だ。旦那のお情を仇で返しやあがつた。」

「畜生奴！ 仲間の面汚しだ！」

「探し出して殺しちまへ。」

囚人らは皆自分の不自由な世界をも忘れたやうに、脱走した仲間を罵り、佐川巡査に同情しました。佐川さんは、とうとう監督不行届、職務怠慢といふので譴責と減俸の罰を頂きました。しかし、それより以上に、佐川さんは、自分の好意をうらぎつて逃走した人非人七十三號の心を恨めしく思ひました。悲しみますに居られません。佐川さんはもう看守といふ役がほとほと嫌になりました。で、自分から辭職を申し出ました。

署長は笑ひながら、  
「ちやあ、今度は人間でなく、牛の方の係りをやつてくれたまへ、暢氣でいゝよ。」といひました。

## 二

屠牛場検査官といふ役目を仰せつかつた佐川巡査は、町外れにある屠牛場へ牛殺しの検査に行くことになりました。

爽やかな朝でした。空や樹の青さが白い服に映つて染まりさうに思はれるやうな涼しい朝でした。しつと露にぬれた野の雜草は、水のやうな微風にそよいで、キラキラ瑤瑤のやうに光つてゐました。向ふの野路を一匹の白い牛がのんきに鳴きながらあるいて行く

のが、いかにものんびりとして、まはりの風景にしつくり調和してゐるやうに思へました。佐川さんは、中學生のやうに口笛で、軍艦マーチを吹きながら、青草の小路をゆつくり歩いてゆきました。

――やがて向ふの方に屠牛場の赤茶けた煉瓦塀が見えはじめました。それは殺された牛の血で染められたやうに不氣味に感じられました。

「あゝ、自分は、今、牛の殺されるのを見にゆく途中だ。」かう思ふと今まではればれてゐた佐川巡査の胸にフツと暗い陰影がさしました。田舎に生れて農家に育つた佐川さんは、牛や馬などの家畜に限りない愛と親みを持つてゐまし

た。佐川さんの家にも、朝風と小櫻といふ二匹の牛が飼つてありました。佐川さんとは大の仲善しでありました。

「牛や馬と遊んだ自分が、牛殺しの検視に行かねばならぬのだ。友達に殺されるのを、自分がどうして傍で見ていることが出来ようか。」

佐川さんの心はだん／＼重苦しく憂鬱になつてゆきました。でももう屠牛場のいかめしい門の前まで来てしまひました。フト見ると、今四五人の荒くれ男が、口々に喧しく怒鳴りながら一匹の大きな白牛のお尻や脊を青竹でびしびしぶつて、門の奥の方へ追ひこまうとしてゐるのです。しかし牛は

兩足をうんとふんばつて、なかなか歩かうとはしません。時々、もうん、もうんと啼きます。その聲が又いかに悲しうです。

「お前達はこの牛をどうするんだい。そんなにいちめなくてもよいぢやないか。」

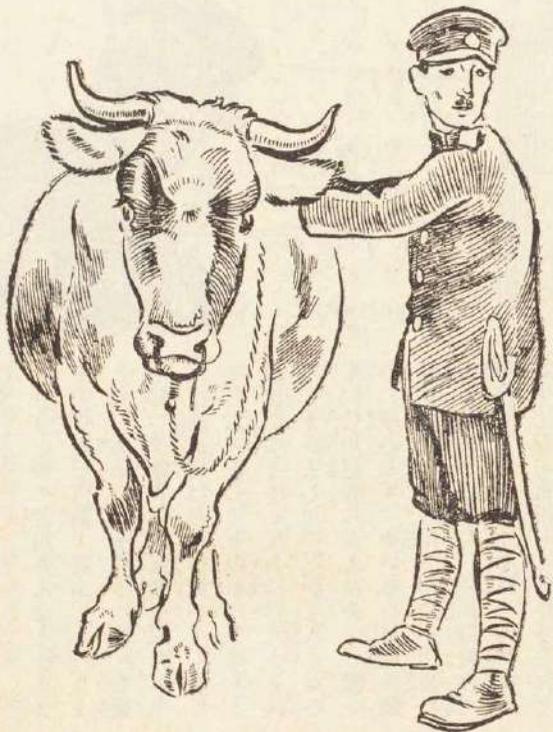
佐川巡査が叱るやうにいひますと、男達はペコ／＼頭を下げて、

「へい、旦那。御苦勞さまでございます。なかに、こ奴はこれから旦那様の御検視にあづかるんでございますよ、へい。」

「どうも野郎、自分が殺されるのをもうちやんと知つて居るもんですから、なかなか中へはいらないのでございます。」といひました。「ふうん、この牛は殺されるのか

——」  
思はず溜息をついた佐川巡査はしみじみ牛の額を撫せながらその顔にじつと見入りました。それはさつき野路であつた白牛でありました。牛は佐川さんに優しくせられて嬉しいのか、甘へるやうに軽く頭をすりつけてきます。おとなしうな節色の眼——それは「私はこれから殺されるのです、どうぞ助けて下さい。」と哀願してゐるやうに思へました。佐川さんは、この白牛をどうしても見捨てることが出来なくなりましたので、

「おい、この牛は殺さないで僕に賣つてくれんか。」  
といひました。牛殺しの人々は驚いて、佐川さんの顔をみつめま



した。それはその筈でせう。牛殺しの検査に来ておきながら牛を殺させないで、その牛を買つてしまふといふのですから、随分突飛な話です。

「旦那、ほんとうですかい。」

「旦那が牛を買つてどうなさるのです。」

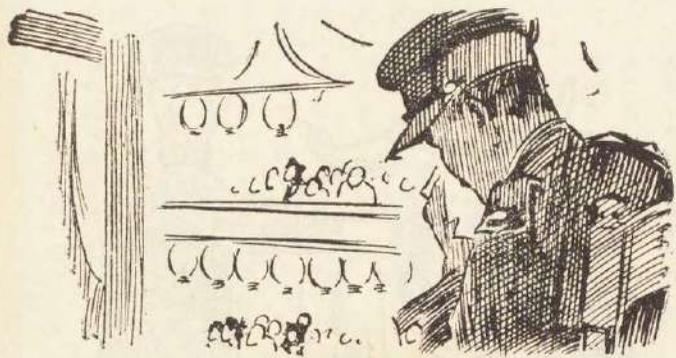
男達は口々に尋ねました。

「僕はこの牛を買つて、天神様へ寄附するつもりだ。」

「へえ、どうも旦那のお慈悲深いには驚きましたね。」

「でも旦那、まさか検査においでになる度、旦那がいちいちその牛を買つてしまはれるわけにもゆかないでせう。」

「そりやあそうだ、だから僕は、



今日かぎりこゝへ来ることはよしにする——」

さういつて佐川さんはとうとうその牛を三百圓で買ふことにしました。大きな牛を引きつれて警察へ歸つて来た佐川巡査を見た人々は、署長をはじめ皆驚いてしまひました。そしてそのわけを聞くと二度びつくりしてあつけにとられてしまひました。しかし人々はみな、佐川巡査のおもひやりの深い心に感心して、めいめい月給の幾分かを割いて佐川さんの牛代金に足してやりました。佐川巡査は大喜びで、その白牛を町の天神様へ神牛として寄附してしまひました。「どうも佐川君のやりかたは奇抜だね。」

牛をつれてゆく佐川さんの後姿を見送つて人々は腹をかゝへて笑ひ合ひました。

三

屠牛場の検視官をよした佐川巡査は、その次に劇場監督といふ役目を拜命しました。これは芝居をしてゐる劇場で、喧嘩などの起らぬやうに監督をして居る、いたつて氣樂な役でした。二階のいちばん前の椅子に凭れて、佐川さんは舞臺を見てゐました。丁度その時の出しものは「千代萩」でした。まだいたいけな千松が忠義のためにお腹の空いたのもちつところへて、歌を唄ふところや、親の前で毒の菓子を食べ、悪人の手にか

かつて斃殺しにされるのを見ると、佐川巡査の大きな瞳から涙がひつさりなしく流れました。「あゝ何といふ可哀さうなことだらう。」

佐川巡査は芝居であることも忘れて、溜息をつきながらしきりにハンカチを眼にあてゝおりました。お客のなかには舞臺よりもその方が面白いといつた風に、指して笑つてる人もありました。

三日すぎ五日すぎ七日たちました。「千代萩」の芝居は、見れば見るほどいぢらしく可哀さうで、毎日泣かされてゐる佐川さんは、しまひに、なんとなくこの世が寂しく、かなしくおもはれて、芝居を見てゐない時でもフツと泪ぐまれ

てくるのでした。夜寝ようとしても、いたいけな予役の泣聲が耳についてゐたり、その動作が目さきにちらちらしてゐて眠れません。

「千代萩」がすんでホツとすると、その次は「石童丸」でありました。この芝居は前のよりも一層可哀さうで、佐川さんはもう舞臺を見る勇氣さへありませんでした。佐川さんの顔はだん／＼青白く瘡せて、病人のやうな寂しい陰影さへ見えて來ました。そして、夜もあまり寝られない夜がつゞきますので、とう／＼お医者様にみていたゞきました。

「あなたはあまり物事に神経をつかひすぎるからいけませんよ。陰氣なものや、悲しいものは成べく

見たり聞いたりしないで、氣を樂にのび／＼させてゐなくてはいいません。」

お医者からかう注意されて佐川さんは、自分は毎日、悲しい芝居に泣かされて夜もろくろく眠れないことを話しました。するとお医者様は微笑みながら、

「ほう、芝居にまでそんなに氣をおつかひなすつちやたまりませんね、しかし成べくそんな所へはゆかないやうになさるがよい——」

さういつて、親切な醫者は、警察の署長に、佐川巡査の病氣を慮すためにはかうした役は不適當だから、何か他の役目とかへてやるやうに頼んでくれました。

「又——ですか、佐川君にも困ち

まふ、ほんとうに、いゝ人なんだが、それでは役目がつとまりませんからね。」

人のいゝ署長はこぼしながらも笑つてゐました。そして、暫く考へてゐましたが、

「ようござんす、一つ今度は交番所へ出てもらひませう。なるべく事故の少なさうな……」

といひました。まもなく佐川さんは劇場監督から、山手のある交番所へ出ることになりました。

「佐川君の氣の弱いには驚くね。」

「まったく弱蟲つたらありやあしない。罪人を逃したり、牛を連れて歸つたり



今度は芝居が悲しくて病氣になるといふのだからね。」  
「もし、賊にでも出逢つたら、驚いて逃げだしてしまふだらうよ。」  
仲間の巡查達は、陰でいゝんな悪口をいひあつたり、嘲笑つたりしてゐました。  
しかし諸君！  
これらは皆、佐川巡查の性格の一面の現れだけでありまして、それよりも特筆したいのは、佐川さんがこの交番に出てからまもなく續發した、佐川さんの他の一面の性格の活躍です。

で跛になつてしまひました。さらに最後にいつておきたいのは、ある夜の火事で、二階の部屋に忘れられた赤ん坊を助けるために、猛火のなかに飛びこんで、赤ん坊はしつかり自分のふところに入れてきたから怪我をさせませんでした。佐川さん自身は顔面から殆ど全身へ大火傷をしました。そ



して病院へかつぎこまれた時はもう盡の息でありましたが、院長や皆の人々の看病で、とうとう生命をとりとめることは出来ました。そのかはり佐川さんの顔は、二度

今、それをいちいち書きたる頁の餘裕のないことを私は残念におもひますが、一例をあげますと、佐川さんが交番に出るやうになつてまもなく、ある夜ふけ、近所の荒物屋へ二人連で押しこんだ強盗を佐川さんが二人とも捕縛したと、その時相手は兇器を持って佐川さんに斬りつけたので、佐川さんもサーベルの鞘のまゝで二人を相手に渡り合ひ、右肩をはじめ三ヶ所ばかりも負傷して、もの凄い血潮をあびながらも屈せず、とうとう二人を捕縛してしまひました。

まもなく又、ある坂の下で自動車に轢かれかけた子供を助けた時は、とうとう自分の右足をひかれ

と見られぬやうな、みにくい、ひつつりだらけの顔になつてしまつたことでもあります。しかし、仲間の巡查たちは無論、町内の人々も佐川さんを父の如く尊敬し、慕ひました。當局からも、町會からも佐川さんは度々名譽の表彰をうけました。しかし、少しも驕るやうなことはなく、  
「私は、私のなすべき役目を守つてゐるだけです。」といつて、今も醜い顔で、跛で、交番に出てゐます。この頃では、近所の幼稚園へ時々いつて、稚い子供たちと童謡を歌つたり遊戯をしてゐるさうであります。  
佐川巡查のはなしについては、今後又ある機会に是非諸君に御紹介したいと思ひます。(をばり)



童謡

野口雨情選

(小人篇)

お星様 (賞)

東京 小形 ハツ

お星様いくつ

五ツに二ツ

あたしも七ツ

來年學校

おんなじとした

おんなじとした

ひなさん (賞)

和歌山 新家シヨウ

ひなさんあんよして

みせました

一つであんよして

みせました

風 (賞)

前橋 石田 (武男)

びゅうと風が

ふいて来た

からだかぞをつと

寒かつた

さんび

廣島 古城 保之

畑で御飯を

たべてると

とんびヒロヤと

わをかい

指

熊本 山村加枝子

お湯に入つたら

指が

梅ぼしになつた

波

前橋 石田 (武男)

どおん／＼と

よせてくる波は

いつたり來たり

おにごつこ

花のほひ

埼玉 高橋 健一

なたね畠を通つてゐたら

一二四

風が吹いた

なたねの先が

ぞわ／＼と動いた

花のほひが

ぼかんとした

赤い實

京都 東 政二郎

赤い實うまいか

チヨンチヨンチヨン

赤い實には日が赤い

赤い實うまいか

チヨンチヨンチヨン

赤い實

京都 中林 繁

あめ／＼ふるな

とほつたよ

おつこちた

穂がゆら／＼

ゆれてゐる

空もうつて

ゆれてゐる

竹の笛

秋田縣 岩谷 貞三

小徑とぼ／＼

村の子が

月夜の空に

吹いてゆく

笛はさびしい

竹の笛

一一五

やんでくれ

ひるねのとんぼが

目をさます

きれいな羽の

赤とんぼ

かはりのおへべが

ないさうな

僕の顔

和田 二郎

川の中をのぞいたら

僕の顔がでこぼこに

うつつた

小鳥

和歌山 福岡 鐵男

なにもかも黙つて

日が暮れた

お山の小鳥も

巢でねたろ

一人さみしく

巢でねたろ

ほろ馬車

東京 田中 (喜一)

ほろ／＼ほろ馬車

田舎道

ほろ／＼ふえふえ

とほつたよ

まがりまがつた

田舎道

お日様山へ

はいるころ

ほろほろほろ馬車



水たまり

朝鮮 河野正三郎

水たまりに穂が



菊の花の頃

田中 貴 柳田 謙吉 畫

昔、播磨の國の加古の宿に、丈部左門といふ學者がありました。年とつたお母さんとの二人暮らしでしたが、左門が書物ばかり読んでゐて、暮らしのことを一向に關はないもので、それは、いよいよひどい貧乏なしてゐました。それでもお母さんは、少しも苦痛を云はないで、年寄りの身でありながら、機織りなどをして、働いては、いくらからでも暮しのたしにして、左門の學問の邪魔をしないようにしました。

「ハイ、實はお客が熱病にお罹りになつてゐられるのです。その方は西の國の方らしい御座います、連れに後れたから一晩泊めてくれと仰るので、お武士らしいのな安心してお泊めました。ところがその晩から急に熱が出てお起きにもなれないので、お熱の方とも分らないので、私もどうしてよいが困つてゐます」と、主人は迷惑さうな顔をして云ひました。

「ハハハ、そんな莫迦なことがありませんか。もし傍へ行かないやうにしてゐるのです。もし傳染りでもしたらどうなさいませう」と云ひました。

「左門は笑ひ出して、左門は、そんな莫迦なことがありませんか。もし傍へ行かないやうにしてゐるのです。もし傳染りでもしたらどうなさいませう」と云ひました。

「あなたも御心配でせうが、御病人は知らない旅の客なので、一層心細いことせう。どんな様子か、一寸お見舞ひして来ませう」と云ひながら立ちかけると、主人は慌て、止めて、

てあるうちに、赤穴は信ある武士なのうれしく思つて、善い人を知つたと喜びました。そして機のある度、話をして見ますと、赤穴はよく書を讀んでゐて、左門が問うことな何一つとして答へるの出来ないことがありません。それで「さう仰よくなつた二人は、どうも兄弟の約束を結びました。丁度赤穴が五才程年上でしたから、左門の頼みで兄となりました。」

赤穴は、左門に、「私は兩邊に早くわかれしました。それで君のお母さんは私にもお母さんですから、一度お目にかゝりたいものです。お母さんは私を憐んで下さるでせう。」と云ひました。左門はそれを聞くと嬉しくてたまらず、「母はいつも私が一人ぼつちなのを心配してゐます。あなたのやうなよいお友達が出来たときいたら、きつと喜ぶでせう。」と、一緒に家へ歸つて来ました。左門が赤穴を紹介せすと、お母さんは大變よろこんで、「この子は學問が未熟ですから、この後もどうぞおみすてなく教へてやつて下さい。」

と云ひますと、赤穴は鄭重に挨拶をして、「お母さん御安心下さい。私はお母さんのお筋に任せて、左門殿と一緒に學問、出来ることが、何よりの喜びです。」と、嬉しそうに云ひました。

赤穴はそれから、すぐに前の家へ行つて、永く厄なけたお禮を厚く云つて、また左門の家へ歸つて来ました。赤穴は左門のお母さんか自分の本當のお母さんのやうによく面當を見て孝行しました。そして左門と仲よ



く學問を讀みました。赤穴が加吉へ来た時は、まだ機ひの味さける春の初めでしたが、こちらに逗留してあるうちに、いつの間にか青葉の茂る夏の始になつてゐました。

ある日、赤穴は左門とお母さんの前へ出て、急に改まつた様子で、「今日少しお願ひがあるのですが、聞いて頂けるでせうか。といふのは、私か近江が抜け出して、こちらへ来たのは、實は出雲の動靜が探りたいと思つたからです。おかげで私もすつかり丈夫になりましたし、それに故郷の方も氣になりますので、一度歸つて動靜を見たくて、又こちらへ參つてお仕へしたいと思ひます。暫くのお別れをおゆるし下さい」と、おれがひきました。

すると、お母さんも左門も、さびしさうな顔をしました。左門は泣き出しさうな聲で、「それでは仕方ありませんが、何時頃歸つてお出でになるでせうか。」  
「さう、おそくとも秋になるまでにはきつと歸つて来ます。」  
「たのしみにして待つてゐますが、秋は何時



頃でせうか。」  
「重陽の佳節の日にはきつと歸つて来ます。」  
「兄さん、その日にはきつと歸つて来て下さいね。菊の花とお酒を仕度して待つてゐますから。」

赤穴は、左門のまごころをた心づくしに、胸がこみ上げてくるのでした。おいしくと泣くお母さんと、涙をこぼして見送つてゐる左門とを後に、赤穴は胸が振りまけるやうな思ひをしながら、西の國へ

歸つて行きました。

二

赤穴と別れた左門は、一間に籠った切り、しよんぼりとまびさうに物思ひに耽つてある日がつゞきました。お母さんは左門の身の土を心配して、赤穴が早く歸つて来るのを心待ちに待つてゐました。

月日はどん／＼経つて行つて、早くも暑い夏の盛りは過ぎ、涼しい風がそよ／＼と吹く九月になりました。庭の茶莢の實は赤々と色づき、垣根の野菊も匂やかに咲き出しました。九日の朝になると、左門はいつもより早く起きて、家の中を綺麗に掃除して、黄や白の菊を二枝三枝籠に挿して、御馳走の仕度にかかりました。

「出雲の國はこゝから百里ほど離れてゐると聞いてゐるから、今日の日とも限るまいに、歸つて来たのを待つて、仕度をしてもよからう。」  
お母さんはさう云ひましたが、左門はかぶりを振つて、  
「赤穴は信ある武士ですから、きつと約束

は違へますまい。来たのを見て周章に仕度をしては、恥かしいことですよ。」と聞き入れませんでした。そして酒や魚を買つて来て、御馳走を體へました。

その日は麗かなお天気でした。秋晴の空には一片の雲もなく、青々と晴れ渡つてゐました。左門の家の前を、旅人が通つて行きました。旅商人が通りました。五十位あると三十位あるの武士が二人、馬に乗つてのんきうに話し合ひながら行きました。左門は今か今かと眼をみはつて、表を見てゐましたが、お晝過ぎになつても赤穴の姿は見えませんでした。秋の日は暮れやうくて、やがて日も沈んで夕方になりましたが、待つ人は来ませんでした。眞暗になつても左門は外に出て西の方を見てゐました。

お母さんは左門を呼び入れて、  
「氣が變つたといふのではないが、菊の盛りは今日ばかりではない。歸つて来る積りでも何か差支へが出来たら、怒みは云へませんよ。今日はお来ないだらうから、お寝なさい。」と云ひますので、左門もあきらめて、先づお母さんを癒ませて、自分も寝床へ這入

三

空には月がかう／＼と輝いて、水のやうな光を投げておました。遠くの方では大の吠える聲と、波の音が響いて来て、ひつそりしたしづかな夜でした。暫くの閑突立つたま、西の方を見てゐましたが、誰も来る様子もない。やがて月の光も山の蔭にかくれたので、もうだめだとながつかりしながら、家の中へ這入つて戸を閉めやうとして、ふと外をのぞきますと、遠くの方にぼんやりと人の影が見えて、ぶらぶらりとこちらに来る様子です。近寄つたのをよく見ると、それは今迄待ちに待つた赤穴宗右衛門でした。左門は飛び上るやうに喜んで、  
「兄さん、私はあなたのお歸りを、今か今かと待つてゐたのですよ。約束を違へないで

よく歸つてお出でになりました。まあお這入り下さい。」と云ひますが、赤穴はたゞ黙々くばかりで、一口も物を云ひません。

「お歸りが遅かつたので、母も待ちくたびれて寝てしまひました。一寸起きて来ませう。」と立ちかけると、赤穴は首を振つてそれを止めました。が矢張り物は云ひません。  
「随分お疲れでせうから、一杯呑んでお蔭みなさい。」

左門はさう云ひながら、酒を温めたり料理を持つて来たりしてすゝめましたが、何故か赤穴に袖で顔か掩つて、その匂ひを薫がるやうにしました。左門は變な氣持になつたので、  
「御馳走でなくて失禮ですが、私の心持だけを汲み取つて下さい。」

と云ひましたが、赤穴は返事もしませんでした。その代りに溜息を吐きました。  
「いや、決して君の真心こめなまてなしを受けないくはない。嘘もつけないから本當のことを云ふが、怪しんで下さるな。實は

私はもうこの世の人ではないのだ。魂の左門は聞いてびつくりして、  
「兄さんなぜそんな變なことを仰るのですか。私に夢を見てゐるとも思ひませんが。」と感ひました。

「まあ聞いてくれ。君と別れて國へ歸つて見ると、城の人達は大抵細久の勢に畏れて、隣谷の思ふ思ふ者がない。従弟の赤穴丹治が富田の城にあるので訪れて見ると、丹治はしきりに細久に逢ふことをすゝめて、とうとう私を細久に仕へさせることにしてしまつた。それで私は細久の人物を見る積りで、いや／＼ながら承知したが、細久の遣つてある事をつく／＼見ると、成程武勇に勝れて兵卒を従へることは心得であるが、心は疑ひ深くて、腹の底に云ふ者があない。だから永く居る所ではないと思つたので、君との約束あることを話して、眼を取らうとすると、細久はそれを怨んで、丹治に云ひ付けて、私を牢の様な所へ閉籠めてしまつて一足も出さないやうにした。私は君との約束を破るのが心苦しくて、いろ／＼と思

ひめがらして見たが逃げ様がない。さうして今日までいらいらして来たが、古の人が、人一日に千里は歩けないが、その魂は千里は歩けると云つたことをふと思ひ出して、私はよしと決心した。どうせ細久のやうな者の傍にゐれば遅かれ早かれ命はないものと思つたから、切腹して相果て、魂になつて今宵の風に乗つてはる／＼と来たのだ。どうぞ私の心を憐れんでくれ給へ。」  
赤穴は云ひ終ると、さめ／＼と泣き出し

「もう永いお別れです。お母さんを大切に上げて下さい。」  
と云つて立ち上つたかと思ふと、もう姿は見えませんでした。

四

左門は悲しみが胸にこみ上げて来て、とうとうそこに倒れたまゝ、大聲で泣きました。泣聲に目をさましたお母さんはびつくりして、左門の所へ来て見ますと、この有様ですから、



『どうおしかへ？』と云ひ乍ら、左門を起して置りましたが、左門は泣くばかりです。『赤穴が来ないからと云つてそんな悲しむものではない。明日になったら来るでせう。』

と、なだめました。左門は暫くすると泣き止めて、いふ赤穴の魂が来たかと云ひました。するとお母さんは笑ひ出して、

『それはお前の氣の迷ひですよ。あんまり赤穴のことを思ひつめたから、そんな切な見たのです。』

と云ひましたが、左門は、『いえ、そんなことはありません。確に来たのです。』と、また大聲を上げて泣き出しました。

お母さんは不思議に思つて問ひ訊して見ますと、左門はやつと泣き止めて赤穴が魂になつてお母さんに來た一部始終を話しました。そしてお母さんに尋行してくれと云つたといふと、お母さんは急赤穴が可哀さうになつて來て、おい、と泣きました。とうとうその晩は左門と二人で泣き明しました。

あくる日になると、左門はお母さんに、暫くの間、喉を下さいと願ひました。それから出雲へ行つて、赤穴の骸を藏めて慰めて來たいと云ひました。お母さんは止める言葉もないので、早く歸つて來るやうにと云つてゆるしました。

五

左門はお母さんを佐用の家へ預けておいて、出雲の國へ下つて行きました。左門の心の中は、恨みをのんで死んだ赤穴の仇討で燃えておりました。十日ばかりすると富田の城へ着きましたので、赤穴丹治の屋敷へ訪れて行きました。丹治は左門に逢ふとふしぎさうに、

『まだ知らせもやらないのに、どうして御存知ですか。』と訊ねました。『兄は私との約束を重んじたために、魂になつて私の所へ來ました。』と、左門は冷やかに云ひました。そしてだん、興奮して來て、

『兄は徳谷の恩を思つて尼子に仕へなかつた

のに、君はなぜ尼子に降つたのですか。兄は私との約束を重んじたために、命を捨てて百里の道を來てくれたのに、君は尼子にへつらつて兄に自殺させたのはどういふ譯ですか。輕久殿がむりに止めやうとも、血が通つてゐる者なら、何とかしてやる筈なのに、君は何故かまはなかつたのか。君はそれで武士らしい仕方と思つてゐるのか。武士の風上にもおけぬ奴！』

と云つたかと思ふと、拔打に切りつけました。丹治は左門の一刀を受けて倒れました。家來達が騒ぎ廻つてゐるうちに、丹治の家を逃げ出した左門は、秋晴の空の下で、ほつと溜息を吐きました。今こそ赤穴の無念な暗しと思ふと、しぜんと思ひ、輝いて微笑みが浮んで來るのでした。

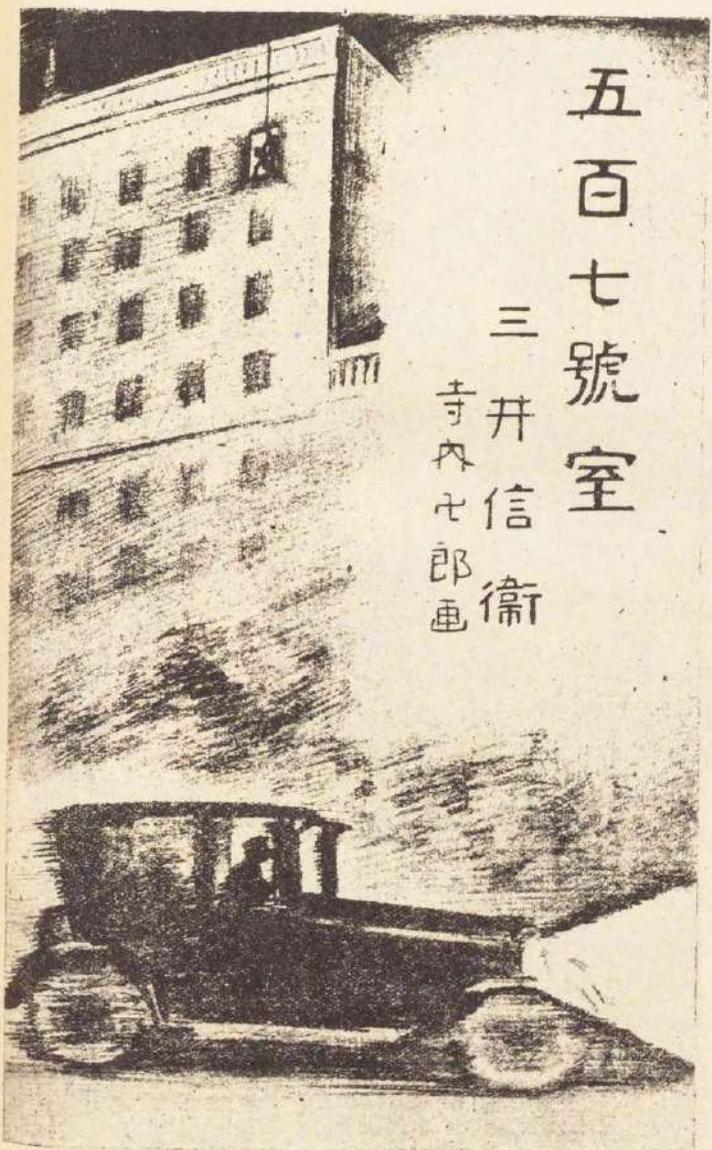
生垣の傍には野菊が黄や白に咲き亂れて、帯んだ空へ向けて匂やかな香りを送つてゐました。

(なはり)

# 五百七號室

三井信衛

寺内七郎画



【前號までの梗概】東京放送局の放送から二時間半の後、滋長の調音の仕事によつては、いつも不思議な鐘の放送を聞くことが出来た。さういふ時鐘の鐘が聞こえ始めて以來、次のやうな数々の怪事件が起つた。——佛國から三年振で歸朝した滋の父が、行衛不明になる。滋の家である寶石店では、莫大な寶石が盗まれる。市内には毎夜、七軒づつの盗難が繰返される。やがて滋の家へ、一人の怪しい覆面の男が襲ひ、滋はそのため大怪我をして病院に入ったが、更にその病院でも、次のやうな事件があつた。

松本支配人と夏雄一郎の二少年が、滋を見舞に來た。備何者かに掠はれた。同じ病院で、滋の店にゐた奥原が秘密に手術を受けて、その腹部から、盗まれたダイヤが一つ出た。病院の裏門で、父の寶石入りのネクタイピンを盗が拾つた。手術の後奥原が突然死んだが、そのベットの下の下から、ラ

ヂオの鐘の暗號と、變なクロスワードのやうなものを書いた紙片が出た。滋が退院して後、同じ店員の守屋といふ青年が、そのクロスワードを解いた。それによつて神岡ビルディングに悪漢の住む、七つの部屋のある事が分つた。滋と守屋がそこに行つて、あらゆる危険を冒し、屋上庭園から綱を下げて、七階の五百七號室のぞくと、そこに圍らすも父があつた。ところがその父が、不思議にもその室にあるラヂオのマイクの前で、片手に銀の鐘をさげ、暗號の放送をしてゐるのであつた。

## 最終篇 翡翠の珠

### 1 父か「怪人」か

鋭く、痺れるやうに響いた銀鈴の音は、いつまでも微かな余韻を残して、太い綱に下つてゐる守屋

と滋の耳へ、慘むやうに傳はつて來ました。

死物狂ひにぶら下つてゐる滋の掌には、深く綱が喰ひ入つて、ともすると八階の頂上から、手を放さうとさへするのでした。

すぐ側の守屋が、その時、言ふに言はれぬ、苦しうな唸り聲を出しました。滋がもう一度、五百七號室の内部を覗くと、今、放送機の前で鐘を叩いた滋の父が、その妻のまゝで、ちつとそこに立ちつくしてゐましたが、それもほんの僅かな間でした。

まるで蝙蝠のやうに、氣味わるく、然し慌だしげに、身を慄はせたとかと思ふうちに、何の音もなく上衣は落ち、萎れるやうにズボン

も消え、そこに現れたのは見るも恐ろしい、眞黒な怪人の姿でし  
た。それにも増して、その顔には  
又いつの間にもやら、着物と同じ黒  
い覆面が蔽はれておりました。  
滋が思はず腹の底から、得體の  
知れない喚き聲を出したのと、そ  
の怪人の黒い姿が、僅かに開いた  
カーテンの隙間から、映畫のやう  
に突然消えたのは、殆んど同じ  
時でした。

力は盡き両手は痺れ、さても猶  
不亂に走りついてゐる滋の耳に、  
間もなく、自動車響が、下の方  
から傳つて來ました。屹度今の怪  
しい男が乗つてゐるのでせう。身  
を反して眺めると、一臺の自動車  
は、一びきの怪獣にも似て、その

青白いヘッドライトの光が、ほん  
の一秒間、下の街路樹を、圓くは  
つきりと浮べました。  
何う考へても、辻褄の合はない  
話です。フランスから歸つた滋の  
父が、事もあらうに、この五百七  
號の秘密部屋で、ラヂオの暗號の  
放送をしたのはおろか、一人の怪  
人の姿となつて、自動車で去つて  
行かうとは……

たしかに今の怪人は、黒い衣と  
いひ、覆面といひ、登里野寶石店  
で滋を襲つた怪人と、全く同じ扮  
装でありました。  
守屋もまた、この滋の疑ひと同  
じであつたのか、もう一度、合圖  
のやうな唸り聲を出しました。  
ところが、不思議はそればかり

か、猶も二人が、カーテンの隙間  
を眺めてゐると、今、出て行つた  
ばかりの父が、覆面も黒衣も脱り  
又最初とも違つた洋服を着て、再  
びその五百七號室に戻つて來たの  
です。さうして、あの放送機の前  
の大きな椅子に、どつかりと腰を  
かけました。そして、隙間から見  
える父の両手は、たしかに太い紐  
で縛られ、その口には厚い布が、  
強く蔽はれてゐるではありません  
か。

## 2 翡翠の在處

二人は思はず低い聲で囁き合ひ  
ました。縛られてゐる父の後に  
は、姿は見えないが、確かに誰か  
が立つてゐるに相違ありません。

なせと云つて、その邊りから、恐  
ろしい叫び聲が、はつきりと二人  
の耳に傳はつて來たからです。  
『おい、もういゝ加減に、寶石の  
在處を白狀してしまへ。』

さうした乾干びた聲がすると、  
今度は何かを言ひたげに、縛られ  
た両手を哀しげに漣がき、父は放  
送機の前に首を突き出しながら、  
何事かを叫ばうとしました。

『馬鹿め。』その後から、又恐ろし  
い聲が聞えました。『その手には、  
二度と乗るものかい。もう放送機  
に仕掛はしてないんだ。幾らでも  
嘔鳴るが、は、は、は、は、は。』  
滋の顔は眞蒼になりました。先  
刻怪人の姿となつて出て行つたあ  
の父と、事情は分らぬけれど、今

寶石の在處を言へと云つて、何人  
かゝら責め苛まれてゐるこの父と  
餘りと云へば違つた有様です。  
『さあ、白狀しろ。ブルガリア翡  
翠の在處を、白狀しろ。』

ブルガリア翡翠。聞いたことも  
ない寶石の名前です。が、姿は見  
えなかつたけれど、それはまア何  
といふ恐ろしい聲。  
さうして父は、口を縛られたま  
ま、何事かを含むやうに答へ、二  
度三度續げざまに、首を振りまし  
た。すると、その直ぐ後で、

『白狀しなければ、いよいよ今夜  
は、最後の手段だ。』  
先刻の聲は、さう叫びました。  
父の身體は、後の男に掴まれた  
やうに、よろ／＼とよろめいて立

ち上りました。さうして窓の方へ  
近づいて來ました。

『これはいけない。あの悪い奴は  
お父さんを、この窓から突き落さ  
うといふのだ。』

直ぐにさう察した滋は、力いつ  
ぱい網を傳つて、もう一べん屋上  
に登りました。守屋もまたその後  
から、屋上に登りました。

二人がする／＼と音もなく、垂  
れ下つた網を引き上げた時には、  
もはや五百七號室の硝子窓が、音  
もなく開いておりました。

## 3 一筋の綱

怪人と父と。この解け難い謎も  
今は滋の胸から去つて、目の前に  
迫つてゐる父の危機を、救はねば



ならない決心に變りました。

「守屋さん。」滋は促しました。

守屋は背きながら、滋を制しました。同時に、五百七號室の窓からは、父の半身が現れて、その後には逞しい二本の腕が、鷲掴みにそれを支へてゐます。

「どうだ。ブルガリア翡翠の在處を言はないか。」

低いけれど、又しても恐ろしいその囁き。滋は眉と眉との間に、深い皺を作り、

「守屋さん。」

と、合圖のやうに呟くと、又建築物の冷たい壁に、蛇が這ふやうに、音もなく綱を降しました。

その綱は、突き出された父の身体から、一尺上で止つたのでし

た。その綱の尖端は、激しい滋の決意のために、細かく慄へてゐます。決死の覺悟で、その綱を傳つた滋と守屋は、突き出された父の身體を、後からむんづと掴むと、

それなり力いつばい、父の肩に、両手から堅く手をかけたまゝ、上へ上へと曳き揚げてしまひました

「おやア。畜生……」

けんめいに父の身を支へながら瞬きにも足らぬうちに、屋上庭園へ上つた二人を眺めて、悪漢は窓の外へ身を出しました。

「お父さん、僕です。」

滋は叫びました。

父は恐怖と驚きのために、荒い息を吐いたまゝ、二人の手を、合せて握りしめてゐました。父の眼

は、極度の脅えのために、もう何の落着すらありません。

「店長。守屋ですよ。」守屋も叫ぶのでした。

ビストルの音と、濛々とした煙が、屋上庭園めがけて、彼方此方から、黄硫泉の噴き出すやうに立ち罩めて來ました。——悪漢たちが追つて來たのでせう。

二人は、縛られたまゝの父を更に背つて、屋上庭園の彼方此方を、ビストルを避けながら、馳けつづけました。二人の目に映つたものは、このビルディングの非常の折に使ふ裏梯子です。あらゆる危険を犯して、やうやく三人は、日比谷の大通りに逃れ出たのでした。

4 滋の放送

三人が警察に急報して、警官の一隊が神岡ビルディングを襲つたことは、ここに詳しく述べる必要



はありますまい。又警官たちが、滋の話を参考として、あの五百七號室を始め、他の六つの部屋々々に侵入したことも、詳しく語る必要はありますまい。

が、そこで捕へられたのは、先刻父に「ブルガリア翡翠」の在處を責め、窓から落さうとしたあの男、只つたそれ一人だけでした。そしてその男は、二階八十六號の秘密室にある悪漢でしたが、その外には何一つとして、堅く口を黙して語りません。場面は、五百七號室

の内部です。警官隊の努力によつて、その部屋の恐ろしい装置も、今はすっかり取り拂はれ、只あの奇怪な放送機だけが、父や守屋や滋を始め、たくさん警官たちの前に、魔物のやうに立つてゐます。

「滋君、それちや先刻この部屋にゐた奴は、自動車で何處かへ、出て行つたといふんだね。」警官の一人は、かう言つて滋に尋ねました。「さうです。それと後先して、残りの五つの部屋の奴等も、出て行つたのに違ひありません。」「それでは我々は、すつかりの部屋に張り込んで、悪漢どもが出先から歸つて来るのを、引つ捕へた



方がいゝかも知れん。」警官がさう言つた時、そこに立つてゐた滋が部屋の片隅に、あの

それを見た刑事の一人は、滋の行かうとすることを覺つたのか、放送機に放送の装置をしました。滋

銀鈴の置いてあるのを見ました。

「さうだ。」

滋は云ひました。

言ふが早いか、そのざら／＼と光る一挺の銀鈴をさげて、放送機の前に近づいたのでした。

「何をやるのだ。」

と驚く警官たちに容赦もなく、滋は左手に高くその銀鈴を捧げ、残る右手に、一本の合金の棒を握りました。

はそれを持つて、「かあん、かあん、かあん、かあん、かあん、かあん……」激しく、續げざまに、銀鈴を打ち鳴らしました。それこそは、かつて與原の残した暗號の紙片で知つた「集合せよ」の鐘の合圖。居合す人々は、一ときしいんとして、無言のまゝそこに突つ立つてゐましたが、それから約つと半時間の後、その放送をきいたのか、次々に聞える自動車の響きと共に、六つの秘密の部屋々々には、それぞれ六人の悪漢が舞ひ戻つて來ました。

り込んでゐた、悪漢の配下の何十人か、いつにない非常集合の鐘を聞いて、我れがちにこのビルディングの中へ集つて來ました。

その少し前、父や滋たちはそこを去つて、日本橋の店に歸りましたが、その後で、残る六人の主魁を始め、あまた配下の人々が、一齊に捕はれたことも、詳しくこゝに語る必要はありません。

5 意外な父の話

白い夜更の町を迂るやうに、滋たちの自動車は、家に向つて走つて行きました。その自動車に乗ると直ぐに、  
「お父さん。」と、滋は言つて、父の胸に身を投げました。

「有難う、滋。」しみじみと父も答へたのでした。「お前たちのおかげで、わしは危い命が助かつたのだ。あゝ、わしこそは、本當のお父さんだよ。三年ぶりに會ふ、本當のお父さんだよ。」

守屋も滋も、父の言葉にすつかりと驚いて、まじ／＼と、父の顔を眺めました。今初めて氣がついて見ると、語る父の顔は、何となく、あのフランスから戻つた父とは違つてゐます。

「さうだ、お前たちは何も知らなかつたのだ。父は驚く二人に話しました。わしが日本に歸る途中、あのバルザック號の中で、全くわしと、瓜二つに似た一人の紳士に會つたのだ。船の中でも、いつも

いつもその紳士とわしとが間違へられるほど、二人は生き寫しだつたのだ。只わしの方が、その男よりも背が幾分高くて、その上少し肥えてゐた。が、實際、二人を並べてみないうちは、誰だつて二人を取違へてしまつたんだよ。三年以上會はないお前たちが、うつかりと間違へたのも、無理はないと思はれる。」

「それでは、横濱の棧橋で會つたのも、ちやア最初から、お父さんではなかつたのですか。」滋は叫んだのでした。

何といふ奇妙な出来事なのでせう。しかし、かういふ他人の空似も、世の中には、稀にあるものだとお言ひます。只運の悪いことに

は、その瓜二つの男、それがあの五百七號室の悪漢の主魁だつたのです。

この日本はおろか、上海あたりにも出て行つて、悪事を働いてゐた悪漢の主魁は、不圖同じ船に乗り合せた登里野氏が、自分に瓜二つなのを見て、悪心を起しました。

彼は出来るだけ、登里野氏に親しく近づきました。さうして、登里野氏がフランスで、「ブルガリア翡翠」といふ、世にも稀な寶石を手に入れたことを知ると、それを奪ふために、仲間の一人と力を協せて、バルザック號が横濱に着くなり、恐ろしい痲酔劑の力によつて、逸早く神岡ビルディングへ、

連れ去つてしまつたのです。さうして彼は彼で、その聲までも癖までも身ぶりまでも、すつかりと父に習つて、何喰はぬ顔で滋等と一緒に、まるで本物の登里野氏のやうに、寶石店へ入つたのでした。

「さうしてあの悪い奴等は、わしを眞暗な地下室に入れたり、又、五百七號室の頂上から、突き落さうとしたりしながら、ブルガリア翡翠の在處を言へと、毎日々々責め續けたのだ。」

「では、あの「滋、悪魔だ、神を」といつた、ラヂオの聲は？」  
「あれはお父さんだ。お父さんはお前のために、ラヂオの機械を買つて來た。もしそれが家に届いてゐたら、さつとお前は聴くに違ひ

ない。わしが囚はれてゐることを、どうかして知らせたいと思つたのだ。けれども、悪漢の奴に口を制へられて、只つたあれだけしか言ふ事が出来なかつたのだ。」  
「さうしてお父さん、そのブルガリア翡翠といふのは、一體何處にあるんです？」

「ところがね、實はお父さんは、そんな大切な寶石だから、大切にうに藏つておいて、却つて船の途中なんかで、間違ひがあつてはならないと思つたので、フランスを立つ一寸前に、ネクタイピンにして、いつもそれをネクタイに挿してゐたのだよ……」  
「ネクタイピン！」滋は思はず、大きく／＼目を睜りました。

6 後日譚

「けれども、あの五百七號室の悪い奴が、わしを捕へてから、そのネクタイピンを奪つてしまつたのだ。が、奴等は、實はそれが、本當のブルガリア翡翠だとは知らずに、このわしに在處を言へ、在處を言へと責めるのだ。だが、もしそのネクタイピンの寶石が、ブルガリア翡翠だと言つたなら、悪漢の目を醒すやうなものだ。まるで一寸見れば、光のい、綠玉石のやうではあるが、その實、世界有数の貴重な寶石——それはまだ、あいつの手にあるのだよ。」

「い、え、お父さん。僕がそれを持つてゐます。」

「何だつて、お前が……？」

滋は直ぐさま、ポケットに手を

入れて、あの病院で拾つたネクタイピンを、父の前に出したのでした。

あゝ、深い秘密と傳説を持つやうな、又、夢の花園に咲く奇しい花のやうな、得も言へぬ光を帯びたこの卵形の寶石。それが、世にも稀なブルガリア翡翠であらうとは、まことに意外でありました。

しかもそれを、養心堂病院を襲つた五百七號室の主魁が、松本や謙一等を掠ふ時に、うっかりと取り落し、滋の手に入つたのも、思へば不思議な運命でした。

一伍一什を聞いた時、父はほつと深い吐息をついて、永い間、滋の手をもつてゐました。自動車は登里野の店に着きました。

奇しく、恐ろしかつたこの事件も、すつかりと解決して、地下室に閉ぢ込められてゐた松本も夏雄も、悪漢の自白によつて、無事に店へ歸ることが出来ました。

七つの部屋にゐる七人の男は、更に東京市中に、何十人といふ大勢の配下を持ち、夜な／＼ラヂオの暗號によつて、それ等と連絡をとつてゐたことも判明しました。

すると、恰度それから十日程経つた後、登里野寶石店に宛て、突然一通の手紙が來たのでした。父がそれを開封して見ると、何事も知らない與原の父からでした。

「御主人様。

誠に、私は不思議でなりませんあの養心堂病院で、息子の腹部から、見事なダイヤが出ましたばかりか、骨壺の中から、圖らずも今日、十四金の小さい金塊が一つ、出てまゐつたのでございます。

焼けて眞黒になつてをりましたので、最初は金だといふことも、わからなかつたのでございます。けれどもそれを拭ふと、びか／＼と、金色に光つてまゐりました。そこで最寄の金細工屋に見せましたら、十四金だと申すのでございます。

白骨と一緒に金塊が出る、さういふ想像が出來ますのは、死人の口に金の入齒があつたか、或

は指環をはめてゐたか、この二つでございませう。しかし息子にはその二つとも、確かになかつたと存じてをります。あのダイヤと申し、この金塊と申し、何となく私には、不氣味でならないのでございます。何か御主人様にお心當りはございますまいか……」

もう讀者諸君は、お察しになつたでせう。恰度、われとわが罪を秘すために、與原がダイヤを嘔み込んだやうに、滋の後からそつと萬年筆を取りあげて、その軸を焼き拂つたけれど、金ペンだけは思ひ切つて、嘔み込んだのでせう。

いふまでもなく、謙一少年に罪をさせるために、滋の部屋の前へ

謙一の萬年筆を落しておいたのは、與原だつたのです。

圖らずも手術の折、ダイヤと同じやうに、その小さな金ペンが、腹部の何處かに引つ掛つてゐたのは、醫師の手落ちか、知られずになりました。しかしその身體が、白い幾片かの骨と變つても、あくまでもその金ペンは、小さな金の粒となつて、残つてゐたのです。

けれど、情深い滋たちは、もうその事については、一切與原の父へ知らさずにおきました。

「ジエイ、オウ、エイ、ケイ。」

目の前のラヂオは、この不思議な事件も、何一つ知らないかのやうに、今も尙はつきりと放送の聲を傳へてゐるのでした。(をばり)

乳母日傘

達崎龍

車蜻蛉の  
くるくるは  
橋を渡つて  
すういすい  
乳母日傘の  
お晝すぎ  
お寺の御門は



まだ遠い

こぼこぼはいて  
鈴つけて  
さアさ姉さま  
参りましヨ  
村はお茶摘み  
新茶摘み  
車蜻蛉が  
すういすい

寺内萬治郎畫





綴 藤 佐 郎  
方 選 次

春の野良の歸り路 (賞)

長野縣上伊那郡七久保村北街道

上沼イトエ

(十六才)

風も無く美しく晴れたこの頃にはめづらしい良いお天氣。暖い眞晝の太陽はまぶしく照りかがやいてゐる。道ばたの土手の枯草の中に春らん草が咲いてゐる。その草がもく／＼と圓くなつて暖かい陽をあびて居る。向ふの土手に残り残されたかれすゝきが音も立てずに

ゆれてゐる。あちらにもこちらにも鏡の様に美しい苗代の水面が見える。板屋根にも瓦屋根にもかげろうが燃えともつてゐる中に、慈福院の大きな櫻が夢の様に浮き出て見える。ねむくなる様だ。あちらこちらに枯草の上に暖く太陽がてらして居る。青い竹やぶが鮮かに見える。日本アルブスもかすみひく程にも無く眞白い雪をいただいて雄々しい。下の方へ目を下した。眞黄な、たんぼ、が土手一ぱい咲いてゐて美しい。南をむいた新鮮な麥田。青いこへた葉がもうせんの様にしきつめられてゐる。目がさめる。桑の切りかぶの畑が廣くつづいてゐるのも氣持がよい。しづさんの家の前まで来た。福壽草の花が散つて、青い玉が残つてゐる。水仙が今眞盛に咲い

或る朝 (賞)

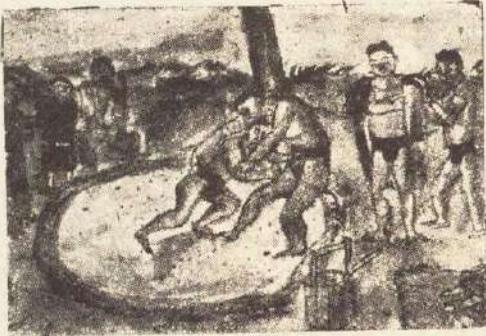
樺太豊原西一條中通南十丁目

森

(十四才)

チユウ／＼と鳴く雀の聲に目がさめた。側を見ると弟がまだグーグー眠つてゐる。今朝こそ弟より

早く起きてやらうと、床をソツトぬけ出して、臺所へ行く。初夏の明るい日光が、もう室一ぱいに満



「角力」 (賞)

札幌市南八條

佐藤錠二 (十三才)

ちて快い。かまどの方から、母の炊ぐ御飯の匂がたゞよふて来る。それが妙に空腹の心をそゝる。「みるちやん、もう起きたのかい、今朝は大へん早いね。」さう言ふ母の聲を聞きながら、外へ出て裏手の方へまはつて見る。めつさり若葉のふえた裏の白樺の林に、雀の群がやかましく鳴きたてゝゐる。父のひま／＼に手入した畑も、ほどよくのびた野さい物に、朝日が輝いて生々した緑の色を見せてゐる。明るい雀の聲や、生々した緑色の野さい物を見る頃には、もう目もすつかりさめきつて、心が爽になつてゐる。

裁縫しけんの時間 (賞)

山口縣熊毛郡穂田小学校高二

加藤正子

そは／＼と氣が落ちつかなかつた。先生の顔をちつと見てゐるばかりだ。やがて先生は黒ばんに問題を書き始められた。こきふが急にしんと止まつたやうな氣がする。黒い黒ばんに浮き出す一字一字が、目に吸ひ附けられる。「さあ、お書きなさい。」先生は一度説明されてからかう言つて、椅子にこしかけた。鮮やかに書かれた白い字がにくくてならない。いく度読んで見てもやつぱりわからない。その内に顔がぼ／＼と熱くなつて來た。鉛筆の先をおつと見つめる。隣の人に走らす鉛筆の音が、左の耳にはつきり聞える。仕方なく少しでもわかつたのから書き始める。口につばがわく。顔はますますもえて



「お、オトウサン、オトウサン」

煙へ出て

神奈川縣高座郡  
大野小学校高二

中里 素行

来る。「いつそ、わからん。」と思はずつぶやくと、さつきから考へてゐるらしかつた隣人は、赤い顔を上げながら、「私もいつそわからん。」と鉛筆の先をあごでこくりとやつた。

の木へやりに行きました。桑の根の所へ私が突掘つて、其の穴へ父がをけへ入れたこやしを二つかみぐらゐづゝやるやうにして、二人ははじめました。其の日は晝前も、ほんきで穴をほつたので、大變からだがつかれて居ました。けれど私はがまんしてほつて居ました。一作の桑のそばへ穴がほりをへた時でした。私は「あゝこしがいた

い。」とさすりながら空を見ると、青空に、はたのすこしかけた月が見えました。しばらくのあいだ見て居ると、父が「はやくほれ。」と言つたので又ほりはじめました。がちき、うでやこしが痛くなつて来たのでゆつくり、がまんしながらほつて居ました。父は、すこしもつかれた様子はなく、せつせとこやしをやつて居るので、だんだん私は、追いつかれて来ました。早くほろうとあせつたが、うでやこしがいたくなるばかりで、少しも進みません。父に、「もうつかれたのか。」と言はれて、自分のいくちのないのに泣きたくなるやうでした。「少し休んでろ。」と、父はをけをそこに置き、鍬を取つてほりはじめました。私はこやし俵の上へすはつて、父がほつて居るの

を見て居ました。父は少しも休まず、せつせとほつてたちまち二作ほつてしまひました。私はもうほる元氣もなく、父のつかれない様子を見て、「よくあんなに休まずせつせとほれるかな。」と思ひました。父は「あと一作だ、お前ほれ」と私に鍬を、よこしました。いやいやうけ取つて、やつとこ、さつとこ、つかれをがまんしくほ

つてしまひました。その中父もこやしをやりをへましたので、つかれきつた足を、ひきづりながら、父の後について歸りました。

山の晝飯

秋田縣仙北郡荒川村上荒川

岩谷 貞三

(十五才)



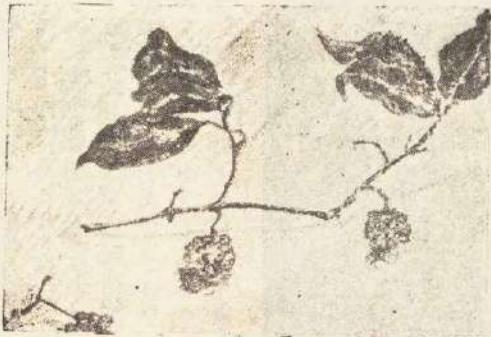
「景風」  
間がながく、晝までの時  
つた。やがて兄さ  
んが、大きな杉の  
木のそばへ枯枝や  
大きい薪など、山  
のやうに積みあげ  
た。そして薪の下  
からマツチで火を  
つけた。はじめは

細々と白い煙が上つてゐたが、火はだん／＼燃えて恐しい勢を出して燃えだした。真白な煙がもくもくと限りなく湧き出る。まるで雲のやうだ。そして煙の間々から蛇の舌のやうな赤い炎がペロ／＼出る。「やあ燃えた／＼。」僕は思はず叫んだ。

皆は焚火を取まいて辨當を開いて、いろ／＼な話をしながら食ひはじめた。僕も大きなにぎり飯にかちりついた。ばかにうまい。いつもの御飯とはちがふやうだ。そして僕は一番先に食ひおはつた。皆はまだ半分位しか食べない。なんだかはずかしいやうな氣がする。僕はごろりとそのまゝ横になつて、前の雑木山の峯をしづかに流れ行く白い雲を見つめた。

「木のみ」

東京市小石川四丸町  
日向 桃子（十六才）



妹の病氣

和歌山縣伊都郡九度山町宇九度  
山高一

福岡 鐵男

此の間僕は友達と栗拾ひに行つた。そしてあちらの栗の木こちらの栗の木とさがして家へ歸つてから「おかさん頭がいたい。」と言ふと母は「どうしたんだい、頭がいたかつたら寝りよ。」と云つて妹を床に寝せた。僕と兄さんも妹の話すことからのどけではないかと心配してゐたが、母は「たゞ頭がいたいのだらう。」などと云つて僕や兄さんの云ふ事は信じてくれな。しばらくすると妹は「のどがいたい。」と細い聲で云つた。すると姉さんが来て見たが何のかはりもないと見えて「のどけではない。」と言つて仕事に取りかかつたが妹は「いたい。」と時々云ふのであつた。母は「僕に鐵男おとうさんの所へ来てんか。」と言はれたので大急ぎで父の所へ行つた。父が来てのどを見たが「何で

すと妹はだまつてねむつてゐた。其から父と二人で語り合つた。「注射したの?」「した。」「何時じぶ



「春」

和歌山縣妙寺町高二  
大岡 秀吉

ん」「昨日の四時じぶん。」「だれが醫者をたのみにいつたの。」「うん。」「どうしてたのみにいつたの。」「兄さんが行つた。」「其の中に母が「朝飯をたべて學校へ行きよ。」と云つたので僕はしぶ／＼我が家を後にした。

私の日曜日の日記

神奈川縣逗子新宿  
茅原 久美

「久美さん。」金田さんの聲がしたのでびつくりしました。「久美ちゃんはまだ寝てます。」母さんが言つたのではづかしくて飛び起きました。外へ出て見たら、もう金田さんはいらつしやいませんでした。兄さんとお庭をそうじしてゐると、電報が来ました。大阪へいつていらつしやるお父さんからで、「コンヤ八ジキタクス。」と書いて

もない。」と云つた。でも僕と兄さんとは醫者に見せた方がよいと云つたが父母は聞入なかつた。其の翌朝僕は學校へ行つて妹の顔を忘れて勉強や運動をしてゐた。授業もをへて家へ歸ると、母は力ない小さな聲で「のどけの始だよ。」と云つた。其時はどうしてよいかわからずたゞ頭がぼうつとしてしまつた。「醫者に見てもらつたの。」「さうだ。」「四時頃?」「四時頃」との話をかはして僕は涙ながら庭へ出た。さうして居る間にお日様は遠慮なく西の山へ落ちた。夕風がほ／＼とほ／＼をなせてゐる。其時は昨日の事を思ひ出しては涙をふいてゐた。父に「家の中へ入れ」と云はれたので落ちる涙をおさへて入つた。父は「もうじきなほから泣かないでもい。」と云つて僕をなぐさめた。母に「夕飯だからたべてねりよ。」と云はれたので僕は床についた。次の朝目をさま

ありました。お晝から金田さんが又いらしたので、姉さんも兄さんも入つてトランプをして遊びました。八時になるとお父さんをむかへに停車場へ行ききました。汽車が来たやうなので大急ぎで歩いた。姉さんのなをが切れました。こまつてゐる時さいとう先生が向ふから来てにこ／＼しながら「どこへ行くの。」つておき／＼になりました。停車場へいつて見たらもう誰もゐませんでした。「つまらないわねえ。」と姉さんと話しながら歸る途中、向ふから来た傳屋さん「おむかへの方ですか、もうお歸りになりましたよ。」といひました。うれしくつて飛んで歸りました。お父さんのお土産を食べながらお父さんに大阪のお話をき、ましました。お父さんはわざと大阪の言葉を使つたりなされるので、おかしくつて皆笑つてしまひました。



新らしく出た本

イタリー童話集 (永橋卓介編)

世界童話叢書の第七編として出た本書は、今まで次ぎ／＼に出たものとは、ガラリと趣きのかはつた、南歐の麗しい詩の國と欲はれる、イタリーの傳説童話を集めたもので、明るいつづつと湧つてゐる、花咲き匂ふ樂園のやうな、情趣の豊かなものばかりです。装幀は相かはらずの美しさで、好評を博すこと、思はれます。四六六三〇四頁、三色版外挿畫數葉、定價壹圓五拾錢、東京市外上野池田二八、金蘭社發行。

支那童話三十篇 (澤田青花著)

支那の有名な本から選んで、それを著者のなだらかな筆で童話とした、面白いものを集めてあります。著者のほし／＼に、有名な支那童話をあつめて、研究に資するといふよりは、かへつて人に知られてゐない面白ものを集めた、とあるのを見てもその内容がうかがはれます。挿畫は水島先生の得意の筆で、話の意が現はれてゐます。四六六二七四頁、三色版外挿畫數葉、定價壹圓貳拾錢、東京市麹町區四番町七、第一出版協會發行。

飛んで来い (濱田廣介著)

童話とは、心の詩的な表現である、とは著者の云ふ所、本書の童話がいかに詩趣に富んで、そして意味の深いものであるかわかります。この本は子供ばかりでなく、大人が読んで云ひ知れぬ味があつて中々面白い。中にも「葉きん」の花は、い人形」など、最も上乗のものと思はれます。初山滿伯の装幀挿畫、自由に獨得の筆が振つてあります。四六六一五二頁、挿畫十數葉、定價壹圓貳拾錢、東京市牛込區神樂町二ノ一、義文閣發行。

不思議國めぐり (大戸喜一郎編)

世界少年少女名著大系の二十二編は本書です。その名の通り、不思議な夢物語りで、原書は「不思議國のアリス」と云ふ名で、アリスと云ふ一少女のお話です。英國の少年少女は、バイブルの次ぎには、必ずこの書を讀むと云ふほど有名な本です。この本を一度讀んだ人は、イギリスの少年少女と同じやうに、この本が大好きになるであらうと思はれます。挿畫も原書にある奇抜な面白いのばかりを取り入れてあります。それで他に眞似も出来ない廉價なことは、この本を手にする人の驚くことではありません。四六六一九六頁、三色版外挿畫數葉、定價九拾錢、東京本郷區坂町、金の星社發行。

自由畫掲載外佳作

- 高木 實(東京) 關根トヨコ(神奈川)
松浦運四郎(神奈川) 關根トヨコ(神奈川)
雨宮 慎之(山梨) 岩谷 天藏(秋田)
岡村 眞船(東京) 森田 友晴(和歌山)
中尾キ子(鹿児島) 山村加枝子(熊本)
東 政二郎(京都) 津村 清瑠(東京)
高橋 健一(埼玉) 樋口 志郎(兵庫)
森本 康雄(熊本) 河野正三郎(朝鮮)
藤井 進吉(京都) 中村 文(大阪)

幼年詩掲載外佳作

- 鶴岡 きく(千葉) 沖津 義知(東京)
ナカトヘイ三(東京) 森 茂治(山形)
鈴木 三郎(千葉) 齊藤 茂治(山形)
深井 博重(秋田) 河村 都山口(山口)
木村 勇(山口) 御園 成次(千葉)
増田 重(千葉) 伊藤 芳雄(千葉)
梶原 正一(山梨) 肥後 本男(東京)
岩谷キヨノ(秋田) 石塚 万三(千葉)
森 稔(千葉) 北島 よし(千葉)
今井 きく(千葉) 木村 勇(山口)
澤田 三保(山梨) 湯淺 長治(千葉)
清水 潔(東京) 岩田 繁雄(岐阜)
石川 三郎(千葉) 増田 利里(千葉)
中尾 キキ(鹿児島) 豊島 泰山(山梨)

綴方掲載外佳作

- 遠山 茂登(長野) 松岡 秀芳(東京)
岡々田坊太郎(東京) 星海 晚歌(山形)
三島 定一(島根) 葛木 和夫(高知)
河野 藤湖(東京) 川口 洋(東京)
夢本 七郎(神奈川) 宮尾 進(臺灣)
名和 暢兒(福岡) 阪村 潤(大阪)
辰橋多助男(静岡) 中野 利雄(大阪)
島本 夫(愛知) 野坂 治(福岡)
五味くに三(山梨) 河邊千み子(神奈川)
藤野二九緒(大阪) 原 勝利(東京)
高橋徳三郎(茨城) 保坂 惠三(東京)
坂口 生芽(千葉) 川島 秀雄(東京)
高橋 長一(青森) 鶴崎 公雄(福岡)
肥後 一郎(新潟) 沖津 清瑠(東京)
中島 夢然(新潟) 鈴木まさし(静岡)
小谷 時信(鳥取) 西野 光兒(岩手)
福山 市郎(大阪) 田中 義明(和歌山)
鈴木 武夫(大分) 鈴木 眞哉(東京)
中川 智翠(佐賀) 清水 潔(東京)
松林 智雄(兵庫) 村山俊太郎(山形)
岡本 露雄(兵庫) 中坂石次郎(東京)
高山 誠一(東京) 軍司 麗水(茨城)
成宮 妙子(東京) 小堀 義夫(静岡)
島木 秋麿(秋田) 大島 秀夫(静岡)
菊地 養治(岩手) 小野伴三郎(新潟)
小山 慶子(東京)

童謡掲載外佳作

- 阿部 健助(秋田) 吉川 行雄(山梨)
大島 治吉(静岡) 中村 武男(東京)
福井 藤秋(東京) 木村 春美(熊本)
池谷 好樹(東京) 林 潮花(山形)
河野 祇吉(新潟) 高 桂 繁(宮城)
渡邊流路郎(新潟) 杉山 金湖(神奈川)
岡山 清一(和歌山) 星野 六郎(茨城)
高橋 幸枝(三重) 大野 好一(兵庫)
玉置芳太郎(和歌山) 高橋 健一(兵庫)
大長 千春(岡山) 鷲尾 静雄(北海道)
森下 寒一(静岡) 進藤 卓三(秋田)
千代田愛三(東京) 加藤 政一(東京)
齋藤 邦一(和歌山) 進藤 正雄(秋田)
鎌北元太郎(埼玉) 中尾 清治(鹿児島)
中林 正雄(京都) 湯淺 長治(千葉)
川端 俊(東京) 長尾あさ子(東京)
豊島 泰(山梨) 小野 一男(岩手)
高木 實(東京) 田中 喜一(東京)
古城 保之(廣島) 藤澤 一郎(東京)
谷口 本一(愛知) 宮川 敏助(神奈川)
立山 修三(福岡) 織田 奏子(福岡)
松浦運四郎(神奈川) 金行 義真(廣島)

新誌友名簿

- 坂井 澄晴(和歌山) 都是工場女子寮(京都)
小口すま子(長野) 大浦 勇吉(東京)
大熊 清司(埼玉) 清水 三郎(香森)
岩田元太郎(三重) (以下次號)

童話掲載外佳作

- 長谷川行雄(東京) 中林 繁(京都)
石井 佐市(三重) 大野 好一(兵庫)
半田不二夫(茨城) 藤野富久雄(大阪)
松井 隆三(神奈川) 小林純一郎(東京)
渡邊 史郎(静岡) 井坂 稔(香川)
矢野 義雄(秋田) 市川 實(北海道)
久野 義曉(宮崎) 菊池 克郎(岩手)
笠井 正巳(大阪) 奥田二三夫(東京)
中村 一郎(東京) 後藤 義夫(東京)
軍司 麗水(茨城) 池澤鶴三郎(東京)
古木マサ子(山口) 菊池 養治(岩手)

子供篇

- 川島 秀雄(東京) 増田 穂(千葉)
細田チヨ子(東京) 山下マメ子(山口)
長鳴 實(千葉) 義澤 菊子(神奈川)
鈴木 和作(神奈川) 松浦トミ子(山口)
志村 明正(神奈川) 流谷 好雄(神奈川)
後藤 義雄(岩手) 島澤 末藏(千葉)
矢田 沙子(山口) 末弘 房子(山口)
島野 半平(神奈川) 鈴木 武男(栃木)
東 政二郎(京都) 伊庭野政夫(北海道)
鶴崎 公雄(福岡) 古城 保之(廣島)
高木 實(長野) 前之園利定(鹿児島)
北原 久美(神奈川) 石田 武男(栃木)
茅原 貞三(秋田) 早川 松次(東京)
岩谷 貞三(秋田) 埴田 君江(山口)



# 出版だより

## ◇青い鳥(名著大系23)いよく発行

大木雄三先生の苦心になつた『青い鳥』が立派な本になつて出ました。装幀と挿畫は松政健次郎畫伯が、大層な努力をされましたので、いよく此の本の價値を高めました。メーナルリンクの『青い鳥』は誰でも喜んで置かなければなりません。その位有名であり、面白いものである事は今更いふまでもありません。

## ◇リンコロン(偉人傳大系4)いよく発行

第三篇のネルソンを出版してから、一寸後の発行に暇がかりましたが、この『リンコロン』は一度に集まりましたから続々と発行になります。五編が『太閤秀吉』六編が『ナイチンゲール』この二冊は六

月末か七月はじめに出版の豫定です。編いて八篇を出し、十篇まで近い内に出ます。

皆さんが、お読みになる立志傳として、最もおすめしたいのはこの『リンコロン』です。最も模範的少年立志傳といふことが出来ます。

先づこの本の最初にはられる『リンコロンの生れた家』の畫を御覽下さい。荒野の中に一つ、丸太小屋が立つてゐます。それも本當に小さな、見るかげもないひどい小屋です。この小屋の中から偉人リンコロンが生れたのだと思ふと何ともいへない深い感動を受けます。本當の土百姓の子として育つたのですから、文字を書ひたつとも紙一枚買ふことが出来ません。止むなく雪の上に文字を書いて置ふのでした。かうして苦しい境遇の中から自分の運命を開いて

## ◇リンコロンの挿畫と鈴木保徳畫伯の作風

『リンコロン』の装幀と挿畫とは鈴木保徳畫伯の努力に成りました。はつちつとした力に満ちた畫です。しかも、非常に創意のあるもので、何處へ出しても、立派な挿畫として誇り得るものだと思います。偉人リンコロンの傳記は、この挿畫を得て一段と引立つたといへませう。

## ◇爲朝一代記 近刊

鎮西八郎爲朝の一生は、馬琴の『弓張月』によりて一篇の物語りとして傳へられてゐます。三島霜川先生の『爲朝物語』は金の星社上に掲載されて大層な評判でしたが、いよくこれを一冊にまとめ、近日發行される事になりました。

## ◇ジャンバルチャン(あゝ無情) 近刊

これも金の星社上で大評判でしたが、近く一冊の本として發行になります。久米敏一先生の『あゝ無情』は有名な佛國文豪ユートーの作を少年少女の爲に書いたものとしてこれ程理想的にかんりやくに、面白く紹介されたものはありません。金の星で發表された以外に、尚後篇を書き加へて一冊とされたわけですから、一層興味を深くなつたわけですから、近刊。

## ◇沖野先生の『山六爺さん』の事

最近の『金の星』の愛讀者の方

# 金の星誌友募集

三島霜川先生の『太閤秀吉』いよきに模範的書物となり得る事信じます。よく六月末には發行になりま

金の星の誌友を募集致します。誌友には色々の特典や便宜があらま

水島爾保畫伯をわづらはす事に さうさうこれ程よく賣れた本は少

## ◇太閤秀吉(偉人傳大系5) 近刊

藤井清水先生はいよく上京されて今や東都樂壇で大活動なされてゐます。ラヂオでも度々放送されて

# 懸賞創作募集

自由畫……………山本 鼎先生選  
 幼年詩……………若山 牧水先生選  
 綴方……………編輯部選

【注】 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりに書いてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原種用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號締切は六月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は九月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地の星社。

【注】 童話 童話は十五行以内、童謡は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓づつ、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

野口 雨情先生選  
 齋藤 佐次郎先生選

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢 五厘  
 三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢  
 半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢  
 一年分十二冊（送料共）四圓八拾錢  
 但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。  
 振替口座東京五九五六番  
 送金は振替が一番便利で御座います。御注文は必ず前金で御拂込み下さい。切手代用は「登録切手」一割増しです。▽第何巻第何號よりと書いてください。▽住所姓名ははつきり書いてください。  
 廣告料は御照會次第お答へ致します  
 大正十五年六月九日印刷納本（毎月一回）  
 大正十五年七月一日發行

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎  
 東京市本郷區動坂町三五九番地  
 印刷所 小端 安之助  
 東京市本郷區動坂町三五九番地  
 安 進 堂  
 電話小石川五三三八七番

世界少年少女名著大系 (21) 金の星社編・裝幀 寺内萬治郎畫伯

# 母を尋ねて三千里(冬)

四六判箱入美本  
 内容一九〇頁  
 挿畫三色版外數頁  
 定價九拾錢  
 送料六錢

本書は伊太利文豪アマチスの作った世界的名作であります。「クオレ」の名で、全世界の少年少女から熱烈な愛讀を受けました。さて、「クオレ」は何によつて有名かといひますと、「月次講話」といふ幾つかの物語りがあるからであります。で、本書は、その「月次講話」の中で最も有名であり、又最も讀んで見て面白いものばかりを集めました。「母を尋ねて三千里」「難破船」「父ちやんの看病」「少年斥候」「少年筆工」「ローマニヤの血」「少年鼓手」等何れも不朽の名作であります。三千里の道を遙々と母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を捨て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語りばかりです。名著大系の第二十一篇として發行された本書こそ、是非皆さんの一讀せねばならぬ偉大な名著であります。

東京 金の星社  
 東京 振替五九五六番  
 町 坂 動 郷 本 京 東

わたしは齒をみがきます。

ライオンねりはみがきで。

朝も、

夜も、

みがきます。

猫も真似して

みがきます。



坊ちゃん嬢ちゃんのお使ひになる

歯ブラシは、

ライオン歯ブラシが宜しう御座います。